魔法先生ネギま!～麻帆良騒乱物語～

イグニス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！～麻帆良騒乱物語～

【Ｎコード】
Ｎ９７５５Ｙ

【作者名】
イグニス

【あらすじ】
時期外れの発光現象に伴い、９人のヒトが麻帆良へ降り立った。
これは訪れた９人と英雄の息子、そして彼らを取り巻く人達の物語である。

1時間目：やって来た者達（前書き）

と言う訳で以前活動報告に書きました『超絶駄問題作』の投稿です。
当作品は『魔法先生ネギま！』の世界に、拙作から主人公一同４組を突っ込んだ無茶苦茶な二次創作です。
当拙作では、既に公開済みの同作者作品より技や設定を流用しております。
これは盗作ではありませんのでご了承ください。

お読みになる前に必ず【小説情報】及び【タグ】をご確認の上、１％に満たない数値でも納得できない点がおありでしたら即座にブラウザバックをお願い致します。

独自解釈を多大に含むのでご注意ください。

1時間目：やって来た者達

「これは……！」

彼は慌てていた。

年の割にやや老けた顔に驚愕の表情を張り付け、くわえていたタバコは地面へ落ちている事も気付かぬほど慌てていた。

彼の名前は高畑・T・タカミチ。

ここ麻帆良（まほら）学園都市にある中学校の教員で、生徒思い良い先生として知られている。

彼のモットーは冷静だが、今の彼に冷静さは欠片も無かった…目の前で起きている、今この瞬間には決して有り得ない現象が原因で。

「馬鹿な…この時期に世界樹が発光現象を起こすなんて…」

世界樹。

それはこの麻帆良学園都市の中心に聳（そび）え立つ、樹齢に換算すると２００年はくだらないほど昔から存在する神木で…十数年に一度、大地と大気のエネルギー…いわゆる魔力により光を発し、発光現象と呼ばれる事象を起こす。

だが高畑教諭の言う通り、この世界樹の発光現象は…十数年に一度のスパンで起こっており、前回の発光がちょうど４年前…研究結果を元に言えば、最低でも向こう１８年は発光現象を起こさないはずだった。

「…こうしちゃいられない、学園長に報告しないと」

言って彼は、ようやく足元のタバコに気が付くと…それを踏み消して拾い上げ、スーツのポケットから取り出した携帯灰皿へねじ込み…足早に立ち去った。

後に彼(タカミチ)は語る。

『何故僕はあの時、自分で少しでも調べておこうと思わなかったのか』と。

同時刻、同町内某閉鎖空間内。

そこはリゾートと称しても過言ではないほどの景色を持つ、白砂が眩しい波打ち際。

周囲は全くの無人。

いや、遠景に見える白亜の城には住人が居るのかもしれないが。

―パシッ！―

―パシパシッ！―

そんな誰も居ない空間で突如、中空放電現象が発生。

―パシパシパシパシ…―

―バチバチバチバチバチ―

やがて放電現象はその規模を増し、空間に干渉を始める。

―ズズズズズ……―
―…ゴゴゴゴゴ！―
―シュバッ…―
―ッズガガガガガガガガァァンッ！―

同時に何故か…青天の空にある太陽から世界樹から一条の光が放たれ、それまで空間放電現象を起こしていた場所に直撃…直後、激しい爆発音と共に夥しい砂煙を巻き起こした。
その爆発は波打ち際の砂浜に、半径４ｍのクレーターを作った。

「……ぐぅ、いててて」

「何よ、今のは…」

「……あれ？　ここどこだ？」

しばらくの後、砂煙が晴れたその場所には…それぞれが特徴的な格好をした、数人の男女が座り込んでいた。

「……ぬ、おい…大丈夫か？」

やがて彼等は、自分以外にもこの場所に人がいる事に気が付き…互いが互いの心配を始める。

「あ、あぁ…すまん、頭がクラクラする以外は大丈夫だ…そっちは？」

「私も大丈夫…貴女は？」

「私も問題ないわ…よいしょっと」

衣服にかかった砂埃をパンパンと払いちつ、まず最初に立ち上がったのは長くてまっすぐな蒼い髪を持つ…グラビアアイドルが裸足で逃げ出すようなスタイルをした女性だった。

「で、ここはどこなの？」

「それが分かったら苦労しないって…お～、いて…雪蓮（しぇれん）の一撃をモロに受けたみたいな感じだな」

次いで立ち上がったのは、身長１８０ｃｍを超える長身に…全身に無数の傷跡を持つ、赤髪の青年。

「砂浜…か？　あっちに城みたいなんがあるけど」

「……現状把握より先に、自己紹介じゃねぇか？」

次は黒髪で、左眼を縦に斬られたような傷跡を持つ…赤眼の青年。

「そうね…じゃあ自己紹介から始めましょうか」

黒髪赤眼の青年の言葉に賛同したのは、蒼髪の女性に負けず劣らずなスタイルをした…赤髪褐色肌の女性だった。

彼女の言葉を受けて、それまで沈黙を守っていた他の面々もゆっくりと立ち上がる。

「じゃあ俺からな…俺の名前は御鏡（みかがみ）　涼輔（りょうすけ）」

「私の名前は御鏡　綾子と申します…涼輔の義妹です」

左眼を上下に縫うような傷跡を持つ、黒髪赤眼の青年が御鏡涼輔。
そのそばに立つ、黒髪蒼眼の巨乳美少女が御鏡綾子。

「んじゃ次は俺達だな…俺は姓を呂、名を堂、字を戦牙と言う」

「私は姓を徐、名を庶、字を元直と言います」

「私は姓が孫、名を堅、字を文台って言うの」

全身に傷跡を抱えた体を持つ、赤髪赤眼の青年が呂堂戦牙。
その右脇腹に縋り付くように立つ、銀髪の美しい…ロリ魔乳の少女が徐庶元直。
そして徐庶とは逆の位置に、縋り付く訳ではないが威風堂々とした格好で立つ桃髪の巨乳美女が孫堅文台。

「……色々突っ込みたい名前が聞けたけど、次は僕達だね…僕は熱風　神也だ」

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー…長いからキュルケと呼んでちょうだい」

黒眼黒髪の、この中では一番身長の低い…大人しそうな少年が熱風神也。
その神也をまるで宝物のように抱いて立つ、赤髪褐色肌の巨乳美女がキュルケ。

「私はルナティーア・ライントゥーカー、私も長いからルナって呼んでね」

「私はセイラです」

蒼髪金眼でキュルケに匹敵する巨乳を持つのがルナ。
その脇に立つ色白の、徐庶やキュルケを超える巨乳を持つ少女がセイラ。

全員が自己紹介を終えたが、場に残ったのは微妙な雰囲気だった。
それはそうだろう…己以外の、ごく親しい者を除いた全員があり得ない格好をしたまま黙りこくっているならば。
互いが互いをこう思っただろう…『お前ら何処の仮装行列だ』と。

「…ねえ孫堅さん、いくつか質問してもいいですか？」

そんな中で口を開いたのは、キュルケに抱き上げられたままの少年…神也だった。

「えっと、シンヤ君…でいいのかな？」

「はい」

「ええ、どうぞ」

「孫堅さんは後漢時代、建業出身の武芸者で…孫策・孫権・孫尚香と言う娘さんがおられませんか？」

「「「…えっ？」」」

神也の質問に反応したのはなぜか3人。
1人は言わずもがな質問を受けた孫堅本人だが、同時に涼輔が反応

した。

「孫策・孫権・孫尚香が娘？」

「って、ちょっと待て…それじゃ彼女は恋姫の？」

涼輔のリアクションに肯定の意を返す神也。
当然、置いて行かれた孫堅本人・徐庶・呂堂・キュルケ・ルナ・セイラの各人は頭にはてなマークを浮かべている。

「……いや待て、存在感アリアリでこの疑問が出て来なかった自分を恥じたい…神也、その…キュルケさんは……」

何かを思い出した様に言葉を紡ぐ涼輔。
その意図を汲み取った神也は、またもや肯定の意を返した。

「って事は神也自身がテンプレ？」

「ええ、テンプレです…事故型の」

「憑依じゃなくて？」

「はい、転生…から召喚と言う変則系ですが…それもチート仕様の」

「ちょっと待て、転生だって！？」

「どうかしましたか？　呂堂さん」

少ない単語で会話を成立させていた神也と涼輔だったが、転生と言う単語に呂堂が食いついた。

「事故型のチート転生って事だよな？」
「です…スペック的には地上最強（オーガ）の生物を超えますが」
「オーガ超えとか…俺と一緒かよ…」
「えっ！？」
呂堂の言い放った『俺と一緒』と言う言葉に、今度は綾子が食いついた。
「それってどう言う…」
「俺もさ、事故死亡型のチート転生者なんだわ…本名を呂堂　刃（じん）って言うんだ」
「うわ、完璧な日本名じゃないですか！」
「だから日本人なんだって！」
「ねえシンヤ、詳しそうだから説明してもらっていい？　話がさっぱりなのよ」
涼輔・神也・刃で盛り上がる最中、やや不満げな顔をしたルナが口をはさむ。
そしてルナの意見に激しく同意する綾子・孫堅・徐庶・キュルケ・セイラの５人。
「いや説明するにしても、神蓮（しぇんれん）や蘭里（らんり）には理解できない…いわゆる

『天の言葉』が大盤振る舞いだろうからな」

「ふむ…なら裏技を使おうか……」

「裏技？」

「ああ、えっと…『汝の言葉を我に繋ぎたまえ』」

言って手を天に翳す涼輔。
直後、彼の手から黄緑色の光が玉となって出現…それが居合わせた全員を、ドームで包むような形になった。
その現象に言葉を無くす、綾子以外の一同。

「涼輔さん、今の…」

「ああ、俺の居た世界の魔法だよ」

当の涼輔は何でもないと言わんばかりの態度だが、何故かルナは慌てている。

「ちょ、今の何て魔法なの！？　いきなり撃たれたから精神的魔法抵抗（スト）出来なかったじゃない！」

「…ああ、慌てないでくれ…今のは俺の居た地方で使われていた『万語解釈（ボーダレスワード）』って魔法で…この魔法が効いている間は、互いが話す全ての言葉が互いに全部理解できるようになる魔法さ」

言って涼輔は、今使った魔法の効果を説明する。
言語解釈が難しい種族間でも、互いが会話出来る様にする為の魔法だと言うとようやくルナは落ち着いた。

「なるほど…私の居た地方にあった古代魔法の『言語（ランゲージ）』って魔法と同効果な魔法なわけね？」

「恐らくな」

「…で？　その魔法とやらで裏技を使うって涼輔殿は言ってたけど…」

話を進めようとする孫堅。
そばにいる徐庶はどこからか竹製の巻物を取出し、いつの間にか摺った墨を含ませた筆を準備している。

「まず大前提で言うんだが、今から話すのは実証された事実であって俺の狂言じゃない…頭ごなしに否定する事はしないでくれ」

「…ねぇシンヤ、ミスタ・リョウスケの言ってる事…どこかで聞いたような言い回しなんだけど？」

「ああミス・キュルケ…いや、ミス・ツェルプストーか？」

「キュルケでいいわよ」

「んじゃキュルケ、俺の事は涼輔と呼んでくれ…さて、今言ったのはシンヤが実際に君に言った言葉なんだろう？」

「ええ」

「じゃあ事故死亡型異世界チートトリップの先輩である神也に語ってもらうとしようか」

「うわ、それってズルいですよ涼輔さん！」

言葉では涼輔を非難しつつ、それでも説明を始める神也。
彼には貧乳拒絶体質と言う極めて稀有な体質があるのだが、居合わせた女性全員が平均以上の巨乳だった事もあって発症はしていないようだ。

神也は言った。

世界とは、自己が認識出来ていないだけでいくつも存在する。
世界には軸と言う物が定まっており、その軸を中心として様々な可能性で未来や過去が分岐した世界もある。

「正史と外史の関係か？」

「です」

刃の言う正史とは自身が認識し、知識として有している現状の世界。
対して外史とは、その知識を元に可能性の数だけ枝分かれした…いわゆるパラレルワールドの事。

「僕が知る限り、そちらにいらっしゃる孫堅さんと徐庶さんは…人間が作り出した空想の世界の中だけの存在です」

「つまりそこに『ゼロの使い魔』の登場キャラである【キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー】さんが実在しているのと同義だ、と？」

「ええ、仰る通りですよ綾子さん」

世界は神と呼ばれる存在、あるいはその世界の管理者と呼ばれる存在によって管理されている。
この神ないし管理者は、自身が管理する世界の人間の想いを元にまた新たな世界を作る。

「想いを元に、新たな世界を？」

「ええ、例えば呂堂さんが『孫堅さんが老いるまで健康に生きる世界を』と願えば、その世界の管理人はその想いを受け…孫堅さんが老衰以外では死なない可能性を実現出来る世界を構築します」

「そうして生まれたのが恋姫の世界、だと？」

「正しくは恋姫の外史、更に言えば今言ったのは可能性の１つに過ぎないんですが」

パソコンの前に陣取ったり、手にした携帯等で閲覧している小説やアニメ・映画と言ったモノは…そのモノに込められた多くの想いが管理人へ届き、そう言った世界を作る。

「けど、その世界が存在すればいいのにと願った本人は…よほどの事がない限り、その世界へ行く事はおろか…その世界を認識すら出来ません」

「そこで出てくるのが管理人の存在、っと」

管理人はその世界を管理する者。

世界を管理すると言う事は当然、その世界の魂も管理すると言う事。

「俺が聞いた話だと、その世界で管理できる魂の最大上限は世界毎に決まっていて…神とか管理人は、その上限数の中で魂を回し…いわゆる輪廻転生をさせているそうだ」

「呂堂さんの仰る通りです……ただ、神とて完璧ではないのでミスを起こす事もありまして…そのミスにより、本来ならば正しく輪廻転生できる魂が…正しく輪廻転生できなくなる場合があるんです」

輪廻転生できなくなった魂はどうなるか、答えは消滅である。消滅に至った魂は二度と輪廻転生する事が出来ず、結果としてその世界で稼動可能な魂の最大上限数を減らしてしまう事になる。

「輪廻転生できなくなる要因の最有力は、その人物に定められた寿命より速く死ぬ事」

「つまり…神の意志にそぐわぬ死を遂げた場合、って事？」

「理解が早くて助かります、ルナさん」

神・管理人（じぶんたち）の定めた意思（スケジュール）にそぐわず死んだ、魂となった者の存在は…管理者側からすれば非常に拙い事である。

何故なら魂の消滅はその世界へ不調をきたし、最終的にその世界は崩壊するからだ。

「なので管理人はその崩壊を防ぐ為、その者が存在した軸と似たような条件を持ち…かつ、輪廻転生の輪の魂保有可能最大上限数に余裕のある世界へその魂を送り込み…その者が死んだあとの世界へ調整をかけるんです」

「どういう事？」

「例えば、想定外となった死因が『誤って毒キノコを食べた事による中毒死』だとしましょう…なら送り込まれた先の外史では、その者が毒キノコで中毒死する可能性が極限にまで減らされた世界だ…と言う事です」

ただこうして、送り込む世界がある魂なら事態は良い方だが…最悪の場合、条件に適合しないと言う事態もある。
例えばさっきの例で言うならば、条件的には主軸とした世界とほんのわずかな差しかないが…いずれの世界でも毒キノコによる中毒死と言う可能性を下げる事が出来ない世界しかないなど。

「そう言った場合に取られる緊急措置こそ、僕や呂堂さんが経験した『異世界転生』と言う訳です」

その者が主軸とした世界とは、世界観が全く異なる世界へ魂を送り込む荒業。
当然その世界とは元来の性質が合わない為、迂闊に送り込めばあっという間に死んで魂の状態へ戻り…元の世界が調整出来ていないため、結局は消滅…最終的には主軸となった世界はおろか、緊急措置として送り込んだ世界をも崩壊させてしまう要因となる。

「だから管理人は、その予期せぬ死を迎え…異世界へ送り込むと決めた魂を、管理人権限で強化するんです」

「魂の強化…」

「ええ、送り込まれる世界が戦乱の最中にある世界なら武力や体を

強化して才能を与え…送り込まれる世界に魔法があるなら、魔法に対し適性を高めておく…こうすれば送り込まれた先の世界で適性を得る事が出来、その世界での予期せぬ死亡を阻止…ひいては主軸となった世界の調整にかける時間を得る事が出来、最終的には２つの世界を救う事になるんです」

「ただこの、与えられた才能や適性が…常人には到底成しえない域に達している事が多い事から…魂強化型転生者を『なんら鍛練せずに、楽して最高峰の力や能力を得たズルい者』と言う意味をチートと呼ぶんだ」

刃の端的な説明に納得顔の女性陣。
どうやらチートと言う横文字も、後漢時代出身である孫堅や徐庶にも『万語解釈（ボーダレスワード）』の効果でしっかり理解できているようだ。

ここまでの講義を竹の巻物へ書き留める徐庶を見ながら、神也はそう言った。
男性陣は全員が近代日本出身の為に理解しているが、女性陣は出身年代はおろか世界までもが違う為に理解の進捗は芳しくないらしい。

「さてここまでで質問はあるかな？」

やがて神也がそう言った時、それまで口を開かなかったセイラが挙手をした。

「そのチートとテンプレってどう関係があるの？」

「うん、それはこれから」

さて、想いを元にした世界が存在すると言うのは先述の通り。
だがその世界の根本構造…言わば脚本を作るのは一個人であり、それを別視点で見るのもまた一個人であるゆえに見解の相違が起こる。

「例えば、C氏が書いた脚本を読んだA氏が『あの時あそこでアイツが何々をしていればよかったのに』と言えば当然B氏から『いやアイツはあそこで何々をすべきじゃないんだ』と言う意見も出る」

このB氏が、C氏の書いた脚本の当該部分を認めず…その部分を、B氏にとって都合の良い形式に改ざんした脚本を書き…B氏改編の新脚本【C'（シーダッシュ）】が出来る。
C'（シーダッシュ）を自分で読んだB氏は当然その出来に納得するが、今度はD氏がその脚本じゃダメだと言い…今度はC'（シーダッシュ）を改編し【C"（シーダブルダッシュ）】を書き上げる。

「こうして、捉える者が一個人であるが故に原本となった『C'（シーダッシュ）』は無数の改編本を生み出すんだけど…長い目で見れば結局はある程度の枠組みに収まってる事が多いんだ」

「ある程度の枠組み？」

「…例えば『ゼロの使い魔』と言う物語を基本構造にする場合、そこから生まれるC'（シーダッシュ）は改編者の意図が加わった物となっているんだけど…多くの場合、自身にコンプレックスを持つ改編者自身が…コンプレックスの無い自分、つまり『もし自分が並ぶ者の存在しない最強の存在だったら』と言う妄想的存在を作り、それをルイズに召喚させる…となる改編本が出来る」

「分かりやすい補足ありがとう涼輔さん…そう、この『最強と設定

した空想の自分を貧乳(ルイズ)に召喚させて』と言う設定をテンプレート、雛形って意味の言葉を略してテンプレって言うんだ」

「『最強となった自分がもし、この世界に行けたら』と言うテンプレを元にして『最強』つまりチートな存在が生まれるんだ」

もちろんその『最強となった自分』が存在する世界はC′(シーダッシュ)なので、どれだけ改編しても原作にはまるで影響を及ぼさない。
例えば主要登場人物全員を抹殺し、その世界で暴君となろうが…ヒロインを主人公から取り上げて、理想のハーレムを作ろうが…原作にはなんら影響はない。

「……／／／」

「…何か思う所があって挙動不審な呂堂さんはさておき、このテンプレチートキャラ…テンプレ設定が無ければ、何かと同じだって事に気付けると思うんだけど…」

「……あ、もしかしてさっき言ってた『魂強化型転生者』の事？」

「正解」

とある正史を軸とした外史…仮称『Y軸外史』に、誰かの想いが反映された雛形世界…仮称『Z要素含有のY軸外史』が出来た。
後に時間を経た別世界…仮称『X軸正史』で、輪廻転生出来ない魂が出た。
緊急措置として、同じX軸に存在する別の外史…仮称『X軸外史』に転生させたいが、X軸外史は既に魂が飽和間近。
ならばY軸外史へ行ってもらうが、Y軸外史は危険なので魂を強化して行ってもらおう。

あ、でも予定のＹ軸外史には魂の保有上限数に余裕が無い…ならばＺ要素含有のＹ軸外史へ。

「…と、こう言う事ですか？」

「うん、その通り…と、少し休憩しようか…ずっと喋ってたせいで喉乾いたよ」

「ねえシンヤ、アタシのおっぱいで良けれ…

「キュルケさん？」

「…はぁい、夜まで我慢するわ」

休憩の為に水分を補給しようとした神也に対し、自身と神也以外に８人の他人が居る中…平然と爆弾発言をするキュルケ。
そんなキュルケを諌める神也だったが、どうやらキュルケ本人には大した効果をもたらしていないらしい。

「……はぁ、錬金…コンデンセイション…念力」

言って神也はキュルケに抱き上げられたまま、呪文を２つ唱えた。
前者は精神力を糧に、その場に存在する無機物を別の無機物へ変える呪文。
神也は自身達が今立っている砂浜の砂を原料に、その砂を９つのガラスのコップへ変えた。
中者は大気中の水分を一か所に集める魔法で、神也はこの魔法で空

気中に大きな水球を作り出した。
それを後者の魔法…手で触れていない物体を自由自在に動かす魔法で9等分し、9等分した水球を錬金で作ったコップへそそぐ。
「へぇ…凄いな、これがゼロ魔の…ハルケギニア式魔法なのか」
「ええ、ただ余りに便利すぎるのでハルケギニアの魔法使い…メイジは、その多くが運動不足で…軍人以外は軒並み虚弱なんですよ…
…はい、どうぞ召し上がれ」
神也の言葉で他の全員がコップを手に取り、中の水を一気に飲み干した。
皆一様に微妙な表情だ。
当然と言えば当然か…魔法で作った水は、正直言って白湯…湯冷ましの水より不味いからだ。
喉の渇きを潤した神也は、最後に自身のハルケギニア経験を端的に説明し…もう1回、コンデンセイションと念力で水を飲んだ。
そして再び説明開始…今度は魔法についてだった。
魔法＝妖術と捉えていた孫堅は、説明を聞いて凄まじいまでの納得具合を示した。
「さて…テンプレとチート、転生者…及び魔法については大方お話したんですが…それだと僕たちがここに居る理由が説明できないんですよね」
1人1人表情を確認するように一同の顔を見る神也。
「使い魔を召喚する儀式…サモン・サーヴァントで神也がハルケギ

ニアへ行ったのは分かったわ」

「けどそれだとこの世界へ移動する理由が無いんですよね？」

「そうね…私やセイラまで呼ばれる理由が分からないし」

涼輔・綾子はラグナロクの世界から。
刃・孫堅・徐庶は恋姫無双の世界から。
神也・キュルケはゼロの使い魔の世界から。
ルナ・セイラはエクスペリアの世界から。

それぞれでは面識のある人間もいるが、無い人間もいる。

「「「「「「「「「う〜ん…」」」」」」」」」

とりあえずこれからどうするか…そんな思案にふける９人だったが、
それは突如現れた１０人目の声によって中断せざるを得なくなった。

「貴様ら、どうやってここへ来た？」

2時間目：来訪者と闇の福音（前書き）

相変わらず無茶苦茶な内容だな…我ながら。

2時間目：来訪者と闇の福音

「貴様ら、どうやってここへ来た？」

現れたのは、膝まで伸ばした長い金髪を持つ美少女。
だが発する威圧感はとてもではないが、その見た目にそぐわない強大な物。

「ここが私の別荘だと知って入り込んだのか？」

言葉を発する度、爆発的に膨れ上がる威圧感。
コメカミの辺りにうっすらと青筋が浮いているのを見る限り、少女は大変ご立腹のようだ。

そんな少女が放つ桁違いな威圧感に対し、即座に我が身の闘気を解放…瞬間に全力戦闘行為が可能な、涼輔・綾子・刃・孫堅・神也・ルナが臨戦態勢に入った。

「……あれ？」

そんな中、腰に挿した直剣の柄を握っていた神也が…少女の顔を直視し、首を傾げた。

「……あの、この場においてこんな事を聞くのは場違いかと思ってますが…もしかして、エヴァンジェリンさんでいらっしゃいますか？」

「……え？」

神也の発言に日本出身の男全員が食い付いた。

「エヴァンジェリンって…『ネギま』の？　懸賞金６００万ドルの、真祖（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼だよな？」」

「『闇（ダーク・エヴァンジェル）の福音』とか『人形使（ドール・マスター）い』…他にも『不死の魔法使（マガ・ノスフェラトゥ）い』『悪（あ）しき音信（しきおとずれ）』『禍音（かいんの）の使徒（しと）』『童姿（わらべすがた）の闇（やみ）の魔王（まおう）』とかって呼ばれてる…あの？」

涼輔・刃の言葉に頷く神也。

涼輔は召喚前に、刃は転生前に【魔法先生ネギま！】の原作あるいは二次創作作品を読んだ事があるようだ。

ただし、もはや数年以上前の出来事なので単語程度しか覚えは無いらしい。

「さっき彼女は『私の別荘』と言いました…加えてあの身なりと威圧感（プレッシャー）、更にはこの場所の風景…彼女がエヴァンジェリンさんで、ここが麻帆良の…エヴァンジェリンさんの自宅にある『別荘内』であるなら、ここが『魔法先生ネギま！』の世界である事で全てに納得が行きます」

そう言った次の瞬間、金髪の少女から威圧感が霧散し…代わりに嬉しそうな表情が出てきた。

「ほう？　私が『真祖（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼』だと知っているのか？」

「…ええ」

「ならば話は早いな…私の名はエヴァンジェリン・Ａ（アタナシア）・Ｋ（ティ）・マクダウェル…貴様らが知る通り、懸賞金６００万の吸血鬼…ここは麻帆

良にある私の家にある別荘、正式名称『ダイオラマ魔法球』の中だよ」

エヴァンジェリンの説明を聞き、やっぱりかとガックリうなだれる神也。

エヴァンジェリン。
ミドルネームのA・K（アタナシオティ）は不死の子猫の意。

見た目は10歳くらいの女の子だが、その正体は吸血鬼の真祖（ハイ・デイライトウォーカー）（ネギまの魔法世界（ムンドゥス・マギクス）の最強種のひとつ）であり、老練の魔法使いである。生まれは百年戦争の頃（1337年～1457年）と説明されており、ネギまの作品内時間は西暦2003年となっているので人間換算だと600歳前後。

元々は普通の人間であったが、10歳の誕生日に目覚めたときに吸血鬼となっていたことを知る。自分を吸血鬼化させた人物に復讐を果たした後、数百年もの間生きながらえてきた…が、人間の世界はもとより、魔法使いの国（ムンドゥス・マギクス）でも受け入れられなかったため…当時、暗黒大陸と呼ばれたアフリカや…南海の孤島で一人で暮らしたこともあった。

生き延びる為に現在までの過程で大勢の人間を殺しており、自らを「悪の魔法使い」と呼んでいる。
半ば自分自身でその呼称を面白がって（冗談まじりに）好んで用いているが『少なくとも、最初の一人は憎しみをもって殺した』と語っているように、自戒的な意味合いでも用いている節がある。
これは生来の純粋さから来る偽悪的な性格の現れとも言える。

エヴァンジェリンの名は魔法界において恐怖の対象となっており、
６００万ドルの賞金首となっていた。
また、寝ない子を大人が「『闇の福音』がさらいにくるぞ」と脅か
すなど「なまはげのような扱い」を受けている。
得意属性は闇と氷、また人形使いとして糸を操る『操糸術（そうしじゅつ）』や封印
時の対抗策として得た合気柔術にも長ける。

「さて、私自身の紹介は済んだ…次は貴様らの番だ」
言って再び威圧感を発し始めるエヴァンジェリン。
そんなエヴァンジェリンに対し、神也は立ち上がり…神也を筆頭に
９人が同時に頭を下げた。

「えっと…まずはすみません、エヴァンジェリンさん…僕達がここ
にいるのは、自分達にも理由が分からないんです」

「何？」

「エヴァンジェリンさんにも納得が行くよう説明するならば…原因
不明の転移魔法が発生、それに巻き込まれたのではないかと…」
言ってこれまでの経緯を説明する９人。
自己紹介を兼ねた説明は、別荘内の風景が夕暮れになるまで至った。

「…随分と濃い面々だな」

「それは…その……」

「まぁそれは良い…と言う事はだ、貴様らは『正義の魔法使い(マギステル・マギ)』では無く…本来ならば絶対に関わらない、魔法世界(ムンドゥス・マギクス)とも違う別世界の人間だ…と言うのだな？　……ふむ、なるほど…それならば、ふざけた話だが…起こらんと言う保証も無いな」

「納得出来ました？」

「まぁ仕方無かろう…今日は朝から世界樹の様子がおかしいし、その余波だと考えるのが良さそうだ」

そう言って再び、威圧感を引っ込めたエヴァンジェリン。

「良かった…例え階級が違えども、同族殺しはしたく無かったから」

言って安堵の息を吐くのはルナ。

彼女は吸血鬼(ヴァンパイア)と男性型夢魔(インキュバス)のハーフで…祖先は違えども、エヴァンジェリンとは同族にあたる。

「俺も、ダチの嫁さんが吸血鬼(ヴァンパイア)だからな…アンタとは戦いたく無かったんだ」

そう呟いた涼輔は苦笑いを浮かべている。

「しかし同時多発次元跳躍か…珍しい事もあったもんだ」

「あ…あの、エヴァンジェリンさん？」

「ああ、長いならエヴァと呼んで構わんぞ…口調も楽な物にしていい」

「ならエヴァ、いくつか聞きたいんだけど…アナタ、今…呪いを受けてるか、封印指定になってない？」

「……何？」

綾子の発言に食い付いたエヴァ。

「分かるのか？」

「何て言うのかしら…感じられる魔力が、こう…幾重にも重ねて巻かれた、包帯の隙間から滲み出ている感じなのよ」

そんな綾子の表現に対し、エヴァは表情を陰らせた。

それ即ち肯定。

エヴァは話し始めた。

十数年前、エヴァは…当時、魔法世界（ムンドゥス・マギクス）で名を馳せていた『ナギ・スプリングフィールド』に危機を救われ、以来彼を追い続けていた。

しかし、悪事をやめさせる為ナギに『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の呪いを掛けられ、麻帆良学園に封印されてしまう。

ナギの魔力は強大で（力任せに術を使ったためでもあるが）誰もがその呪いを解くことができず…またナギ本人も失踪してしまった為、１５年間学園に女生徒として登校し続けることになる。

「…私がこの『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』と言うふざけた呪いにかけられてこの地

に縛られ、もう15年になる…私にこの呪いをかけたナギは、3年経ったら解いてやると言っていたが…今となっては10年前に死んだと言う噂すらある」

それを聞いた神也は、涼輔・刃と自身を除く6人に事のあらましを説明した。

「ねえシンヤ、何とかならないの？」

神也を使い魔とし、かつ伴侶として得たキュルケは…故郷の親友と似たエヴァの境遇に歯噛みした。

「……僕だけでは難しいですね…何せ相手は『千の呪文の男（サウザントマスター）』と呼ばれる至る、アホみたいな魔力を持つ魔法使いの呪い…いくら僕が新型虚無だとは言え、力任せに編まれた5重封印術式を…エヴァさんに被害無く解くのは至難の技ですよ」

神也は『ゼロの使い魔』の世界に、キュルケの使い魔として地球から召還され…様々な事象を経てキュルケと結ばれ、同時に4人居る伝説の魔法使いの1人とされた。

「お義兄様…」

勇者として国に縛られた経験のある綾子も、自身から望んで余所へ行く事の出来ぬエヴァを不憫に思ったようだ。

「……エヴァが受けている呪いを、視覚化出来るなら何とか出来るかも知れんが…」

綾子の血の繋がらぬ兄である涼輔は、綾子より早い段階で同じく地

球から異世界『ラグナロク』へ魔王として召還された経歴を持ち…類い希なる剣術の腕を有する、ラグナロクで初となる魔法をいくつも編み出した凄腕の魔法剣士だ。

「あら、魔法や呪いの類を視覚化出来れば良いの？」

視覚化出来ればと言う涼輔に対し、にこやかな笑顔でさも『私なら』と言うのはルナ。

ルナは先述の通り魔族を親に持つ、ハーフとは言え生粋の魔族で…早くに亡くなった両親に代わり自身を育てた、育ての親の教育の甲斐あって故郷『エクスペリア』では、比肩する者の少ない魔法使いである。

「何か手があるのか？　ルナ」

「ええ、本人の血が媒介に出来るなら…ここにいる全員に、私の魔力で視覚化出来るわよ？」

言ってルナはその豊かな乳房の谷間に手を差し入れ、そこから真っ白な牙状の何かを1つ取り出した。

「これは『領域拡散（エリアスプレッド）』って言う、私の牙を主原料にした魔法装身具（エンチャント）…まぁマジックアイテムね？　これにステータス異常を受けてる人の血を吸わせると、その人の状態異常が他人に見えるようになるのよ…エヴァ、ゴメンね？」

「ッ…」

言ってルナはエヴァの手を取り、その『領域拡散（エリアスプレッド）』の先端でエヴァ

の指先を引っ掻くようにして傷を付け…じわっと滲み出た血を、手にしている『領域拡散(エリアスプレッド)』に吸わせる。

するとエヴァの体に、それまでは無かった太い鎖が巻き付いたように見え始めた。

「これが今、エヴァの体を蝕んでいる呪いよ」

「うへぇ…ムチャクチャ太いな」

「太さは込められた魔力の強さに比例するわ」

「こりゃ俺の『神断緋刃(かんだちのひじん)』でも難しいぞ」

「私の『小烏丸天国(こがらすまるあまくに)』じゃ歯がたちませんね」

「僕のエクスカリバーでも不可能です…もっと、武器自体にパワーのある武器じゃないと」

綾子が持つ刀は大業物に分類され、その切れ味は鉄などは豆腐を斬るような手応えになるほど絶大。

だが呪いと言う形で魔力を斬るには不向きで、ましてやそれがここまで太い…込められた魔力が多い、イコール硬いだと難しい。

涼輔の刀は綾子のそれを上回る切れ味と硬度を持つ剛刀だが…それでも刀なので、こう言った呪(もの)いを斬るには向かない。

また神也が持つエクスカリバーも、切れ味で言うなら綾子や涼輔の刀に追随する性能を秘めるが…やはり硬すぎる物を斬る事は出来ない。

「…なら俺の飛刃赤戟(ひじんせきげき)なら斬れるか？」

言って刃は背負っていた薙刀を取り出した。

刃は輪廻転生により、恋姫無双の世界に生を受けた武将。
振るう得物は刃の剛力も物ともせず、岩や鉄は愚か敵を…武器と鎧と馬ごと両断出来る剛性を備えている。

そんな刃の得物を見て、神也は歓喜の声を上げた。

「この形状は…方天画戟じゃないですか！　イケます、これならイケます！！　涼輔さん、綾子さん！　刃さんの武器に魔力を流し込んで下さい！」

「よし！」

「任せて下さい！」

神也の指示で涼輔と綾子の両名が刃の両側に立ち、突き出した手から刃の飛刃赤戟へ魔力を流し込んで行く。
涼輔と綾子の魔力を受け、飛刃赤戟の穂先が赤紫色の光を帯びる。

「デスペル、魔法効果付与(エンチャント)！　対象、飛刃赤戟！」

言って神也がエクスカリバーを振るうと、その切っ先から光の球が飛び出し…飛刃赤戟の穂先に集う、赤紫の魔力光ごと包むベールのような形に安定する。

「刃さん、エヴァさんの頭上…魔力鎖が球のようになっているのが見えますか？」

「ああ、何とか」

「それを斬って下さい」

「しゃ…うぉおぉらぁぁっ！」

―ガギィンッ！―

神也の指示で刃が飛刃赤戟を振るうと、硬い金属同士を打ち付けたような音が別荘内に木霊する。

やがて…

―ビシッ！―

―ビキビキビキ…―

―バリィンッ！―

分厚いガラスにヒビが入り、そして砕けたような音がし…綾子の眼に見えていた、鎖の塊が爆散した。

―ゴウッ！―

同時にエヴァの体から発せられる、初見の時とは比べ物にならないほどの威圧感。

「ふふ、ふはは…ふはははははは！　あはははははははは！！　戻った、戻ったぞ！！　魔力だ、魔力が戻った！」

その魔力に冷や汗を流す綾子。

今のエヴァから発せられている魔力は、魔神形態（ヴァンデル）となった…全力状態の涼輔と同じぐらい強い。

同時にキュルケも冷や汗を流していた。
今のエヴァが発する威圧感は、神也が竜化して殲滅戦を行う時のそれだからだ。

ただ、それ以外の面々はややリアクションが違った。

「凄まじい覇気ね…狂化した雪蓮とか、本気状態の春蘭（しゅんらん）とどっちが強いかしら」

「魔法と言う、未だに理解の及ばない力を駆使するエヴァさん…見たところ遠距離仕様なので、近接格闘に持ち込めば旦那様でもあるいは…」

これは孫堅と徐庶。
徐庶の言う旦那様とは刃の事である。

「私を纏ったマスターがこんな感じなのでしょうか…あぁ、早くマスターと一つになりたい／／／」

これはセイラ。
ちなみに彼女の言う『マスター』とは言うまでもなくルナの事。
ルナは両性具有者で、特殊な魔法を使う事により…性行為を伴ってセイラを鎧として纏う事が出来る。
なので『一つになりたい』は、性行為そのものかあるいは自身を鎧化して纏う事に他ならない。
…万年発情期とは言わないであげてほしい。

「つか魔力は…あれ？　…もしかして、学園結界も斬っちゃった？」
「みたいです…正確には学園結界が“エヴァさんに作用していた部分のみ”ですが…」
冷や汗を流す綾子・キュルケや、全く別の思考に耽る孫堅・徐庶・セイラとは違い…自身達が、うっかりミスを犯した事を悟る涼輔・刃・神也。
実はエヴァはその強大な魔力を【学園結界】により封じられており、これが第三要因によって無力化…あるいは減衰した場合、本人をして『登校地獄と学園結界から抜け出せば反則気味の最強状態』と語るほどの力を発揮する。
ちなみにこの【学園結界】は、ナギの【登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）】の後に効力を発揮している。
「よし、景気付けだ…貴様らにこの世界の魔法を見せてやる…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」
そうとは知らないエヴァは嬉々として魔法の詠唱を開始…突きだした右手に魔力が凝縮されていく。
「氷の精霊１７頭、集い来りて敵を切り裂け！　魔法の射手！　連弾・氷の１７矢！！」
撃ち出された水色の矢は、別荘内にある海へと高速で飛び立ち…着水と同時にその周囲を氷河のようにバキバキと凍らせてしまう。
「うむ、やはり私はこうでなくては…礼を言うぞ、涼輔、綾子…ルナ、刃…そして神也よ」

完全快調となったエヴァはにこやかな笑顔で涼輔達の手を握って行く…が。

「っあ！　あふぅ……」

エヴァが神也の手を握った瞬間だった。
神也は突然真っ青になり、口から泡を吹いて卒倒した。

「え？」

「おい神也！　…気絶してるぞ？」

「…あ、あ～あ……場の雰囲気の流れがあんまりにも自然だったから、神也の体質を失念してたわ」

言って倒れた神也を抱きかかえ、その豊満な胸へ抱き込むキュルケ。
すると神也は気絶しているにも関わらずキュルケにしがみ付き、その両手でキュルケの巨乳を揉み…ブラウスの谷間へ顔を押し付け、そのまま動かなくなった。

「…何だったんだ？　と言うより神也に何があった？」

「先に、本人に代わって謝っておくわねエヴァ…シンヤは、貧乳に対して拒絶反応を起こす体質なの」

「…何だと！？」

「胸の起伏が少ない女の子が、自分から半径３メイル…違った、半径３メートルに近づくと発作が起きる…距離３メートルで鳥肌、２

メートルで震え…1メートルで顔面蒼白、0メートル…接触で気絶よ」

「なら神也は、私が握手をしたから…？　いやそれだと他の連中は…」

言ってエヴァは周囲を見渡した。

綾子・孫堅・徐庶・ルナ・セイラ…そしてキュルケ自身。

―ぷるんぷるん―

―ゆっさゆっさ―

―ぼいんぼいん―

みな、いずれ劣らぬ巨乳の持ち主だった。

「……」

―さすさす―

そして自身の胸を撫でさすり、たっぷり20秒は考えた後…

「ば、ばば…ばばば……馬鹿にしてるのかあああああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

怒号と共に爆発した。

その怒り具合は、初邂逅当時に見た比ではない。

顔はゆでだこの様に赤く…浮き出した青筋はミミズほどの太さとなっており、浮き出た場所もコメカミだけではなく額にも及んでいる。

「別にふざけてる訳じゃなくて、これはシンヤの心の問題で…初恋の相手が偽巨乳で、失恋と同時にこうなったらしいの」

「そりゃあ、なぁ…？」

「初恋の相手が偽巨乳なら、分からん気がせんでもないな…」

キュルケの台詞に納得する刃と涼輔。
その台詞に対し、セイラとキュルケを除く他の女性陣は苦笑している。

「どいつもこいつも私を幼女だツルペタだと、あまつさえエターナルロリだ合法ロリだロリババァだと好き放題抜かししやがって……」

さぞ悔しげな顔で地団駄を踏むエヴァ。

「ああクソッ！　忌々しい…この体が真祖でなければ今頃はムチムチの美女となっているものの…うがあああああっ！　『魔法の射手！　連弾・氷の４００矢』！！」

叫び、空に向かって『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を連射するエヴァ。
それは全弾が海へ、そして既に氷結している部分へ着弾…海上に巨大な、ムチムチ美女の精巧なオブジェクトを形成していく。
その美女像は綾子と孫堅と徐庶とルナとセイラとキュルケを、足して６で割った様な…それでも巨乳の美女だった。

「貧乳は、ステータスなんだあああああああっ！　『魔法の射手！　集束・闇の１矢』！！！！」

叫びと共に放たれた『魔法の射手（サギタ・マギカ）』はこれまでと違い黒色。

それは美女の氷像の胸にささり、盛大な爆発を起こした。
氷像は木端微塵となり、砕けた氷片がザバザバと海へ降り注ぐ…

「……」

その鬼気迫る表情のエヴァに対し、相変わらず苦笑いの表情を崩せない女性陣と…複雑な表情をした男性陣であった。

「ちっくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

陽も落ちた別荘内の海岸で、エヴァの魂の叫びが木霊した。

2時間目：来訪者と闇の福音（後書き）

これ以降、当拙作では『ネギま式魔法』の【口頭発声詠唱文】にルビはふらずに進行しますのでよろしくお願い致します。

3時間目：解き放たれし闇の福音（前書き）

テンプレ『エヴァ解放』を適用しました。

3時間目：解き放たれし闇の福音

ひとしきり暴れ回ったエヴァだったが、やがてＭＰ…麻帆良の魔法使いが言う魔力が尽きたようだ。

「はぁ、はぁ、はぁ…」

肩で息をするエヴァを、生温かい視線で見詰める涼輔達一行。やがて目を血走らせたエヴァがこちらを振り返り…

「お前ら…特に神也！　これで文句は無いだろう！」

そう言って…どこからか取り出した、試験管に入った液体を飲み干し…涼輔達一行の眼前で、同性も羨むような美女の姿になった。

「……」

だが当の神也はキュルケの胸に抱かれて、未だに気絶しており…涼輔達に至っては全員が『一言でも文句を言っただろうか、俺達は…』と言う心境だった。

「…チッ」

そんな神也を見てエヴァは舌打ちを１つ…やがて空を仰ぎ見てこう言った。

「あぁ、もうこんな時間か…今日は泊まって行くが良い、夕食ぐらいは出してやる」

エヴァの説明によるとダイオラマ魔法球内は、所持者の都合によって球内時間と外界時間にズレを生じさせる事が可能で…エヴァの別荘では２４時間経過して、ようやく外界の１時間に相当し…１度中に入ると内部時間で２４時間経過しなければ出る事が出来ないと言う。

またエヴァはこうも言った。

ダイオラマ魔法球は、水晶やボトルシップの類に…イメージを伴う魔力で風景を創造するか、魔力で実物の風景を空間ごと切り取って封入するかによって作られ…エヴァの別荘の場合は後者の製作法を用いており、賞金首だった同時の居城『レーベンスシュルト城』を中心に…南国リゾート風の景観を造り上げたそうだ。

「美味いな」

「あぁ、フライドチキンにはうるさい俺でも文句の付けようがない」

「へぇ…漢人の私達でも、美味しく食べられるように作ってくれたのね？」

「ちょっとコレ…ハルケギニアなら店に出せるわよ？」

そんなレーベンスシュルト城に案内された一同は、エヴァ自らが作製を手掛けた人形達…通称『チャチャシリーズ』が作った豪華な料理に舌鼓を打っていた。

「まぁ私の舌を唸らせるだけの料理を作れるように造ったからな…この程度は造作もない」

「この出来で“この程度”か…曹操辺りが聞いたら卒倒するだろうな」

「曹操…三国志の英傑の1人で、刃達が居た世界では覇道を歩む事を決意した女だったか？」

「ああ」

食事中にする話として、彼等は自身のこれまでの経緯を…さっき行った自己紹介の時より、殊更詳しく話した。

「なるほど、部下は駒か」

「覇道を歩むと言うならそれも仕方ないと思うが、俺には俺の正義が有ってな…折り合う事が出来なかったのさ」

「自身の正義か…分かる気がするよ」

「ほう？　涼輔にも自分の正義があるのか？」

「もちろん…俺の正義は『家族と認めた者は、守れるならばどんな手段を使っても守る』それと『権力や立場…血統とかをかさに着て、他人を虐げるやつは許さない』だ」

涼輔は地球の、それも日本から異世界『ラグナロク』へ…魔族の王として召還された。
新人の王として動き始めた涼輔だったが、その道のりは地球人…更に言えば一般男子高校生には、苦難の連続だった。
その途中、自身と義妹が…種族は違うが同じ魔族である事が発覚した。

「ある時、ダチの計らいでとある夜会に参加したんだが…そこで、ダチの国の腐れ貴族がダチの嫁と俺の家族を貶してね…思わずブチ切れちゃってさ」

「あぁ、吸血鬼(どうほう)の嫁を持つと言う友人か？」

「ああ」

「貶された家族とは？」

「余り言いたくは無いが…奴隷の出でさ」

「……なるほど」

涼輔の言葉に含まれた真意を悟ったのか、エヴァはそれ以上何も言わず…グラスに注がれたワインを飲み干した。

「にしても涼輔が魔族…ね」

「魔族の王、魔神(ヴァンデル)…知った時は俺もビックリだったよ」

「ルナも魔族だったな？」

「ええ、私は吸血鬼(ヴァンパイア)と男性型夢魔(インキュバス)のハイクォリティーハーフ…それが私」

糧として襲われた吸血鬼(ヴァンパイア)と、捕食者たる男性型夢魔(インキュバス)がなぜか恋に落ち…誕生したルナ。

両親の身体的特徴を強く受け継いだルナは両性具有となり、それが

元で故郷を追い出され…行き着いた先で1頭の竜を助ける。
その龍こそセイラの母竜だった。

「両性具有？　フタナリってやつか？」

「ええ…私は産みの母から『女として最上級の美貌』と、吸血鬼（ヴァンパイア）の能力として『吸血』『吸血隷属化』『蝙蝠化』『蝙蝠使役』『翼の発現と飛行能力』『幻術魔法』『強大な魔力』を受け継いだ…そして父から男性型夢魔（インキュバス）の能力として『女殺しの巨根』『想像を絶する（射）精力』『夢侵入』『夢の操作』『日光耐性』『流水耐性』『銀耐性』『ニンニク耐性』『強靭な肉体』『魅了魔法』を受け継いだ…加えて育ての母から『生きる為の技術』『両親から受け継いだ能力の使用方法』『魔法の技術』『魔法を用いた知識の利用法』『魔法具の扱い方』『雷属性魔法』『竜に対する知識』『女の扱い方』等を授けてもらい、娘である『セイラ』を従者として得た」

こうして十二分にチートと化し、数年が経ったある時…ルナはその種族を『吸精夢魔姫（ヴァンパイアキュバス）』の初代であるとされた。

「なっ、吸精夢魔姫（ヴァンパイアキュバス）だと！？　不死族（ノスフェラトゥ）の中でも最強最上位に位置する、真祖（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼（ヴァンデル）と並ぶ魔法世界六大最強種の一角ではないか！
いや待て…涼輔が魔神（ヴァンデル）で、その義妹の綾子が高位精霊（ハイ・スピリット）…ルナが吸精夢魔姫（ヴァンパイアキュバス）、その従者であるセイラが魔法竜（マギドラゴン）…神也が竜人（ドラゴニウス）で私が真祖（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼（ヴァンパイア）……ははっ、何という事だ！　魔法世界六大最強種が一同に会しているとはな！」

それぞれ出身世界こそ違うものの、種族的にはエヴァの言う通り『魔法世界六大最強種』の一角を担う存在。
彼等を1人でも取り込めば、その力を以て魔法世界なら一部だけでも掌握…現世界でも一国は容易に落とせる。

ましてや純粋な人間である刃・孫堅は万からなる歩兵・騎兵を討ち屠れる三國無双の武人。
加えて徐庶はその刃や孫堅の傍にあってなお、武も智も振るえる稀代の文武官。

また、澄ました顔でワインを飲みつつ『私は関係ないわよ』と言った顔をしているキュルケだって、その身に凄まじいほどの魔力を有した火属性超特化型の魔法使いだ。

この１０人を敵に回して、無事で済むはずがない。

「ところでエヴァ」

「む？　何だ、涼輔」

「実を言えば、さっきやった『登校地獄』の解除だけど…思わぬ誤差が生じたんだ」

「…何？」

ちなみに視界の端では、刃とルナがナニのＮＨＫ比べをしており…少し経った後に刃が完全敗北を喫したようだ。
勝ったルナはその勢いでキュルケに『貴女を抱かせて』と迫るが、キュルケは『私のアソコはシンヤ専用なの！』と喚き散らしている。
逆サイドでは落ち込んだ刃を慰める為か、孫堅と徐庶が刃を巻き込んでおっぱじめてしまっている。

「あのアホ共は…」

「気にしたら負けだ…じゃ、説明を始めるぞ」

言って涼輔は説明を始めた。

エヴァには『登校地獄』の他に『学園結界』と言う物が作用していた事。

この『学園結界』がエヴァの魔力を封じていた事。

先ほど『登校地獄』の呪いを斬り壊したが、その際誤って『学園結界』の…エヴァに作用している部分も、一緒に斬り壊してしまった事。

「学園結界はこの学園を統括する魔法使いが…電気系統を利用して張った物となっているんだ」

「電気系統…チッ！　あのジジィか…だから私は年に2回、電気系統のシステムメンテナンスの日に該当する『大停電』の間だけ…魔力が開放出来るのか」

「で、この学園結界はその効能の有無を学園側が把握している可能性があるんだ」

学園結界の狙いは3つ。

1つ目は麻帆良内で発生する異常に対し、住民への状態誤認作用。
2つ目は麻帆良に侵入する外敵の感知作用。
3つ目が結界内に居る、特定人物の力の抑制作用。

「つまり効用3において、私は魔力を封じられているんだな？」

「そう…けどその効用3の、エヴァにだけ作用していた部分を俺達が斬り壊した」

「恐らく、この別荘から出た途端…貴女の魔力は結界管理者に感知され、事と次第によっては害と見なされ再封印…最悪の場合は排除ね」

「排除だ？　はっ…この私を誰だと思ってる？　闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）だぞ？　排除等されるはずが……いや、危ないのかも知れんのか」

エヴァ曰わくこの学園には、間違いなく最強ランクに位置する使い手が存在すると言う。

「麻帆良学園の学園長『近衛（このえ）　近右衛門（このえもん）』と『高畑（たかはた）・T・タカミチ』の2人は要注意だ」

近右衛門はこの麻帆良学園を治める学園長と言う肩書きの他、関東魔術協会の会長と言う肩書きも持っている。

会長の肩書きに相応しいだけの魔力と魔法を持つと、エヴァは語る。

「見た目は老いぼれ…いや、ぬらりひょんだが」

そしてタカミチ。

彼は20年前に、魔法世界（ムンドゥス・マギクス）で名を馳せた伝説の一団『赤き翼』に所属していた人物で…魔力を有してはいるが、詠唱が出来ないと言う弱点を持つ。

だがその弱点を補って余りあるのが、彼の武術『居合い拳』で…そ

の破壊力は、有する魔力と気を融合した時…最大限に発揮されると言う。

「魔力と気…元来ならば反発し合い、決して交わらないこの2つを…タカミチは『咸卦法(かんかほう)』と呼ばれる特殊技術で融合させ、居合い拳の破壊力を爆発的に上昇させる事が出来るんだ」

咸卦法により威力を増した居合い拳はそれこそ弾幕…しかも1発1発の威力が砲弾並かそれ以上、更にはその砲弾以上の威力を持つ剛拳が…凄まじい速度でマシンガンの如く連射されると言う。

「居あい拳…ポケットを鞘にした、拳による居合い抜きか」

「刀で言う抜刀速度は元より、納刀速度もアホみたいに速い…初見で情報無しなら確実、私でも詠唱が間に合わなければ打ち据えられて終わりだ」

「ふぅん…」

タカミチと言う人物の強さをしみじみ語るエヴァだったが、神也以外の一同…特に綾子には反応が鈍かった。

「エヴァさん」

綾子はエヴァを呼び、両手をスカートのポケットに入れ…

「ん?」

エヴァが自身の方を向いた瞬間、その手を振るった。

―パァンッ！―
―パパパパァンッ！―
風船が破裂するような音と共に、空中で何かが粉砕して行く。
見ればそれは涼輔が食べたフライドチキンの骨なのだが、それらは悉く木っ端微塵に粉砕していた。
「まさか…居合い拳か！？」
「故郷では抜拳術（ばっけんじゅつ）と呼んでましたが」
気が付けば涼輔がフライドチキンの骨を投げており、卓上のソレは残すところもう1本しかない。
「咸卦法、魔力と気…言葉からイメージするに、こんな感じでしょうか…はっ！」
涼輔の手から最後の骨が宙に舞う。
同時に、いやそれより速く…綾子の右手が魔力で、左手が気で覆われ…
―パシンッ！―
柏手一つ、それらが融合…
―ブワッ！！―
刹那、綾子の全身から凄まじいエネルギーが発せられる。
「…せいっ！」

―キュドッ！―

ちょうど真ん前へ落ちてきた骨に向かい、魔力と気を合成した状態での抜拳術が放たれる。

その一撃は音の壁にブチ当たった様な音を響かせ、宙を舞う骨を粉砕…いや、粉へと変える。

「…ふぅ」

パラパラと舞い散る骨の粉から身を引き、数歩下がったところで一礼する綾子。

その様子にエヴァは顔を真っ青にしていた。

「…霞(しあ)辺りが見てたら、嬉々として手合わせを挑んでくるでしょうね」

エヴァ自身、霞と言う人物がどんな人物なのかは知らないが…猛者と戦いたいと言う武芸者は、今世代においても未だに多い事を知っている。

例えばクラスメートの『古菲(くーふぇい)』や『長瀬(ながせ)　楓(かえで)』には格好の手合わせ相手となるだろう。

とは言え実力的には一蹴されて終わりだろうが。

「まぁお義兄(にい)様の居合の方がずっと速いのですが…ともかく、私達が相手をすれば結界管理者もそう簡単に優位には立てないでしょう」

そこへキュルケへの交渉に失敗し、若干項垂れたルナが…セイラの脇腹にしがみ付く形で戻ってきた。

「個人的には、エヴァの現魔力値を『学園結界』に誤認させる方が簡単だと思うけど」

「結界に魔力値を誤認？　出来るのか？」

「僕達が協力すれば造作もないです…あぁ、久しぶりに落ちましたよ…」

言って身じろぎをして、キュルケの胸から離れる神也。
どうやら復活したらしい。

「おお神也、気が付いたか？」

「あ、エヴァさん…それ年齢詐称薬ですか？」

「うむ、キュルケから説明を聞いてるからな」

「すみません、僕の体質のせいで不快な思いをさせてしまって…」

「体質ならば仕方ないさ…で？　神也達が協力すれば造作もない…とは？」

言われて神也は、キュルケが背負っていたカスタムバッグから…1本の指輪を取り出した。

「涼輔さんと綾子さん、ルナさんにお聞きしたいのですが」

「ん？」

「何でしょう？」

「何かしら？」

一同は神也の案を聞いて納得、エヴァは絶句した。
絶句し、そして絶叫した。

「この場で魔法具を作り出して、それを身に着け結界を誤認させるだと！？」

3時間目：解き放たれし闇の福音（後書き）

魔法世界６大最強生物に関しては、作者のオリジナル設定となりますのでご了承下さい。
次話は拙作主人公組の紹介を入れる予定です。

4時間目：拙作キャラ紹介と設定【自習】（前書き）

書いた本人が『おかしい、こんなバグ級だったか？』と言うキャラがチラホラ…どうしてこうなった？

4時間目：拙作キャラ紹介と設定【自習】

名前：御鏡　涼輔
かな：みかがみ　りょうすけ

性別：男

年齢：１８歳

身長：１６５ｃｍ
体重：７０ｋｇ

種族：魔族／魔神（ヴァンデル）
階級：魔王／精霊帝（エンペラー・オブ・ハーツ）

作品：作者拙作【大罪と楽園に息づく者達】

異世界『ラグナロク』に魔王として召喚された過去を持つ、日本出身の青年で元高校生。
教会の前で捨て子となっていたのを母が保護し、養子ながら実子以上の愛情を注いで育てた。
御鏡綾子の義兄。
母伝来の実戦剣術【無双御鏡流（むそうみかがみりゅう）】を１８歳にして皆伝で修めており、その実力は本物。
魔王として召喚されて以来、ラグナロク式魔法の開発と修練を重ねており…ラグナロク初となる新魔法を無数に開発した事もあるほど、魔法には精通している。
ラグナロクに召喚されるまで自身は人間だと思っていたが、召喚の際に自分は魔族である事を認識…以後、その能力研鑽にも尽力して

きた。
性格はやや大雑把で感情的…幼少期に綾子を悪漢に殺されそうになった経験があり、それ以降身内と定めた者が貶されたり傷付けられたりすると我を失うほど怒り狂う。
怒り狂った状態の戦闘能力は他の追随を許さず、愛刀『神断緋刃（かんだちのひじん）』を振るいつつ…剣術と同時に会得した古武術【氣闘拳（きとうけん）】で大暴れする。
また怒り狂ったのが魔法の存在する世界だと、魔法も加わって誰にも手が付けられなくなるほどの戦闘力を発揮する。
見た物を覚えて７５％の精度で模倣できる【メッキ技】と言う特技を持つ。
精霊に極めて慕われやすく、過剰に信じられやすい体質。

・初期スキル
無双御鏡流Ｌｖ１０
刀運用技術Ｌｖ１０
氣闘拳Ｌｖ３
ラグナロク式魔法
メッキ技
原作知識Ｌｖ１

・初期装備
神断緋刃（分類：日本刀）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ９
水：Ｌｖ８
風：ＬＶ５
土：Ｌｖ５

電：Ｌｖ６
氷：Ｌｖ５
光：Ｌｖ３
闇：Ｌｖ１

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ５
爆：Ｌｖ４
霧：Ｌｖ４
草：Ｌｖ６
魔：Ｌｖ６

＊＊

名前：御鏡　綾子
かな：みかがみ　あやこ

性別：女

年齢：１６歳

身長：１６０ｃｍ
体重：「女の秘密です」

種族：魔族／上位精霊（ハイ・スピリット）
階級：勇者／精霊（ハーツ）

作品：作者拙作【大罪と楽園に息づく者達】

魔王を討つ勇者として異世界『ラグナロク』に召喚された少女で、後のとある事件で人間から精霊として覚醒…更にその後『上位精霊』へ昇格した、日本出身の少女で元高校生。
御鏡涼輔の義妹。
再婚した父の連れ子だが、義兄の涼輔同様…家族からは多大な愛情を注がれて育った。
幼い頃、自宅に侵入した悪漢によって殺されそうになった事があり…その窮地を涼輔に救われて以来、涼輔には肉欲を伴う深く強い愛情を抱いている。
ある日…姿を消した涼輔を探していてラグナロクへ召喚された。
祖母から古武術【氣闘拳】を習って師範代級の腕を持ち、かつ涼輔と共に学んだ【無双御鏡流】も使える。
先天的に魔法適性が高く、ラグナロクでは稀となる【加護無し四大適性者】となっている。
性格は温厚で快活、しかし涼輔を第一とする少し偏った思考傾向を持ち…涼輔を貶める者は氣闘拳と愛刀『小烏丸天国(こがらすまるあまくに)』で抹殺しようとする。
涼輔を性的に襲いたい、あるいは涼輔に性的に襲ってもらいたいと言う変態さんで…涼輔をその気にさせる為、日夜その１６歳にあるまじき発育度合いを誇る肉体で涼輔を誘惑する事を日課としている。
スリーサイズは上から８９／６０／８２。

・初期スキル
無双御鏡流Ｌｖ２
刀運用技術Ｌｖ７
氣闘拳Ｌｖ１０
ラグナロク式魔法
加護無し四大適性者

巨乳
原作知識Ｌｖ２

・初期装備
小烏丸天国（分類：日本刀）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ７
水：Ｌｖ７
風：ＬＶ７
土：Ｌｖ７
電：Ｌｖ１
氷：Ｌｖ１
光：Ｌｖ５
闇：Ｌｖ１

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ２
爆：Ｌｖ２
霧：Ｌｖ２
草：Ｌｖ２
魔：Ｌｖ２

＊＊

名前：呂堂　刃
かな：りょどう　じん

性別：男

年齢：１８歳

身長：１８０ｃｍ
体重：７９ｋｇ

種族：人間
階級：武官

作品：作者拙作【真†恋姫無双～巨乳将伝～】

日本は東京浅草にある聖フランチェスカ学園に在籍していたが、事故により急死…その魂が『真†恋姫無双』の世界に渡って転生と言う形で再誕した青年で…沢山いる妻の内の１人である孫堅と徐庶と、自分の寝所でイチャイチャしているところを麻帆良に転移された。
恋姫無双基準の呂堂　戦牙（姓が呂、名が堂、字が戦牙、真名が刃）と言う名前も持つ。
戦乱の世を生き抜く為、再誕時に世界の管理人から得た超絶スペックの肉体と鍛え上げた技術を持っている。
その武力は恋姫無双の呂布を軽く凌駕し、また氣の扱いは同作の楽進を遥かに上回る。
愛用の武器は方天画戟『飛刃赤戟（ひじんせきげき）』と、格納機構搭載弓『朱雀（すざく）』及び短刀射出機構搭載型籠手『穿紅（せんこう）』
武将としての能力は武力７：知力３ぐらい。
正真正銘筋金入りの巨乳好きで、巨乳武将は全員俺の嫁と言わんばかりに巨乳を愛する猛者。
恋姫時代は巨乳の武将ばかりを囲った『刃愛豊乳連合』と言う巨乳ハーレムを築き上げた。

・初期スキル
戟運用技術Ｌｖ１０
弓運用技術Ｌｖ８
氣運用技術Ｌｖ１０
巨乳誘引体質
毒無効
絡繰り技師Ｌｖ９
原作知識Ｌｖ１

・初期装備
飛刃赤戟（分類：方天画戟）
朱雀（分類：弓）
穿紅（分類：籠手）
徐庶のリボン（分類：アクセサリー、右手首）
顔良の腰帯（分類：アクセサリー、左手首）
袁紹の腰帯（分類：アクセサリー、額）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ？
水：Ｌｖ？
風：ＬＶ？
土：Ｌｖ？
電：Ｌｖ？
氷：Ｌｖ？
光：Ｌｖ？
闇：Ｌｖ？

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ？

爆：Ｌｖ？
霧：Ｌｖ？
草：Ｌｖ？
魔：Ｌｖ？

＊＊

名前：孫　神蓮
かな：そん　しぇんれん

本名
姓：孫（そん）
名：堅（けん）
字：文台（ぶんだい）
真名：神蓮（しぇんれん）

性別：女

年齢：「３０代よ？」

身長：１７２ｃｍ
体重：「女の体重は禁則事項よ」

種族：人間
階級：武官

作品：作者拙作【真†恋姫無双～巨乳将伝～】

『真†恋姫無双』における呉ルートで、元来ならば原作開始前に死んでいるはずの孫堅その人。
無論、真恋姫をベースとしたキャラなので性別は女性。
刃が誕生した世界で、史実通り黄祖討伐の帰りに伏兵に襲われて死ぬはずだった所を…偶然居合わせた刃の機転によって死を回避し、邂逅を果たした。
原作における孫策の母だけあって我が強く、気に入った物はどんな手段を用いても手中に収めようとする。
当初、戦場で出会った刃を黄祖側の敵将として討とうとしたが…いつの間にか惚れていた。
武力に優れた武将で、かつてはその武腕から『江東の虎』と言う二つ名を得た事があるほどの戦闘能力を誇る。
刃の【巨乳誘引体質】に適合するスタイルを持ち、特に胸は呉勢有数のボリュームを持つ。
スリーサイズは現代換算で上から９２／５９／８５と言った所。
戦場で血を浴びすぎると酷い興奮状態に陥る【狂化癖】と言う特徴を持つ。
刃の寝所にて徐庶と共に、刃とイチャついているところを刃及び徐庶と共に麻帆良へ転移させられた。
名前の『孫　神蓮』は麻帆良へ来た後に名乗り始めた。

・初期スキル
剣運用技術Ｌｖ１０
氣運用技術Ｌｖ３
爆乳
狂化癖

・初期装備
無し

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ？
水：Ｌｖ？
風：ＬＶ？
土：Ｌｖ？
電：Ｌｖ？
氷：Ｌｖ？
光：Ｌｖ？
闇：Ｌｖ？

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ？
爆：Ｌｖ？
霧：Ｌｖ？
草：Ｌｖ？
魔：Ｌｖ？

＊＊

名前：徐　蘭里
かな：じょ　らんり

本名
姓：徐（じょ）
名：庶（しょ）
字：元直（げんちょく）
真名：蘭里（らんり）

性別：女
年齢：１８
身長：１５５ｃｍ
体重：「女の体重は禁則事項でしゅ」

種族：人間
階級：文武官

作品：作者拙作【真†恋姫無双～巨乳将伝～】

刃が誕生した恋姫無双の世界で、諸葛亮や鳳統と同じ『水鏡女学院』出身の少女で文官ながら撃剣の名手でもある。
世を学ぶ為及び終世の主探しを成す為、諸葛亮や鳳統より先に塾を出た。
後に三公四代の名家袁紹の元で客将をしていた時、袁紹の客として来ていた刃と邂逅を果たした。
小柄な体格に似合わぬ巨大な胸を持ち、スリーサイズは現代換算で上から１１０／４９／６５と言った所。
刃曰く『ロリ魔乳』
一途に尽くす性格で、主ないし夫の為なら如何なる行為をも受け入れて果たすだけの胆力を有し…かつての師である水鏡より【水鏡流閨舌技】を習得している。
刃に見初められて刃に囲われる事を決意し、以降刃の事を『旦那様』と呼び慕う。
刃が巨乳好きである事を一番喜んでいる。
パニックに陥ると『わわわ』と慌て、かつ語尾を『～でしゅ』と噛む癖がある。

刃の寝所にて孫堅と共に、刃とイチャついているところを刃及び孫堅と共に麻帆良へ転移させられた。
名前の『徐　蘭里』は麻帆良へ来た後に名乗り始めた。

・初期スキル
剣運用技術Ｌｖ７
軍師Ｌｖ９
魔乳
一途で従順な幼な妻
噛み癖
水鏡流閨舌技Ｌｖ１０

・初期装備
直剣（分類：西洋型両刃片手剣）
筆記道具一式（分類：アクセサリー）
竹簡（分類：消耗品）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ？
水：Ｌｖ？
風：ＬＶ？
土：Ｌｖ？
電：Ｌｖ？
氷：Ｌｖ？
光：Ｌｖ？
闇：Ｌｖ？

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ？

爆：Ｌｖ？
霧：Ｌｖ？
草：Ｌｖ？
魔：Ｌｖ？

＊＊

名前：熱風　神也
かな：あかぜ　しんや
性別：男
年齢：１８歳
身長：１５１ｃｍ
体重：５０ｋｇ
種族：竜人（ドラゴニクス）
階級：魔法使い（メイジ）／火のスクエア／風のスクエア
作品：作者拙作【淫説・ハルケギニア史】（Ｒ１８／ノクターンノベルズ）

東京は秋葉原で友人と共に行動中、暴走した無人車からその友人を庇って非業の死を遂げた元日本人。
死後、神に会って転生を進められ受肉し…特殊能力を授かった後に『魔法少女リリカルなのは』の世界へ転生されるかと思った矢先に『ゼロの使い魔』の神ブリミルによってハルケギニアの平行世界へ

召喚された。
世間一般的にヲタクと呼ばれる人間で…趣味はライトノベルや二次(ファンフ)創作(イクション)を読み、楽しみ…アニメを見たりゲームをしたり…美少女フィギュアを収集する事。
ただし特技に『剣術』があり、剣道部に所属していて…全国大会決勝まで勝ち進んだ事だってある武闘派ヲタクではある。
好きなアニメヒロインはと聞かれれば即座に『ゼロ魔のキュルケ』と答えるほどのキュルケ好きだが、そのキュルケ自身によって『ゼロの使い魔』の世界であるハルケギニア（の平行世界）へ召喚され…紆余曲折の末、彼女の使い魔兼終世の夫となった。
神から得た反則的なまでの能力と、使い魔契約(コントラクト・サーヴァント)によって１０のルーンを得ていよいよバグキャラ（ハルケギニア初のダブルスクエア）と化し…ハルケギニア史上唯一、単身でヘクサゴンスペルを発動できる。
小学校時代、初恋の相手が偽巨乳だったと言う衝撃的な事件を経験して以来【貧乳拒絶体質】となり…半径３ｍ以内に貧乳の女性が近づくと、拒絶反応を起こすようになった。
刃に引けを取らぬほどの巨乳好き。
あだ名には『あっきー』『シン』『神也』『ねっぷう』の４つがあるが、最後の物は呼ばれると『僕の名字は熱風(ねっぷう)じゃない、熱風(あかぜ)だ』と脊髄反射で反論するほど嫌っている。
転生時にもらった能力の１つ【竜化】を使う事でドラゴンへと変身し、その強大な力を使っての殲滅戦が本気の戦闘スタイル。
ちなみに初期スキルにある【メモリースキル】とは、キュルケとの使い魔契約(コントラクト・サーヴァント)で発現した１０個のルーンの内の１つが担う能力で…神也自身の記憶にある魔法・技術ならば修行なしで“マンガの物でもアニメの物でも”何だって使う事が出来る極悪さを誇る。
麻帆良に転移してきた９人の中では最もバグ度合いが高い。

・初期スキル
剣運用技術Ｌｖ９
近接格闘技術Ｌｖ８
ハルケギニア式魔法
竜化
詠唱破棄
血交による才能複製吸収
メモリースキル
多重思考
始祖第４のルーン
原作知識Ｌｖ３

・初期装備
エクスカリバー（分類：西洋型両刃片手剣）
エクスカリバーダガー（分類：西洋型両刃短剣）
婚約指輪（分類：アクセサリー、左手“薬指”装備）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ１０（ハルケギニア式ではスクエア階級）
水：Ｌｖ６（ハルケギニア式ではトライアングル階級）
風：ＬＶ１０（ハルケギニア式ではスクエア階級）
土：Ｌｖ６（ハルケギニア式ではトライアングル階級）
電：Ｌｖ４（ハルケギニア式ではライン階級）
氷：Ｌｖ４（ハルケギニア式ではライン階級）
光：Ｌｖ０
闇：Ｌｖ０

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ５（土魔法の派生『錬金』の技術的数値）
爆：Ｌｖ５（虚無魔法の『爆発』を加味した換算数値）

霧：Ｌｖ０
草：Ｌｖ０
魔：Ｌｖ１０（コモンマジック履修度合いの換算数値）

＊＊

名前：キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー

性別：女

年齢：１８歳

身長：１７０ｃｍ
体重：「燃やすわよ？」

種族：人間
階級：魔法使い（メイジ）／火のスクエア

作品：作者拙作【淫説・ハルケギニア史】（Ｒ１８／ノクターンノベルズ）

神也が、被召喚と言う形で赴いた『ゼロの使い魔』の“平行世界”における神也の召喚主。
燃え盛る炎の様な色合いの赤髪と、健康的な褐色の肌…及び神也を虜にして離さない魅惑的なボディをしている。
神也の名実ともに嫁。
スリーサイズは日本基準換算で上から９４／６３／９５。

ゼロの使い魔のメインヒロインであるルイズとは、祖先が原因でしょっちゅう喧嘩している。
その身を常に恋の炎の中に投じてきた経歴と、火属性魔法の扱いが得意な事から『微熱』の二つ名を持つ。
級友のモンモランシーとギーシュの仲を羨んでいる時に、使い魔召喚の儀式で神也を召喚…一目惚れの様な形で恋に落ち、その身に宿す恋の炎を微熱では済まないほど燃え上がらせている。
神也と使い魔契約を交わした時、神也によってもたらされた力で火魔法の扱いが急激に上手くなり…学内で最年少の火属性スクエアとなった。
神也と出会うまでは浮気性…悪く言えば尻軽だったが、実は処女で…神也に惚れてからは神也に“全て”を捧げ、神也の“全て”を貰い受けた。
神也を溺愛しており、また神也から溺愛されている。
魔法発動用媒体である杖剣は、竜化した神也の爪を主原料としており…軽くて頑強なため、ショートソードとしても使える。

・初期スキル
ハルケギニア式魔法
曲剣運用技術Ｌｖ３
爆乳

・初期装備
竜爪の杖剣（分類：杖・西洋型片刃曲剣）
主従の指輪（分類：アクセサリー、右手装備）
婚約指輪（分類：アクセサリー、左手“薬指”装備）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ１０（ハルケギニア式ではスクエア階級）

水：Ｌｖ２（ハルケギニア式ではドット階級）
風：ＬＶ３（ハルケギニア式ではドット階級）
土：Ｌｖ４（ハルケギニア式ではライン階級）
電：Ｌｖ０
氷：Ｌｖ０
光：Ｌｖ０
闇：Ｌｖ０

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ４（土魔法の派生『錬金』の技術的数値）
爆：Ｌｖ０
霧：Ｌｖ０
草：Ｌｖ０
魔：Ｌｖ６（コモンマジック履修度合いの換算数値）

＊＊

名前：ルナティーア・ラインルゥカー

性別：女

年齢：２４歳

身長：１７０ｃｍ

体重：「セイラにしか教えられないの、ごめんね？」

種族：魔族／吸精夢魔姫（ヴァンパイアキュバス）
階級：永劫支配者（エターニティマスター）／魔法老師（ロード）／魔法装身具使い（エンチャントマスター）

作品：作者拙作【エクスペリア戦記】（Ｒ１８／ノクターンノベルズ）

吸血鬼（ヴァンパイア）の生母と男性型夢魔（インキュバス）の父、竜の育母を持つ美女。
両親からの遺伝で男女両方の生殖器を備えている。
股間の男性器は最大隆起すると長さ２９ｃｍ、直径は６ｃｍにも達する肉の槍と化す女殺しである。
スリーサイズは上から８６／５２／８０。
潜在能力を引き出す形で竜の母に育てられたおかげで比類なき戦闘能力を誇る。
魂レベルで隷属下にあるセイラを【従竜鎧化魔法】で鎧にして纏う事でその戦闘能力は更に上昇…小国ならば単身で陥落できるほどの力を発揮する。
『エクスペリア』と言う世界のフィアルダと言う国で女王を勤めており、民の立場に立った政治を行う賢王として名高い。
生まれて間もないセイラと主従契約を交わし、史上最年少の永劫支配者となった。
従竜であるセイラを魂レベルで溺愛かつ大事にしているが、股間に備えた男性器で物を考える事もあり…麻帆良へ来て早々、キュルケに『貴女を抱かせて』と迫った事がある。
セイラと共に辺境の賊討伐を終え…これから城へ戻ってムフフ、と言う段階で麻帆良へ転移されてきた。
愛剣『フィアルディアンセイバー』は、育母である竜『フィアルダ』が脱ぎ捨てた殻を加工した特注の逸品。
ちなみに胸の谷間や膣口などに、無数の『魔法装身具』を隠し持っている。

・初期スキル

エクスペリア式魔法
曲剣運用技術Ｌｖ３
従竜鎧化魔法
魔法装身具扱い技術（特級）
巨乳

・初期装備
フィアルディアンセイバー（分類：西洋型片刃曲剣）
雷神の加護（分類：魔法装身具、右手装備）
内蔵消費強制増加（分類：魔法装身具、右手装備）
天魔共鳴強化（分類：魔法装身具、右手装備）
詠唱自立化機構（分類：魔法装身具、右手装備）
従竜の主の証（分類：特殊装備品）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
火：Ｌｖ２
水：Ｌｖ３
風：ＬＶ８
土：Ｌｖ１
電：Ｌｖ１０
氷：Ｌｖ１
光：Ｌｖ２
闇：Ｌｖ１

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ０
爆：Ｌｖ０
霧：Ｌｖ０
草：Ｌｖ０
極：Ｌｖ６

＊＊

名前：セイラ

性別：女

年齢：ヒト換算で１９歳

身長：ヒト型形態時…１８５ｃｍ、竜形態時…３ｍ

体重：ヒト型形態時…４０ｋｇ、竜形態時…３００ｋｇ

種族：魔族／魔性雷精竜（ましょうらいせいりゅう）

階級：四血高純度混合種（クワトロ・ハイブリッド）／隷属竜

作品：作者拙作【エクスペリア戦記】（Ｒ１８／ノクターンノベルズ）

ルナが１０歳の頃、育ての母である『蒼雷光竜（そうらいこうりゅう）』フィアルダが産んだ雌竜。

『魔力』『性欲』『雷撃』『精力』の４属性を完全に扱える竜である事から、種族内階級では『四血高純度混合種』と言う呼ばれ方をする魔法竜（マギドラゴン）である。

生まれてすぐにルナと魂レベルの主従契約（処女献上）を交わし、ルナの従竜となった。

竜族特有の強靭な肉体と高い知力を持つ他、高めた『性欲』で（性行為を伴って）ルナから『精』を受けて『魔力』として体内に溜め込み…必要とあらば『雷撃』に変えて放出する事も出来る。

敵意を持って立ちはだかった相手の魔法詠唱を無力化する【竜波域（ドラゴニックテリトリー）】や、口腔内で圧縮した魔力に自身が得意とする攻撃属性を付与して発射する【竜種固有口腔発射攻撃（ドラゴンブレス）】などの特殊能力を備える。
交わした主従契約により発現した『隷属の命鎖』の効力で、ルナが死ぬと強制的に自分も死ぬようになっているが…ルナと共に死ねるなら何も怖くは無いと思っている。
またこの命鎖を通じて何時如何なる時でもルナへ魔力の供給を、加えてルナの元へ瞬間転移を行う事が出来る。
命鎖は顕現・非顕現時において一切の長さ制限が無く、ルナの意思を伴わぬ一切の行為では破壊も切断もできない。
先天色属性が『白』な為、経口摂取出来る食物は『白い物』しか食べる事が出来ない…よって好物は牛乳・ヨーグルト・カルピス・ルナが放出する胤となっている。
極めて温厚で愛らしい性格で、スリーサイズは上から９３／５６／８４。

・初期スキル
エクスペリア式魔法
魔性雷精竜の能力
竜波域
竜種固有口腔発射攻撃
飛行能力
永劫支配者専用の鎧変化能力
爆乳

・初期装備
隷属の命鎖（れいぞくのめいさ）（分類：特殊装備品、首装備）

・麻帆良式魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）

火：Ｌｖ０
水：Ｌｖ３
風：ＬＶ０
土：Ｌｖ０
電：Ｌｖ１０
氷：Ｌｖ０
光：Ｌｖ１
闇：Ｌｖ０

・本人固有魔法適性（ＭＡＸはＬｖ１０）
金：Ｌｖ０
爆：Ｌｖ０
霧：Ｌｖ０
草：Ｌｖ０
極：Ｌｖ１０（魔性雷精竜としての種族的補正）

4時間目：拙作キャラ紹介と設定【自習】（後書き）

一部女性キャラのスリーサイズが原出拙作と違うのは、原出拙作の主人公と散々にゃんにゃんした結果…と言う認識でお願いします。

5時間目：彼の名前はデスメガネ…えっ？（前書き）

まだ原作には入りません。
今回は転移組の9人が原作介入を果たす為の下準備的な話になります。
ただし中心は9人組ではないので悪しからず。

5時間目：彼の名前はデスメガネ…えっ？

後にエヴァ宅内ダイオラマ魔法球で一夜を明かす事にした涼輔達９人だったが、明くる朝…刃と神蓮と蘭里、神也とキュルケ、更にはルナとセイラがシーツをぐしょぐしょのベトベトにし…エヴァから『帰るなら洗濯をして行け！このドアホ共がああああああああああっ！』と、超弩級の大目玉を喰らった。

汚した理由についてはご想像の通り…いや、皆の想像に任せたい。

さてそんな経緯もあり、２４時間（外の時間で１時間）を過ごした魔法球を後にした涼輔達一行は『元の世界に帰るすべもないし、どうする？』『家でも買うか？』『どうせならみんなで一緒に住める豪邸にしない？』『注文住宅にしませんか？』『それだと高くならない？』『資金なら僕が調達しますよ？　ええ、錬金使えば一発ですから』等と言った空恐ろしい会話をしながらエヴァの自宅を離れて行った。

無論、エヴァには神也・涼輔・綾子・ルナの合作である…超高性能な【対学園結界・対人用感応魔力誤認機能】を備えた腕輪をプレゼントした上で。

このままエヴァ宅へ誰も近づかなければ、涼輔一行も後のトラブルに巻き込まれず済んだかも知れない。
だがここは麻帆良…そうやすやすとトラブルと無縁になるはずが無い土地である。

「今のは…エヴァ君の家から出てきたように見えたが？」

涼輔一向が見えなくなって少しした後、エヴァのログハウスの近くの木陰から一人の男性が姿を現した。
彼の名は『高畑・T・タカミチ』
学園結界に覆われた、ここ麻帆良学園都市の奥部にある女子校エリア…通称を中等部と言う、正式名称『麻帆良学園本校女子中等学校』にて英語を受け持つ男性教諭である。
以前、麻帆良学園内で起こった騒ぎを全て一人で鎮圧した経歴から『死の眼鏡(デスメガネ)』『笑う死神』と呼ばれ恐れられている。
歳に似合わぬ老け顔である事をコンプレックスにしている。
実は一般生徒には伝える事の出来ない『裏の顔』を持つが、それは後述する。
愛飲するタバコの銘柄はマールボロ。

「もし本当にエヴァ君の家から出てきたのなら…エヴァ君は何か知っているんだろうか」

言ってタカミチは涼輔達が歩いて行った方向をジッと見つめた後、吸っていたタバコを靴底で揉み消し…吸殻を携帯灰皿へねじ込み、そしてエヴァのログハウスの呼び鈴を鳴らした。

―…ガチャ―

「どちら様でしょう？　マスターはあいにく…高畑先生？」

やがて扉から出てきたのはメイド服を着用した女性。
緑色の長髪が人目を引くが、その表情はどこか無表情だ。

「ああ茶々丸君、エヴァ君は居るかい？」

女性の名前は絡繰(からくり)　茶々丸(ちゃちゃまる)。

その苗字が示す通り絡繰、つまりはロボット…アンドロイドの一種で、ガイノイド（人型ロボットの女性形）。

エヴァの命令には絶対服従のロボットで、エヴァの従者を務めている。

麻帆良学園本校女子中等学校の生徒でもあり、２年Ａ組の出席番号１０。

完成（＝誕生）当初は外部電源で駆動していたが、現在は魔力を込めて巻くゼンマイ式である。

ゼンマイを巻くことは魔力充填の儀式であり、本人はとても快感を感じる。

動力部分は、魔法の力で動いている。

「高畑先生でしたか…マスターは今取り込み中で…

「構わんぞ、茶々丸」

…宜しいのですか？」

それとなくエヴァの存在を隠そうとする茶々丸だったが、それは主本人の意向により採用されなかった。

茶々丸の影から出てきたエヴァは、不機嫌そうな顔でタカミチを見上げた。

「何の用だタカミチ…下らん用事なら即吹き飛ばすぞ？　それとももう１０年ぐらい別荘へブチ込んでやろうか？」

「ははっ、それは勘弁してほしいな」

「なら早く要件を言え、私は忙しいんだ」

エヴァの辛辣な出迎えに苦笑するタカミチ。
タカミチはこんな姿だが、実はエヴァの１５年前の同級生。
彼が歳の割に老け顔なのは、咸卦法習得の為にエヴァの別荘を数年間使っていた事による浦島効果が原因。
つまり彼はエヴァが魔法使いである事を知っており、かつ自身もまた魔法世界に関わった事がある…いや、現在進行形で関わっている…いわゆる魔法先生である。
そんな彼が再び別荘へ、今度は監禁されるとあっては彼でなくとも拒否するだろう。

「…今朝、世界樹が周期ずれの発光現象を起こした事は知ってるかい？」

「ああ、知ってる」

「それに際して学園内で異常が起こってないか調べてるんだけど、エヴァ君自身は何か気が付いた事とか無いかな？」

「無い」

タカミチの質問に対し即答で無いと答えるエヴァ。

「…と言うよりタカミチ、お前はアホか？　私は悪の魔法使いだぞ？　何が悲しくてお前達『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』に、知り得た情報を渡さねばならん？　もし知っているとしても…話す対価として、あの妖怪ジジィの生首を要求するが良いのか？」

『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』
世のため、人のために陰ながらその力を使う…魔法世界でも最も尊

敬される仕事の一つ。
現在は行方不明となっている伝説の魔法使い『千の呪文の男（サウザンド・マスター）』が、とある大戦で大活躍した事で付けられた二つ名で…彼自身も『立派な魔法使い（サウザンド・マスター）』である。

…が、この麻帆良学園都市を裏から支配する…とある巨大組織に属する魔法使いには、この肩書きが間違った免罪符となっており…エヴァはその『間違った免罪符を振りかざした“自称”立派な魔法使い』に、何度も賞金首として殺されそうになった経験がある。

よってエヴァは『立派な魔法使い』を信じない。

かの『千の呪文の男（サウザンド・マスター）』も、エヴァを呪いで縛り『3年経ったら解きに来る』と言いつつ、今日までの15年…エヴァを放置しているのだから。

「いや、それは…」

とは言えエヴァの態度を見れば、エヴァを知る人間ならそれが『何か知っている（YES）』の態度であると分かるし…エヴァ自身も普段ならこんな分かりやすい態度は示さない。
正直、エヴァは舞い上がっていた。

当然だろう…15年にも渡って自分を苦しめてきた、あの『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』が…異邦人の手によって物の数分で解除され、オマケとばかりに『学園結界』の影響すら受けなくなったのだから。

「フン、まぁ良い…とりあえず私は知らんぞ…瀬流彦（せるひこ）やガンドルフィーニ辺りにでも聞いてみたらどうだ？」

瀬流彦・ガンドルフィーニ。
どちらも麻帆良学園中等部に勤務する魔法先生で、どちらも性別は男。

「いや、瀬流彦君もガンドルフィーニ君も動いてるんだ」

「そうか…まぁ精々励め」

「う～ん、それはそうなんだけど…」

「何だ？　まだあるのか？」

エヴァの『用が済んだら早く帰れ』的な視線に圧されるタカミチだったが、実を言えば世界樹発光現象はどうでもよかった。

「エヴァ君、ついさっき不思議な格好をした一団を見たんだ…君の家から出て来たように見えたけど、知り合いかい？」

この疑問こそ本命だったのだから。

「（チッ！　このフケ顔め…要らんタイミングで介入してきやがって）」

対するエヴァは内心で激しく舌打ちをしていた。
まさかあの瞬間、タカミチが自分の家の近所にいて…かつ、涼輔一行を目撃しているとは思いもしなかったのだから。

「不思議な格好をした一団？　いや、何の事だ？　さっきまで別荘の調整の為に地下へ潜ってたから、それは知らんな」

エヴァの言った台詞は後半部分のみが本当の所だった。
何故ならエヴァが魔法使いである事は、タカミチ及び学園長である『近衛（このえ）　近右衛門（このえもん）』等の魔法先生を除いてはクラスメートの極一部しか知らず…かつ『別荘』は、麻帆良においては秘匿するべき魔法技術の塊…むやみに地上部へ置いておく訳にも行かない。
だからログハウスの地下へ部屋を作り、そこに別荘を置いている。

したがって『地下へ潜っていた』はウソではないのである。

ちなみにエヴァの言った『妖怪ジジィ』とは、近右衛門の事を指す。彼は頭が何故か洋梨型をしており、初見の人間からはまず必ず『ぬらりひょん』と呼ばれる。
ぬらりひょんは老人の妖怪→妖怪老人→妖怪ジジィ…と言う訳だ。
またタカミチは近右衛門が『ぬらりひょん』と初めて呼ばれたその際、笑いを堪える為に腹へ力を入れすぎ…腹筋が筋肉痛になった過去がある。

「う～ん、困ったな…今朝、世界樹が周期ずれの発光現象を起こした事が一部過激派に知られてしまって…今、学園都市全域が厳戒態勢にあって…魔法先生の多くが出張ってるんだ」

「なっ！？」

タカミチの台詞に動揺するエヴァ。

「…もし僕の見た一団が“一般人”だった場合、魔法秘匿法に基づく処分をしなくちゃいけないんだけど」

『一般人』の部分を強調して言うタカミチ。

麻帆良では魔法は魔法使いの間だけで共有し、一般人には秘匿するべき技術であると魔法秘匿法によって定まっている。
もしそれが一般人へ露見するとどうなるか。

答えは『記憶末梢』である。

正確には魔法を知ってしまった一般人に対し『記憶消去』の魔法を使い、その一般人の記憶から『今知った魔法の存在』に関わる全ての記憶を消し去るのである。

エヴァは焦った。
もし仮に涼輔達を見ていないと言う意見を貫き通せば、涼輔達の事を知らない学園側は彼らを『一般人』として処分しようとするだろうから。
今ここで涼輔達を見たと言えば、この場は難を凌げる。

だが…

「（かと言って私と関われる人間なんぞ、それだけで『魔法使いです』と名乗っているようなものだ）」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル＝魔法使い。
それは麻帆良学園に勤務する、全魔法先生共通の認識。

だから自分と接触した人間は、エヴァの意見を無視して自動的に魔法関係者とされてしまう。
ましてやタカミチの認識では涼輔一行は魔法を知らない一般人…そうなれば今度は自身が魔法秘匿法違反で処分されてしまう。

ちなみに一般人が魔法を知ると記憶を消されるが、魔法の存在を一

般人へ露見させた魔法使いはどうなるか？

魔法世界世間一般では【オコジョ刑に処される】である。

魔法秘匿法違反を犯した魔法使いは、謎の執行人によってその姿をオコジョへと変えられ…人間だった当時の全能力を失い、オコジョ刑囚専用の収容施設へ収監され…社会奉仕を命ぜられると言われている。

「（せっかく封印が解け、魔力も戻ってきたのにオコジョは御免被る！）」

ちなみに魔法世界には自らを『パンツ神』と称し、パンツのことなら世界の誰にも劣らないと自負するオコジョが存在する。

彼は魔法世界で『下着泥棒（パンツ２０００枚）』『覗き』等の罪で服役しており、伝え聞く所によると性格はスケベオヤジそのもので…タバコを吸い、酒も飲むと言う。

「…どうしたんだい？」

「…いや、そう言えば少し気になった事があってな」

だからエヴァは賭けに出た。

涼輔達を害さず、かつ自身もオコジョ刑を免れる為の賭けに。

「買い物から戻った茶々丸が、妙な事を言っていたのを思い出したんだ」

「妙な事？」

「ああ、麻帆良大橋の辺りで…何かから逃げるように走る、おかしな恰好をした連中を見た…と」

「え？」

「そうだな？　茶々丸？」

「イエス、マスター」

これには逆にタカミチが動揺してしまう。

なぜならタカミチが言った『今朝、世界樹が周期ずれの発光現象を起こした事が一部過激派に知られてしまって…今、学園都市全域が厳戒態勢にあって…魔法先生の多くが出張ってる』と言うのは、エヴァが件の一向について何かを知ってて隠していると睨んだ嘘（ブラフ）だったから。

麻帆良大橋は麻帆良学園都市全域を包む、学園結界の及ぶ最端に位置し…電車を使う以外ではこの橋を渡らなければ麻帆良へ入る事は出来ない、麻帆良の魔法使いにとって要所中の要所。

そんな場所で『何かから逃げる一団を見た』等と言われ、それを是としてしまえば麻帆良学園の魔法先生としては危機管理能力を問われる事となる。

つまりはエヴァのこの質問により、逆にタカミチが…最悪、学園長以下全魔法先生がオコジョ刑に処される可能性が出て来たのだ。

「…」

もちろん茶々丸自身は『大橋付近で逃げ走る一団の話』が、エヴァ

が即興で言った嘘（ブラフ）である事を知っていて『見た』と言った。
茶々丸はエヴァの従者…エヴァの指示には絶対の忠誠を誓い、かつ
エヴァに害が及ぶ事を決してしない。

「…」

「…」

黙り込むエヴァとタカミチ。
両者の間に微妙な雰囲気が漂い始めた。

もう勝負は佳境だ。
どっちが先に折れるか。

「……」

「……」

やがて決着の時は来た。

―♪♪～♪♪♪～♪♪～♪♪～♪♪♪～―

沈黙漂うエヴァのログハウス玄関に、１２８和音と言う無駄にハイ
クオリティなベートーベンの『運命』の曲が鳴り響く。
曲の出所はタカミチが着ているスーツの胸ポケット。
どうやら携帯の着信音のようだ。

「…ゴメン」

―ピッ―

「もしもし、タカミチです…え？　はい、はい…今ですか？　今は欠席している生徒の家にお邪魔してますが…ええ、はい…はい…分かりました、すぐに向かいます」

―ピッ―

聞こえた言葉から察するに、タカミチは誰かに呼び出されたようだ。その顔は酷く苦々しい表情になっている。
そんなタカミチの表情を見て、エヴァは心の中で盛大な高笑いをしていた。

「…すまない、エヴァ君…もう少し話をしていたかったが、急用が出来てしまった」

「そうか」

「新田先生からの救援要請でね…ここからほど近い場所にあるコーヒーショップで、中等部（ウチ）の生徒が不良の集団に絡まれているらしくてね」

「なら早く行ってやれ」

「そうする…じゃあね」

言ってタカミチは踵を返し、足早に立ち去った。

「…マスター」

「…」

去り行くタカミチの背中を、複雑な表情で見つめるエヴァだった。

5時間目：彼の名前はデスメガネ…えっ？（後書き）

ご都合主義ですね…ええ、はい。

6時間目：近右衛門の苦悩

２００２年２月某日、イギリスはウェールズの奥地にあるメルディアナ魔法学校は…終始、厳かな雰囲気に包まれていた。
場所は同学校敷地内の講堂。
壇上にはダンブ〇ドアのような髭の立派な老人が立ち、壇の下ではフードやローブを身に着けた少年少女数名が…その時を今か今かと待ち続けていた。
そう、今この講堂では…毎年恒例の卒業式が開かれているのだ。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！　ネギ・スプリングフィールド！」

「ハイ！」

呼ばれて返事をし、元気よく立ち上がったのは赤髪で眼鏡をかけた少年。
名をネギ・スプリングフィールド。
数えで９歳と言う若年ながら、オックスフォードを卒業できるだけの学力を持ち…かつ、全部で７年ある履修科目全てを５年の飛び級にて首席で卒業した天才。
彼こそかの伝説の立派な魔法使い（マギステル・マギ）で、千の呪文の男（サウザンド・マスター）との二つ名をもつ…大分裂戦争で名を馳せた赤き翼の英雄『ナギ・スプリングフィールド』の息子である。

「卒業証書授与…この３年よく頑張ってきた！　だが、これからが修行の本番じゃ…気を抜くでないぞ！」

「ハイッ！！」

ネギ少年は卒業証書の入った紙筒を右手に携え、校長の言葉に元気な声で返事をする。

やがて式は送辞や答辞…魔法学校を卒業するにあたり、魔法使いとしての心得や在り方等を『校長の言葉』として頂き…場面は卒業式終了後の、メルディアナ魔法学校校長室に移る。

「改めて、卒業おめでとうネギ君」

「ありがとうございます、校長先生」

「さて魔法学校を卒業する事が出来た生徒は例外なく、外の世界で更なる修行に励む事になっておるが…卒業証書と一緒に入っておる、修行内容が記された紙は確認したかの？」

卒業証書の入っている紙筒と修行内容が記された紙…便宜上『指令書』には、魔法学校校長にだけ伝わる魔法がかかっており…筒から取り出された事を指令書が感知し、指令書を取り出した者に相応しい修行内容を表示させると言う代物。

「私はロンドンで占い師だったわ」

言って口を開いたのは、ネギ少年と共に校長室へ同行したネギ少年の幼なじみ。

名をアンナ・コーリエウナ・ココロウァ…愛称をアーニャと言う。

彼女もネギ少年と時を同じくして卒業し、受領した指令書には『A

ＦＯＲＴＵＮＥＴＥＬＬＥＲ　ＩＮ　ＬＯＮＤＯＮ』と表示がされたと言う。
言うまでもなく『Ａ　ＦＯＲＴＵＮＥＴＥＬＬＥＲ』とは『占い師』の事である。

「えっと、僕のは…」

ネギ少年の手の中で指令書が日の元に晒され、それに伴いネギ少年に相応しい修行内容が表示される。

「『Ａ　ＴＥＡＣＨＥＲ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ』…日本で先生をする事…？」

ネギ少年は自身の手の中にある指令書を数回読み返し、その意味を頭の中で更に数回考えた。
そして出た結論。

「「えええええええええええええええええええええええええええええええええええっ！！？？」」

アーニャと共に放った、盛大な叫びだった。

＃

近衛（このえ）　近右衛門（このえもん）は頭を抱えていた。
近右衛門は麻帆良学園の学園長と言う肩書を持つが、裏から見れば関東魔法教会の理事と言う肩書も持っている。

「英雄(ナギ)の息子、麻帆良へ来る…か、胃が痛くなるような話じゃのう」
言って手元の書類へ目を落とした。
書類の差出人はメルディアナ魔法学校校長。

書類によれば今季卒業を迎える生徒の中に、大戦の英雄である『ナギ・スプリングフィールド』の長男『ネギ・スプリングフィールド』が居る。
ネギ少年は父の様な立派な魔法使(マギステル・マギ)いを目指す為に日夜魔法の研究をしている。
卒業後は各地で修行と言う本校の風習に従い、修行地の選考中…現在は行方不明となっている父に、もっとも近き場所で今後の修行をと思いつき…修行場所を近右衛門が学園長を勤める麻帆良学園にて、教職に就かせるものとした。
どうか宜しく頼みたい、との事だった。

「…儂が校長の友人で、ナギと麻帆良が関係が深くて、麻帆良学園は儂の管轄…だから息子を、と言った所かの…むぅ」

ナギと麻帆良の関係は、１５年前にナギが連れてきた吸血鬼…エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルに起因する。
ナギは当時６００万ドルの賞金首だったエヴァを連れてきて『光に生きさせる』と言って【登校地獄(インフェルヌス・スコラスティクス)】と言う呪いで麻帆良学園へ縛った。
『闇の福音(エヴァンジェリン)はメガロメセンブリアが支配組織の治める地、麻帆良で封印された』と言う建前が必要だった為とされる。

この一件により近右衛門の名は大きな力を持つ事となったが、まさかそのネームバリューが今度は英雄(ネギ)の息子を呼び寄せる事になろうとは。

麻帆良学園と言う“特殊”な環境で、英雄の息子をどう扱うか。
上部組織であるメガロの元老院からすれば『麻帆良と言う下部組織で英雄の息子を取り込む事により、最終的にメガロメセンブリアとしての力を強める』と言った所だろう。

ましてや中等部には、実家へ婿にきた…元『赤き翼』の1人、サムライマスターの異名を持つ京都神鳴流剣士『近衛（このえ）　詠春（えいしゅん）』の娘も在籍している。
詠春はサムライマスターとしてナギと共にあの大戦を潜り抜けた事もあり、魔法の存在を知る…言わば裏側を知る人間。
だが娘である『近衛（このえ）　木乃香（このか）』は、その身には関東最大の魔力を有していながらも詠春の方針で魔法を…裏側を知らない一般人であると言う扱いをされている。

「…今戻りました、学園長」

「おおタカミチ君か」

さてどうするかと近右衛門が頭を抱えていたところへ、今朝から発生していた騒ぎの収拾へ出ていたタカミチが戻った。

「どうじゃったかの？」

「はい、発光現象自体は周期ずれであったもののそれ以外に目立った変化は無く…瀬流彦君やガンドルフィーニ君、ウルスラ2年の高音君達にも出張ってもらいましたがこれと言って何も」

「そうか…それは良かった」

「…ただ」

「む？」

「マクダウェル君の事で少々…」

「ほ？」

問題が無いならネギ少年の事を、と思った矢先…タカミチの口から別件を臭わせる単語が。

「エヴァンジェリン君がどうかしたかの？」

「……実は先ほどまでマクダウェル君の家に行っていたのですが」

タカミチからの報告でエヴァは今日、朝から授業に出ていない事は分かっている。

エヴァが『闇の福音』で『悪の魔法使い』で、ナギの施した【登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）】と言う呪いによってこの地へ縛られているのは全魔法先生周知の事実。

これによりエヴァは今年で１５年も中学生を続けているが、そのおかげで中学校程度の授業なぞ既に諳んれるほどで…本人も『最初の３年は楽しかったが、ナギは迎えに来ないし飽きてきた』と言う理由で今ではサボリ放題となっている。

ちなみになぜ中学生かと言えば、エヴァが真祖の吸血鬼と化したのが１０歳で…その外見はどう見ても中学生な為。

「…何かあったのかの？」

「マクダウェル君の家の近所で、奇怪な格好をした9人組を目撃しまして…」

「奇怪な格好をした9人組、とな？」

「ええ」

見知らぬ学生服を着用したの男女のカップル、真っ赤な胴衣を着用した全身傷跡だらけの大男。
チャイナドレスの様な衣装を着た女性が1人、ベレー帽をかぶった小柄ながら胸の大きな少女が1人。
燃える炎の様な赤髪を持つ女性が1人と、その女性の胸に抱かれた子供が1人。
海の様な蒼髪を持つ黄色い服を着た女性が1人と、その女性に付き従うような形で寄り添う白い服の女性が1人。

「…何者かの？」

「さぁ…僕も詳しい情報を得る為に、近所を…マクダウェル君を尋ねましたが、反応は芳しくありませんでした」

「一般人かのう？」

「どうでしょう…麻帆良の一般人であれば、今朝発令された警報で自宅からは出ていないはずですが」

今朝、麻帆良学園都市は警報が発せられてしばらくは外出禁止となっている。
と言うのも学園のそばにある世界樹が、突如として周期ずれの発光

現象を起こした事に他ならない。

世界樹はその内部に有する魔力が、保有限界に達した時に発光と言う形で内包魔力を噴出するが…その噴出は世界樹の周囲６か所に『魔力溜まり』と言う、常態では考えられぬほどの魔力濃度を有する場所を形成する。

これは世界樹が竜脈と言う、大地のエネルギーが集う場所に生えている事もあり…エネルギー的に綺麗な場所なので、樹から噴出した魔力が霧散せずに溜まるのだと言われている。

だがこの魔力溜まりで得る事の出来る魔力は濃密にして強大で、新人魔法使いでも『魔法の射手（サギタ・マギカ）』１矢で成人男性２０人を殺傷できるほどの威力にしてしまう。

事を重く見た学園側は急遽『魔力溜まりで得る事の出来る魔力は、それなりの知識がある魔法使いが用いれば危険なまでに濃密』とし…世界樹発光の日は魔法先生総出で世界樹周辺の魔力溜まりを警戒するようにしている。

ところが今朝はその魔法使い的に危険な『世界樹発光』が何の前触れなしに突然発生した為、学園側は全魔法先生を駆り出して対応に追われる事となった。

また、この混乱に乗じて世界樹の魔力を狙わんとする侵入者に対応する必要も生じた為…麻帆良学園都市は近右衛門の名の元に『他県より指名手配中の凶悪犯が侵入した』として麻帆良学園都市在住の全市民へ向けて外出禁止令を施行…これによりついさっき解除されるまでの数時間、麻帆良学園都市は認識阻害の魔法を使った魔法先生以外だれも屋外へ出てはいないはずだった。

「それと同じくマクダウェル君絡みですが…警報発令の直前、麻帆良大橋の近所で件の９人組を見たと絡繰君が」

「何じゃと！？」

余談だが麻帆良学園都市には、世界樹大発光の日に世界樹周辺で告白をすると必ず成功すると言う都市伝説がある。
これは魔力溜まりの魔力が、告白の言葉を『言霊を用いた魔法』と認識…告白した相手と自分を、呪いに近いレベルで結びつけるからだとされており…学園の魔法先生達が行った動物実験によりそれは事実として実証されている。

閑話休題

「麻帆良大橋で件の９人組か…侵入者じゃろうか？」

麻帆良大橋はこの麻帆良学園都市へ、電車を使わずに陸路で入れる唯一の場所。
同時に麻帆良学園都市を包む学園結界の最端でもある。
そんな場所で目撃された奇怪な格好をした９人組…近右衛門でなくとも魔法先生ならば、侵入者の可能性を疑う。

「それでしたら学園結界に反応があるはずですが…それに、姿を見た僕自身…その９人組からは魔力が感じられませんでしたし」

しかしタカミチが得た情報は、担当クラスの生徒である『絡繰（からくり）　茶々丸（ちゃまる）』が元。
如何に茶々丸がエヴァンジェリンの従者とは言え、茶々丸は『買い物途中に麻帆良大橋の近所で見た』と言っていた。
買い物途中に麻帆良大橋近辺で９人組を見たと言う事は、茶々丸が

見た9人組は麻帆良学園都市内…つまり学園結界内で姿を目撃された事になる。

ただし、絡繰が本当に麻帆良大橋付近で見たのかどうかを確かめる術…そしてその9人組が侵入者かどうかを確かめる術は無いが。

「やっぱり胃が痛くなりそうじゃのう」

タカミチと二人きりの学園長室に、近右衛門の悲痛なつぶやきが響いた。

6時間目：近右衛門の苦悩（後書き）

以後、当拙作では近右衛門のエヴァへの呼称を『エヴァンジェリン君』
タカミチのエヴァへの呼称と『マクダウェル君』とします。
作者の原作知識補完状況によっては修正を入れるかもしれませんが、
現行は当分このまま行きますのでご了承のほどをよろしくお願い致します。

7時間目：脅される妖怪と脅す吸血鬼（前書き）

活動報告【ネギまの二次創作について】も是非ともご一読ください。

さて、色々無茶苦茶ですが…葱の収穫まであと少し、まだまだ原作入りではありませんがお付き合い下されば幸いです。

7時間目：脅される妖怪と脅す吸血鬼

「なるほどね」

話を聞けばその日は、エヴァが言っていたように世界樹が原因不明の周期ずれを起こしており…麻帆良学園都市全域が、その漏出魔力を狙う不埒者に対する厳戒態勢にあったらしい。
自身達が去った後のエヴァの行動内容に、深い理解を示した涼輔一同だった。

「とは言え流石の私も焦ったぞ…まさかタカミチがお前達の事を見ていたとはな」

「タカミチ…あぁ、広域指導員の死の眼鏡（デスメガネ）か」

タカミチからの追及を逃れたその日の夜、突然入った念話で商店街の近くにあるカラオケ店へ呼び出されたエヴァ。
念話の主は神也だった。
神也曰く『それぞれが元の世界へ帰る方法が見つからない為、とりあえずは麻帆良学園都市内に拠点を置きたい…ツテは無いか？』との事。
エヴァとしては“とある儀式”を経ない念話は他に類を見なかったのだが、神也が『僕がキュルケさんと使い魔契約をした際に技能が開花しまして』と言われて納得した。

「…で？　拠点を置きたいとの事だったが…」

「ああ、麻帆良学園都市はその広大な地域全域を学園結界が覆っている」

「この結界は侵入者の感知センサーも兼ねてるから、下手に出ようとすると監視がウザいし」

「そこでみんなで相談して、いっそのこと市民権を獲得しようかと」

エヴァと別れた後、学園都市駅の駅前にある『スターブックスコーヒー』で軽い食事を取った一同。

昼食の代金は…神也が『錬金』で小石を金へ精製し、それを涼輔が荒ゴミ捨て場で拾った汚いツボに満載…それを刃と神蓮が古物商へ売りに行く事で現金化して調達した。

「市民権…麻帆良へ住む魂胆か？」

「まぁね」

「と言う事は戸籍を？」

「その通り…で、エヴァには保証人とかになってもらおうかと」

「なるほど…証文による強制執行などは要らんタイプの保証人か」

ちなみにこのカラオケ店の料金は件の資金から捻出しており、話が長引く事を考慮して４時間の貸切にしてある。

また部屋をすっぽりと包み込むように幻術結界を張っている為、一般人から見てもこんな話をしているようには見えなくなっている。

無論、エヴァは神也の為に年齢詐称薬を服用済みだ。

「だとしたら厄介だな…言っては何だがお前達９人は、麻帆良側からすれば完全に異物…加えて私は学園お抱えの中学生と言う立場、

身分の用意なんぞ法的に不可能だぞ？」

「やっぱりか…最初は神蓮に前面に出てもらって、山奥の個人所有地を買い取ろうかと思ったんだけど」

「不動産の不法売買はカンタンに足が付くから止めましょうと、私が刃さんを止めました」

「パスポートどころか就労ビザすら無いからな…」

「ダイオラマ魔法球を内外の時間経過比率を１：１にして、そこに住むと言う手段もあるにはあるが…魔法球自体が高価だし、内部調整には膨大な魔力が必要となる……やはり一番早いのは妖怪ジジィを取り込む事だな」

言ったエヴァの台詞を聞いて神也は考え込んだ。
原作でイギリスのウェールズから教師としてやって来るネギは、作中において『麻帆良学園に籍を置く教師』以外の身分を証明する描写が無いのに“飛行機で来日”している。
原作作者がそこをどう説明するのかは知らないが、恐らくネギの母校であるメルディアナ魔法学校の校長が何らかの手段を用いてパスポート等の発行を行ったと言う設定だろう。

つまり魔法学校の校長級の権限があれば、なんら身分の証明が無い人物に身分を与える事など造作もない…よってそれは麻帆良学園の学園長である、妖怪ジジィの通称を持つ人物…恐らくは『近衛　近右衛門』であっても可能だろうと言う事になる。

ましてや神也の記憶では麻帆良学園都市は、魔法世界（ムンドゥス・マギクス）で多大な影響力を持つメガロメセンブリアの下部組織だ。

末端とは言え学園長が手配すれば十中八九、身分は獲得できるだろう。

「…対価を要求されるでしょうね」

「だろうな、あの妖怪ジジィの事だ…九分九厘『ならば身分を保証する代わりに巡回警備員になってくれんかのう？』とか言い出すぞ」

エヴァ曰く麻帆良学園は慢性的な人手不足に陥っており、如何に６００歳の吸血鬼と言えど実力から警備員に任ずるほど。

そこへ身分と言う重い物を欲しがる実力者が現れた…学園側からすれば鴨が葱どころか、鍋と出汁すら持参してやってきたと思うはず。

「巡回警備員か…悪くは無いけど、少し強制力が弱いかな？」

「最悪の場合は魔法バレして魔法先生だよ」

「なるほど…それは私的には面白いな」

「何でよ」

「いや何、お前らが魔法先生となったら私が進んで学校へ行くようになると言っているんだ…これだけでタカミチや妖怪ジジィは喜ぶと思うが？」

言外に『私は筋金入りのサボリ魔だ』と告げるエヴァ。

その言葉に神蓮・神也・キュルケの３人は苦笑いを浮かべた。

神蓮は娘である雪蓮…孫策が、呉王としての政務をよくサボるばかりか…自身も前呉王としての座に居た時、しょっちゅうサボってい

た過去があったから。
神也とキュルケは神也の魔法でキュルケのダミーを作り…ダミーに授業を受けさせて本体は授業をサボり、２人して街を遊び歩いていた過去があったから。

ちなみに神蓮は自分のお目付け役だった冥琳…周瑜に見つかってド級の大目玉を喰らい、一週間の間…食事とトイレ以外の間は執務室へ監禁された。
神也とキュルケは神也が作ったダミーが無駄に高性能なせいで、ダミー自ら『自分はキュルケのダミーです』と暴露してサボりが露見…先生全員からこっぴどく怒られた。

だからこそ『サボリ魔がちゃんと出席する事』がどれだけ嬉しい事かと言うのは容易に想像できた。

「ふむ…ならばまずはタカミチ氏に連絡をとってくれないか？」

「ほう？　警備員の任を自身から拝命するのか？」

「どうせ一部魔法先生以外は“狂った正義”を振りかざす『立派な魔法使い』でしょう？　強制執行証文無しでも約束を取り付けて、約束通り動けば大きな問題は無いですよ」

「それに警備員になれば労働基準法とかで給料請求出来るし、最悪は力を示せば大概は黙認されると思うぜ？」

「それはありがたいのう」

「「「「「「「ッ！？」」」」」」」

仮にも未成年中心の一向においてすべきではない話で盛り上がる一同だったが、突如室内に響いた老人の声に息を呑む。
エヴァは声の主が誰であるかを瞬時に見抜き、中空を睨みつける。

「…今回は遠見の魔法を使っておらんよ」

―ガチャ…―

言いつつ声の主は、涼輔達がいる個室のドアを開いてその姿を現した。
薄藤色の着流しに紺色の袴。
履物は白足袋に草鞋。
これで顎髭が膝まで届くほど立派で…後頭部が大きくなければ、誰がどう見ても某死神代行マンガの護廷十三隊総隊長である。

「ジジィ！」

「カラオケ屋の一個室を貸切にして籠もり、今後の相談とは…ほっほ、考えたもんじゃのエヴァンジェリン」

「…エヴァ、こちらのご老人は？」

突然現れた謎の老人に一応の警戒をしながらも、綾子が老人の名を聞こうとする。
だが次の瞬間にエヴァの口から出て来たのは、この老人を人間とは認めない内容の罵詈雑言だった。

「老人？　ハッ！　このジジィは妖怪だよ…いるだろう？　日本古来の妖怪に『ぬらりひょん』と言う種類が…このジジィはそれだ」

「「「「「「「「「ぶふっ！」」」」」」」」

エヴァの身も蓋もない紹介に、思わず吹き出す涼輔達。

「いや儂、人間じゃし」

「そんな頭の形状をした人間がいてたまるか！　この妖怪ジジィめ！！　その後頭部カチ割って正体を暴いてやろうか！　このぬらりひょんめ！！」

「「「「「「「「「ぶはっ！」」」」」」」」

立て続けに飛ばされる『妖怪ジジィ』『ぬらりひょん』発言に、それまで堪えていた笑いを吹き出してしまう涼輔達。

そんな涼輔達をチラッと見てから、再び老人へ視線を向けるエヴァ。

「ジジィいびりもこれぐらいにしておくか…」

「正面切って『ジジィいびり』って…儂、泣いていいのかのう？」

「ジジィが泣いたってキモイだけだ…で？　こんなカラオケ屋まで何をしに出て来た？　麻帆良学園学園長、近衛（このえ）近右衛門（このえもん）殿？　いや…関東魔法協会の理事長殿？」

「「「「「「「「ッ！？」」」」」」」」」

エヴァの台詞により、謎の老人…いや近右衛門を含め、エヴァ本人と神也を除き全員が再度息を呑んだ。

この好々爺のような容姿をしている老人が、まさか麻帆良学園の学園長で…同時に関東魔法教会の理事長である事にショックを隠せな

いようだ。

「…オホンッ！」

そんな中、神也がわざとらしい咳払いをする。
それを合図に静まり返る部屋内。
壁から聞こえてくる、他の部屋で歌われている曲が妙に響く。

「話をどうぞ近右衛門殿…おっと、僕は熱風（あかぜ）　神也（しんや）と言うしがない亜人です」

「（亜人とのう…）ご丁寧な挨拶痛み入る、熱風君」

「いえ」

「さてまずは君たちの会話を、断りも無く聞いた事…ここに謝罪させて頂く、申し訳なかった」

言って頭を下げる近右衛門。
その姿にようやく、涼輔達一行が真面目な表情になった。

「…聞かせてもらった話から推測するに、君たちの何名かは魔法使い…そうじゃな？」

近右衛門の質問に対し、神妙な表情で頷くのは涼輔・綾子・神也・キュルケ・ルナ・セイラの６人。
彼らは今この瞬間、少し前にエヴァへ手渡した腕輪と同じ系統の物を身に着け…その身から感じれる魔力を一般人と同じレベルまで下げている。

「ただし俺達は、そちらで言う『立派な魔法使い(マギステル・マギ)』じゃないし…『立派な魔法使い(そんなもの)』を目指そうと思った事も無いけど」

「ひょ？　ではどこにも所属はしておらん、と？」

「ええ」

関東魔法教会の理事は、義理の息子が関西呪術協会の長を勤めている。

よって関東圏と関西圏での違いはあるものの、魔法使いはその多くが東西どちらかに所属している事が多い。

その中においてどこにも属していない魔法使いの一団…これが如何に脅威かは文面から見て取れると思う。

「僕たちは今朝…ここ麻帆良学園の世界樹が周期ずれの発光現象を起こしたその時、何かに導かれる形でここ麻帆良へやってきました」

「出現場所はエヴァの自宅にあるダイオラマ魔法球の中です」

「状況を推測するに、世界樹の魔力を媒介にした転移魔法でこの地へ集った物と思われます」

「…なるほど、状況が状況じゃから少々理解に苦しむが…諸君らの立場は把握した…つまりは時空迷子、と言ったところか…」

頷きを一つ返して近右衛門は顎髭を撫でつける。

これはどうやら、近右衛門が何かを考える時の癖の様だ。

「ふむ……だとすると、早急に身分の確立をする必要があるのう…この麻帆良学園都市は、本国の傘下組織じゃからな…動く為にも身

分確立は急務だろうて……」

「…おいジジィ」

「む？」

「神也達の話を聞いて考え込むのはジジィの勝手だが、私から1つ聞きたい…どうやって私がここに居る事を知った？」

エヴァは神也から念話を受けてすぐ、近右衛門とタカミチを警戒してログハウスに高度な認識阻害をかけた。
自身の腕輪に備わっている魔力誤認作用の術式を自身で弄り、居間に置いてあるぬいぐるみを核として…近づいた者に『マクダウェル家は現在無人』と言う認識を植え付ける認識阻害の魔法陣を展開した。

「実を言えばのう…」

実を言えば近右衛門は、タカミチの報告を聞いて独自にエヴァを観察していた。
魔法を使えば容易に動向は把握できるが、逆に魔法だと感づかれやすい。
そう思い現金でその道のプロ…と言っても魔法使いではなく一般人を雇い、魔法ではなく一般人の目によってエヴァの動向を探っていた矢先…夜8時を回った頃、エヴァが茶々丸も連れず単身で家を出た事を知る。
報告によればエヴァはいつものゴスロリドレスではなく、黒のセーターにジーパンと言ういでたちで家を出たそうだ。

「ちなみに通信手段は小型無線ビデオカメラとトランシーバーじゃ

な」

「そんな時代の遺物で私は…」

「街中に散らせた連中からエヴァンジェリンがこの店に入った事を掴んだ…後は儂が自分で出向いて来たんじゃが、この部屋だけ魔法結界が張ってある事に気が付いての…ここ、経営者と従業員は全員が一般人じゃろ？」

「…チッ、念の入れすぎで逆に怪しまれる結果となったか…クソ、魔法の警戒だけではダメと言う事か」

『木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中』とは良く言った物だが…エヴァが念を入れすぎたせいで、人の中に隠した人が人の領域から外れて見えたようだ。

「…さて、本題と行こうかの……改めて、儂は近衛　近右衛門…知っての通りここ麻帆良学園の学園長と、関東魔法教会の理事長を兼任しておるよ」

言って自己紹介をし、表情を真面目な物に変える近右衛門。
その眼力は鋭く…とてもではないが年老いた老体とは思えない。
特に自身が王であった涼輔・神蓮・ルナは、自身も覇気を発して雰囲気に呑まれないようにしている。
政治には疎い神也やキュルケでさえ、近右衛門と涼輔と神蓮とルナの纏う雰囲気を『黙して千戦の政戦をこなす老獪なる政治家』として捉えているほど。

「俺は御鏡　涼輔…魔法使いで魔族、種族は魔神（ヴァンデル）」

「私は御鏡　綾子…魔法使いで魔族、種族は高位精霊(ハイ・スピリット)…涼輔は義理の兄です」

「俺は呂堂　刃…氣使いで武将、人間」

「私は孫　神蓮…元王で武将は現役、刃の妻…刃と同じく人間」

「私は徐　蘭里です…前2人と同じく現役武将、刃様のお嫁さん…私も人間でしゅ」

「僕も改めて、熱風　神也…魔法使いで元人間だけど、能力から種族的には亜人…竜人(ドラゴニクス)になってる」

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー、長いからキュルケと呼んでちょうだい…魔法使いで種族は人間、階級は貴族ね」

「私はルナティーア・ラインルゥカーよ…魔法使いで、種族は吸精(ヴァンパイア)夢魔姫(キュバス)よ」

「セイラです…魔法使いで、種族は魔法竜(マギドラゴン)…階級はルナ様の隷属です」

涼輔の自己紹介を皮切りに、既に自己紹介を終えた神也を含む残る8人も続々と自己紹介をする。

名前と種族、階級を告げただけの極普通な自己紹介だったが…近右衛門は冷や汗を流していた。

名乗った全員がプレッシャーを発しているのだ。

「……気が付いたかジジィ」

「…お主も一角か」

心なしか顔を青くしているような近右衛門に対し、さも嬉しそうな表情でその内心を探ろうとするエヴァ。
対する近右衛門はエヴァの質問に対し、エヴァが何を問いたいのかを瞬時に察した。

「と言うより私を含めて6つ全部揃う、だな」

エヴァの言葉を聞いて“やはりか”と、近右衛門は心中で苦虫を数匹まとめて噛み潰した。
近右衛門は全員の自己紹介にあった『種族名』を聞いて咄嗟に、魔法世界(ドゥス・マギクス)に伝わる『魔法世界六大最強種族』の事を脳内検索にかけてみる。

魔神(ヴァンデル)・高位精霊(ハイ・スピリット)・竜人(ドラゴニクス)・吸精夢魔姫(ヴァンパイアキュバス)・魔法竜(マギドラゴン)・真相の吸血鬼(ハイ・デイライトウォーカー)。

この6種族こそ、魔法世界において最強と謳われる種族。
その戦闘能力は単身でナギ級の立派な魔法使(マギステル・マギ)い以上に相当すると言う。
試算ではナギと共に大戦をくぐり抜けた伝説の傭兵『ジャック・ラカン』と同等かそれ以上の戦闘能力を有するとも。

「どうだ？　魔法世界に伝説として伝わる6種の最強種族を…生きながらにして目の当たりにした気分は？」

涼輔が魔神(ヴァンデル)。
綾子が高位精霊(ハイ・スピリット)

神也が竜人（ドラゴニクス）。
ルナが吸精夢魔姫（ヴァンパイアキュバス）。
セイラが魔法竜（マギドラゴン）。
そしてエヴァが真相の吸血鬼（ハイ・デイライトウォーカー）。

「力を抑えておるんじゃろうが、それでもこの威圧感…全力全開ともなれば、魔力の余波だけで儂は消し飛ぶじゃろうな…流石の儂でも『千の呪文の男（サウザンドマスター）』や『千の刃』級の相手を6人同時…いや、現在は封印状態であるエヴァンジェリンを除いても5人と同時に敵対できるはずもないのう」

近右衛門は先ほど、自己紹介をした際に自身以外の全員を軽く威圧したつもりだった。
実力の低い魔法使いならそれだけで顔色を変えるはずだったが、逆に強いプレッシャー付きの自己紹介が返ってきた。
それも6大最強生物全種族が一堂に会していると言う事実のオマケ付きで。

「…」

“現在は封印状態”のくだりでエヴァがそっとほくそ笑んだのだが、眼前の事実に狼狽する近右衛門が笑み（それ）に気付けるはずはなかった。

「さて本題に入るぞ、ジジィ」

「う、うむ」

「…条件次第では、私はサボりを止めてやってもいいぞ？　ああ、サボりを止めるどころか休日と体調不良以外の全ての日は最後まで授業に出てやる…無論、授業には積極的に真面目に取り組んでやる」

「何と！？」

「更に、警備員職にも積極的に参加してやるぞ？」

「むぅ…」

エヴァの『サボり』は麻帆良学園魔法教師の目下の悩みの種だった。近右衛門・タカミチ・エヴァンジェリン…この3人を総じて『麻帆良学園最強の三強』と呼ぶ。タカミチは言うまでもなく、近右衛門は関東魔法教会の理事を務める事が出来るだけの実力者…そしてエヴァは封印さえなければ学園長を圧倒できるだけの腕の持ち主。

そんな『学園最強』の一角がサボりを止め授業に出る。これは近右衛門からすればカモがネギどころか、ナベとダシすら背負って向かってくるような話だ。何故ならエヴァは『立派な魔法使い（ナギ・スプリングフィールド）』が麻帆良へ封じた『巨悪』なのだから。

「とは言えこれだけでは決められんだろうから条件の1つを提示しようか…私をサボり止めさせたいのなら、この9人を麻帆良学園中等部2年の魔法先生にしろ…最悪、魔法には関わらない普通の教師でも構わん」

「…それだとタカミチ君の立場がないんじゃが……儂以外でエヴァンジェリンを抑える事が出来る魔法先生は、咸卦法（かんかほう）を使えるタカミチのみじゃし」

タカミチは自身やエヴァと並ぶ三強。
その三強の内一角を切り崩せとエヴァは言っているのだ。
ましてやタカミチは学生からの人気が高く、迂闊に首を切れば学園長としての立場が危うくなる。
悩む近右衛門。

そこへ襲いかかるエヴァの追撃。

「タカミチだ？　ハッ！　咸卦法だ？　フハハッ！　そんなモノ恐るるに足りんわ…綾子、頼めるか？」

「はぁ……右手に魔力、左手に氣…魔力と氣の合一」

―ぱんっ―
―ゴウッ！―

エヴァの頼みを受けた綾子は、何気ない動作でタカミチの秘技である咸卦法をその場で行う。
融合された魔力と氣の混合波が、結界が張られているとは言え狭い室内を爆発的に満たしていく。
…忘れているがもしれないが、ここは普通のカラオケ店の一個室である。

「馬鹿な…咸卦法じゃと！？」

「どっちがオマケかは知らんが、綾子は魔法使いでもある…体質的に呪文詠唱の出来ないタカミチよりは魔法使い然としていないか？
更には奴の十八番（おはこ）である居合拳も使えるそうだ」

「ひょっ！？」

「綾子から聞いた話、涼輔の居合抜きはこの…咸卦法使用中の綾子より速いらしいぞ？　さぁどうするジジィ、私の登校と引き換えにこの戦力を得る覚悟はできたか？」

「いや待ってくれんか、これは儂一人で解決できる問題の域を越えておる！」

言って近右衛門は腕を組み、目を閉じて考え始めたのだった。

８時間目：顔合わせ　ｖｓガンドルフィーニ（前書き）

稚拙ながらバトルシーンを入れました。
とは言え瞬殺ですが。
以後数話はバトルシーンとなる予定です。

8時間目：顔合わせ　ｖｓガンドルフィーニ

現在時刻は深夜の１１時５０分。
普通ならば誰しもが寝静まるのがこの時間だが、ここ世界樹前広場だけは様子が違った。
広場には多くの人間が集まっており、各々がここに来て以後の予想などを立てていた。

「しかし本当に大丈夫なのですか？　闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）が見込んだ警備員候補など…」

どう見てもマフィアな外見をした、教師と思わしき男が口を開いた。
彼の名はガンドルフィーニ。
麻帆良学園中等部に勤める魔法先生の１人で、同僚からは『少々古い考えと頑固さを持つ』と評されている。
有事の際は右手にハンドガン、左手にナイフと言う…某潜入ゲームのネイキッドな彼ばりの近接格闘術、いわゆるＣＱＣ（クロース・クウォーターズ・コンバット）を使う。

「実力の一端は学園長がその身をもって体験済みだそうです…ただ、懸念事項としては一部の魔法先生とは反りが合ない事らしいですが」

言ってタカミチが苦笑する。
言わずもがなタカミチは居合拳と咸卦法（かんかほう）で、大勢の暴徒を１人で鎮圧できる実力者。

「反りが合わないとはどういう事です？　高畑先生」

その手に木刀を持つ女教師、葛葉（くずのは）　刀子（とうこ）がタカミチの言葉に反応を示した。

刀子は京都神鳴流の剣士で、あのサムライマスターで元赤き翼の『近衛　詠春』とは同門。
現在の在学生に弟子が居る事もあり、裏の関係者として今日はこの場に立っている。

「会って本人達の口から話を聞くのが良かろう…儂も内容は聞いたが、又聞きの内容となると話の濃度が薄まるのでな」

言って飄々と笑う近右衛門。

今この場に居るのは『警備員新規参加者との顔合わせをし、その参加者の事で話がある』と言う用件で近右衛門に呼び出された魔法先生と魔法生徒である。

カラオケ店での一件の後、近右衛門は学園の魔法先生・魔法生徒を相手に己が力を示すことで今回の一件を決着にしようと考えた。

「魔法先生と反りが合わない、か…刹那はどう思う？」

タカミチの言葉と学園長の言葉を聞き、これから来る人物がどんな者か…そんな事を考えつつ、背負ったギターケースの様子を確かめるのは『龍宮（たつみや）　真名（まな）』
黒髪と褐色の肌を持つハーフで…学生ながら傭兵紛いの事を生業とし、報酬さえ貰えるなら大概の事を成し遂げる凄腕のスナイパーでもある。
ちなみにギターケースの中には、ゴム弾を装填したアサルトライフル…Ｍ１６Ａ１を改良した物が収納されている。
普段は龍宮神社で巫女をやっており、本人が有する大きな胸の魅力もあって巫女服姿の龍宮は人気が高い。
無論女子中等部２年…エヴァと同じクラスに在籍しており、出席番

号は１８番である。

「私は特に何とも…お嬢様に危害が加わらなければそれで良い」

真名の質問に答えたのは、刀子と同じく木刀を携えた少女。
名は『桜咲（さくらざき）　刹那（せつな）』と言う。
刀子と同じく京都神鳴流を修めている剣士だが、実力的には刀子の方が数段上である。
符（ふ）と呼ばれる媒体を駆使して超常現象を起こす『陰陽師』でもあり、有事の際は神鳴流と陰陽術の二刀流になる。
エヴァや龍宮と同じクラスに在籍…出席番号は１５。

「わたくしとしては明日の授業の予習をしていたかったのですが…」

言って髪を掻き上げるのは、同じ麻帆良学園都市の高等部に該当するウルスラ学園の２年に在籍する『高音（たかね）・Ｄ・グッドマン』である。
エヴァや刹那と同じ、数少ない魔法生徒の１人で…影を使い魔として戦う『操影術（そうえいじゅつ）』が得意技。
口調からわかる通りお嬢様である。

「さて、そろそろ時間じゃが…エヴァンジェリンは……来たようじゃな」

指定した０時になるかならないかのタイミングで、広場に近づいてくるエヴァンジェリンの姿に気が付いた近右衛門。
良く見ればその後ろに、全身を黒ずくめのマント・フードローブで覆った大小９人の人影がある。

「待たせたな」

「良く来てくれたの、エヴァンジェリン」

「それはこっちの台詞だジジィ…名だたる連中一同をひっかき集めてこの場に居ると言う事は、私の条件を飲むか飲む用意があると言う事だろう？」

「それを踏まえた話し合いをする為に、こうして魔法先生と魔法生徒を集めたんじゃ……しかしエヴァンジェリン、何故に年齢詐称薬を服用しておるんじゃ？　幻術でも良かろうに」

近右衛門が指摘する通り、エヴァは大人の女性の容姿をしている。黒いドレス姿だが、豊かな肢体のおかげで非常に艶めかしい。刹那の顔が赤いのは何故だろうか？

「これはこっちの都合でな…紹介したい連中、まぁ後ろの9人だが…その中に1人、体質的な問題があってな…接する為にはこの姿でなくてはならんのだ」

「色々あるんじゃのう」

「まぁな…では始めようか？」

エヴァの合図を受け、後ろに控えていた9人がエヴァの横に並ぶ。一番小さな黒ずくめが、さりげなく刹那からは一番遠い位置に立っているのは言わずもがなだ。

「ではまず儂とエヴァ以外は初対面じゃから、自己紹介から行こうかの」

―バサァッ！―

近右衛門の言葉を受け、９人は全員が同時にマント・フードローブを脱ぎ捨てた。
分からなかった容姿が明らかになり、それは男４人女５人の混成パーティである事が学園側にも分かった。

「涼輔から順に行こうか？」

「俺は御鏡　涼輔…魔法使い」

「私は御鏡　綾子…魔法使い、涼輔は義理の兄です」

「俺は呂堂　刃…氣使い」

「私は孫　神蓮…刃の妻」

「私は徐　蘭里です…刃様のお嫁さんでしゅ」

「僕も改めて、熱風　神也…魔法使い」

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー、長いからキュルケと呼んでちょうだい…魔法使いよ」

「私はルナティーア・ラインルゥカーよ…魔法使い」

「セイラです…魔法使いで、ルナ様の侍女です」

自己紹介を受け、９人中６人もの見知らぬ魔法使いが居る事にショックを受ける学園側魔法関係者。

そのショックはすぐに動揺へと変わり、学園側魔法関係者の間に不安となって伝播する。

「彼らはとある事件に巻き込まれてこの麻帆良へやって来て、エヴァが保護したんじゃ」

「な！？　闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）が保護したですって！？」

近右衛門の紹介に反対姿勢を示したのは、先ほどの動揺からいち早く立ち直ったガンドルフィーニだった。

彼は自身が『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』である事を誇りに思っており、それゆえに“魔法使い”を忌むべき巨悪である『真祖の吸血鬼（エヴァンジェリン）で賞金首』が保護した事に納得がいかないようだ。

「反論は後で聞こう、今は話を進めるぞ……彼らは今現在、それぞれの故郷へ帰るすべが無く…また突然麻帆良へ放り出される形となった為、身分が無い…ましてや彼らはその多くが魔法使い、野放しにしては麻帆良として非常に危うい立場なんじゃ」

「話を聞いた私はコイツらの事が気に入ってな…何とか助けてやりたいが今の私はこの麻帆良へ封印された身、動きたくても動けんのが現状だ…そこでジジィに連絡し、何とかならんかと聞いたのだ」

「会って体験したが、彼らの実力は本物じゃ…またエヴァ自身の頼みで、彼らが学園預かりとなれば積極的に登校・積極的に授業を受ける事を誓ってくれたのじゃ」

カラオケ店での会談で、近右衛門はエヴァの出す条件を全般的に飲む事を決意した。

やはり学園長と言う教育者の立場からして、不登校の生徒がキチン

と登校するようになるのは喜ばしい事だったから。
加えて一端とは言え垣間見れた実力が、魔法世界関係者としては手放すのには非常に惜しく…確保しておけるならば是非とも確保しておきたかった。

「無論、ほれ…強制文書による契約書もあるぞ？」

言って近右衛門はエヴァが…９人が学園預かりとなれば、学校のスケジュールに従い登校・授業を受ける旨の記された誓約書を取り出した。

「…学園長の賛成に反対はしません、が！　彼らの実力が本物かどうかは自分の目で見極めます！　闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）が、そんな見知らぬ９人を保護するだけで登校してくるなど…何かの間違いに決まってます」

そう言いつつ懐からナイフとハンドガンを抜き出し、某ネイキッドの様に構えて前へ出るガンドルフィーニ。

「力試しと言う訳か」

「そうだ、お前の言う人材が本物かどうか試してやる」

「フハハ、まぁ茶番となるだろうが精々頑張るが良い…で？　こっちは誰が行く？」

「…じゃあ僕が出ます」

いきり立つガンドルフィーニの前に立ったのは神也だった。
神也は腰に提げていた直剣の長い方を鞘ごと腰から抜いてキュルケへ渡し、抜かなかった短い方の鞘から短剣を抜き…それを左手で逆

手に持ち、ガンドルフィーニから１０ｍ離れて立った。
右手にハンドガンを握っていれば、それこそガンドルフィーニと全く同じ構えである。

「ではルールじゃ…勝負は相手の気絶か降参で決着、多少の怪我はやむなしとするが相手を殺害する事はまかりならんぞ？　両者、それでかまわんな？」

「ええ！」

「はい」

ガンドルフィーニと神也が納得した事により、近右衛門は両者の真ん中を中心として半径６ｍの結界を張る。

「いざ尋常に…始めぇいっ！」

そして開始の合図が告げられ、それと同時にガンドルフィーニは神也に走り寄った。
対する神也もガンドルフィーニへ接近…近距離戦を仕掛けるようだ。

―バンバンバンッ！―

まっすぐ突っ込んでくる神也に対し、ガンフドルフィーニはハンドガンを３発発射。
左肩部・左手首・右大腿部と言う、相手を制圧するのに必要な個所を狙い撃つ。

「…魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾（セリエス）・火（イグニス）の３矢」

―シュバッ！―
―ボボボッ！―

対する神也はガンドルフィーニが発射した弾丸の弾道を瞬時に見極め、左手に持った短剣…エクスカリバーダガーを振り、無詠唱の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を火で３発連射し…ガンドルフィーニの弾丸全てを正確に撃ち落とす。

「なんと！？　無詠唱の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』で、あそこまで正確に…高速で飛来する弾丸を撃ち落とせるとは！」

結界外から近右衛門の驚きの声が聞こえる。
神也としては弾丸を切り払っても良かったのだが、この結界が弾丸を防ぐかどうかは怪しかった。
だからこそ『魔法の射手（サギタ・マギカ）』での迎撃を選択した。
本当ならば保有スキル【メモリースキル】により『魔法の射手（サギタ・マギカ）』ではなく他の魔法を撃つ事も出来たし…同じく保有スキル【詠唱破棄】によって全ての魔法に対し詠唱をする必要すらないのだが、伏せれる手札は伏せておいた方が良いと判断した。
要は手加減をしているのだ。

「…加速（アクケレレット）」

無詠唱の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』に驚くガンドルフィーニを見つつ、保有スキル【多重思考】で次の行動を考える神也。
このまま更に無数の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』でガンドルフィーニをこんがり焼くのも良いが、うっかり殺すとみんなに迷惑がかかる。
そう考えた神也は行動速度を上げる魔法を唱え、自身の動きを加速する。
そしてその速度のままガンドルフィーニの背後へ回り込み…

「速いっ！」

―ガッ！―

結界外で驚く学園側の反応を、声だけ耳で拾いつつ…ガンドルフィーニの後頭部へエクスカリバーダガーの柄による突き込みを一撃。

―ドッ！―

―ズサササササ…―

衝撃で吹き飛ばしつつ、ガンドルフィーニの意識を刈り取った神也は…吹き飛びゆくガンドルフィーニを見つつも、残心を解かない。

気絶したガンドルフィーニは地面を転がりながら進み、近右衛門が張った結界へ衝突。

『べちゃっ！』と言う生々しい音を響かせはしたものの、ガンドルフィーニに動く気配はない。

どうやら完全に意識を失っているらしい。

「そこまで！　勝者、熱風　神也！」

近右衛門の声が響き、ようやく残心を解く神也。

「フハハ、良いぞ神也」

「これぐらいなら何て事はありませんよ」

エヴァのねぎらいに対し、そう答える神也だった。

８時間目：顔合わせ　ｖｓガンドルフィーニ（後書き）

ガンドルフィーニ先生が使うＣＱＣは、確かに近接格闘術として有名ですが…魔法使い相手に持ち出す戦闘術ではないと思うのは私だけでしょうか？

９時間目：顔合わせ　ｖｓ刹那（前書き）

と言う事で神鳴流剣士でこのちゃんの抱き枕こと刹那の戦闘シーンです。
とは言え今回も９人組側から出た相手に、軽くいなされますが…
戦闘シーンを書くのは苦手ですねぇ…

9時間目：顔合わせ　ｖｓ刹那

「では次はこの私、桜咲　刹那が神鳴流でお相手いたします」

言って出てきたのは刹那。

背負っていた刀袋を地面へ置き、刀子から木刀を受け取り結界内へ。

その身からは抜身の刃のような鋭い気迫が放たれている。

「神鳴流ですか…では私が、無双御鏡流で受けて立ちます」

刀袋に入ったままの『小烏丸天国（こがらすまるあまくに）』を涼輔に預け、神也がどこからか取り出した木刀を携えて結界に入る。

「…」

「…」

対面し、礼をしてから木刀を正眼で構える刹那と綾子。

元来『神鳴流』にも『無双御鏡流』にも定まった構えはないのだが、刹那が剣道部での試合を模して正眼で構えたのに綾子が応じた形だ。

「…始めぇいっ！」

近右衛門の合図で先に動いたのは綾子。

無双御鏡流とは別に修得済みの古武術【氣闘拳（きとうけん）】による氣の操作を行い、足で炸裂させ氣の力で一気に近づく。

「瞬動！？　くっ！」

―ガァンッ！―

突然眼前に現れた綾子が放った袈裟斬りに対し、咄嗟に逆袈裟で斬り返す刹那。

そのまま袈裟斬りで反撃を仕掛けるが、接近された時と同じ速度で後退されて距離を取られ空振り。

綾子は距離を取った後、再び接近し…今度は突きの3連打を仕掛ける。

「これ位ならっ！」

その突き3連打を3連斬り払いで凌ぎ、そのまま跳躍。

「神鳴流、斬岩剣！」

突きを払われて一瞬の隙が出来た綾子に対し、刹那は神鳴流の奥義を放った。

斬岩剣…その名の通り、気で強化した刀剣による強烈な一撃で…その威力は岩をも断つ。

瞬動…氣による高速移動が出来る程度の剣士なら、この一撃で沈むはず…そう考えて放たれた斬岩剣だったが。

「無双御鏡流、瀑布割！」

―ガッ！！―

右から左へ、野球で言うフルスイングのような太刀筋で振るわれた綾子の剣技。

それは正に瀑布…滝を割るような威力を秘めた一撃だった。

「そんなっ！？」

崩された姿勢は瞬時に立て直され、放たれた奥義が力で押し負ける。
相手を断ち、粉砕する事に長けた斬岩剣が力で負けた事に狼狽える刹那。

「京都神鳴流…京の都に蔓延る悪鬼羅刹を調伏する為に編み出された退魔の剣で、気を以て強化した刀剣と肉体で相手を滅する剣術…でしたか？」

瀑布割で吹き飛ばした刹那に、神鳴流の由来を語る綾子。
その顔は何か面白い悪戯を考え付いた子供のようだ。

「それがどうした！」

「確か決戦奥義の名称は『雷光剣（らいこうけん）』でしたよね？」

実を言えば綾子は神鳴流を知らない。
奥義の名は神也から知識として聞いた程度。
何故なら神也や自分が居た世界では【魔法先生ネギま！】は漫画（フィクション）だったから。

「だからそれがなんだと…

「はあああああっ！！」

刹那の言葉を遮って裂帛の気合いを放ち始める綾子。
その気合いに応じて綾子の纏う氣が活性化を始め…やがて手にした木刀の刀身が、空気中でありながらまったく放電しない…青白いスパークを発し始める。

「そんな…それは……」

―バチッ、バチバチッ―

綾子の木刀の刀身は青白い稲妻に覆われ、その光景を見た刹那は顔を真っ青にする。
結界の外では、同じく神鳴流剣士である刀子が…全くの他、それも見も知らぬ流派の剣士が…自分達の流派の決戦奥義を、独力で完成形として再現している事に絶句していた。

―カランカラン…―

これから我が身に放たれるのが、自身が修めし流派の決戦奥義。
その威力は受けずとも足がすくむほど。
次の瞬間には訪れるだろう恐怖に、刹那の手は木刀を握る力をなくしてしまう。
だが剣士として引く事は出来なかった。

「…武器を落としても立ち続ける、剣士としてのその覚悟…それを称え、この一撃で沈めます…偽・雷光剣！！」

―ズガアァンッ！！―

「きゃあああああっ！！」

再度瞬動から繰り出された、氣による雷を纏った最上段からの唐竹割り。
元来ならば斬撃と雷撃によって炭すら残らないはずの技だが…

「…ふえ？」

一向に襲ってこない衝撃に、刹那はいつの間にか閉じていた目を開いた。

眼前にはニッコリとした顔で、デコピンを構える綾子の姿。

―ぺしっ―

「あいたっ」

次いで額に軽い衝撃。

刹那は緊張の糸が切れ、その場に座り込んでしまう。

その眉間へ木刀の切っ先を突き付け、笑顔を崩さぬまま綾子は言う。

「やはり見よう見真似で他の人の技を撃てるのはお義兄（にい）様だけですね…途中で効果がなくなったので寸止めしましたが、真剣ならそのまま振り抜いている所です」

「え、え…あの…」

「足腰に力が入っていないようですが、まだやりますか？」

「…いえ、降参します」

こうして転移組９人は、怒涛の２連勝を果たしたのだった。

9時間目：顔合わせ　ｖｓ刹那（後書き）

ちなみに涼輔だと『偽・雷光剣』は刹那の真横の地面へ炸裂させ、爆音と衝撃波で気絶させる予定でした。

現在、転移組が2連勝。
残るはタカミチと高音と刀子と龍宮。

誰がどうなるのか…乞うご期待！

１０時間目：ｖｓ刀子　ｖｓタカミチ…そして決着へ

「これは高音さんでは相手になりませんね…次は私が出ましょう」

「ッ！？　……」

立て続けに負けた学園側勢の不甲斐なさに業を煮やしたのか、葛葉刀子が木刀を携えて出てきた。

戦力外通告を受けた高音・Ｄ・グッドマンは、刀子の存外な言葉に反論をしようとした。

だが自分が『操影術』を用いて戦う場合は、従者である『佐倉愛衣』がいて初めて戦力となりうる事を思い出し、開きかけた口を閉じる

「さぁ、そちらからは何方がお相手をして下さいますか？」

「俺が行こう」

言って結界内に入ったのは、愛用の方天画戟…飛刃赤戟を模した木製の方天画戟を携えた刃。

無論愛弓である朱雀は神蓮に、籠手である穿紅は蘭里に預けてある。

「…木刀を携えた剣士に、長物は不利なのではありませんか？」

「へっ、お気づかい無用だ…よっ！」

―ゴウッ！―

刀子の言葉を挑発と取った刃は、距離が開いたままの状態で木戟を振るう。
するとその穂先から烈風が巻き起こり、その風は可視の衝撃波となって刀子へ向かっていく。

「はっ！」

―パァンッ！―

その可視衝撃波を、木刀の剣速だけで掻き消す刀子。
衝撃波を掻き消した時に手へ伝わった痺れに、その表情を明るくする。

「なるほど、不利ではないから手加減も不要…と？」

「下手に手加減なんかしちゃ神蓮に怒られちまうんでな…本気で来てくれ、俺も本気で行くから」

―ドンッ！―

言った瞬間、己の闘気を解放する刃。
その強烈なプレッシャーは、本人が望む望まないに限らず刀子を戦場へ立つ感覚へと導いていく。

「…良いですね、この空気…戦線を退いて久しく感じていなかった試合、いえ死合の空気です」

―ドンッ！―

刃の闘気に導かれるようにして刀子も己の闘気を解放。

同時にその双眸の色彩が反転する。
眼球色彩が反転するメカニズムこそ科学的な証明が出来ていないが、この状態こそ神鳴流剣士が最高の戦力を発揮できる状態。
漫画やアニメの描写で眼球色彩反転現象と言えば普通は思考能力の欠如状態だとされるが、神鳴流剣士にそれはない。

「では双方尋常に、始めぇいっ！」

「神鳴流、斬空閃（ざんくうせん）！」

開始の合図と共に刀子は木刀を振るい、先ほど刃が行った物と同じように気の可視衝撃波を発射。
ただ異なるはその衝撃波が斬撃属性を有している事。
言うなればカマイタチを射出しているのである。

「はっ！」

―パンッ！―

それを木戟の袈裟斬りで潰し、同時に刀子めがけて突撃。
自身へ向かって突っ込んでくる刃を見た刀子は、返す木刀でそのまま刹那も使った奥義を発動。

「神鳴流、斬岩剣！」

「甘い！」

―ガッ！―

「お見通しです！　斬岩剣！」

自身の右ナナメ下から迫ってくる斬撃を、木刀の刀身…それも鎬を蹴り上げる事で軌道を逸らして回避、空いた脇腹めがけて穂先を叩き込むように木戟を振るう刃。
刀子はそれを見越していたようにその場で跳躍、そこから斬岩剣を繰り出す。

―ガガァンッ！―
―ブシュッ…―

その斬岩剣をスウェーバック（上体反らし）で避ける刃だが、木刀による攻撃にも関わらず刃の胸元に浅い切り傷が入る。
どうやら避けきれなかったらしい。

「へっ、やるじゃねぇか」

「浅かったですか」

「お返しな？」

胸元に切り傷を付ける事で刃が怯むと思った刀子だったが、刃は斬られながらも反撃を放った。

刃にとってこの程度の切り傷は日常茶飯事。
神蓮の娘の雪蓮や祭と剣を交えればこれ以上の怪我はしょっちゅうするし…幼馴染の恋（れん）こと呂布と本組手をすれば、事と次第によっては致命傷すら負う事もある。
無論そうなった場合は治療と治癒を急ぎ、回復に努める。
そうして全身に一生傷を沢山つくるうちに、刃の肉体は驚異的な回

復力と共に人外級の剛力を備えるようになった。

「えっ？」

―ブォンッ！―

―ドガッ！―

―メキメキッ…―

「ぐっ！」

その剛力で振るわれた木戟の穂先は、狙い澄ましたように刀子の左脇腹へ吸い込まれ…直撃と同時に骨の軋む音を発する。

「切り傷1個に対しアバラ2～3本、割にあわねぇ対価だな…オラッ！」

―ドスッ！―

「がはっ！？」

脇腹から全身を駆け巡る激痛に顔をしかめる刀子。
刃はそのまま木戟から左手を離し、左手でアッパー気味のストレートを刀子の鳩尾へ叩き込む。

刃と言う男はかつて後漢時代にいた頃、戦いとなれば相手が女子供老人であろうと容赦はしない事で恐れられていた。
第三者が聞けば人でなしのように聞こえるがそれは違う。

元日本人とは言え魂から後漢の、戦国時代に生を受けた刃。
彼は再誕の条件としてその魂に帯びた任を果たすべく心技体共に鍛

え続け、武人としての姿勢の１つを体現するに至った。
強きを求める者への手加減は、その努力を踏みにじる行為。
だからこそ、己が積み重ねてきた努力の証を披露できる戦場では一切手を抜かない。
その相手が例え女子供老人でも。

「そらそらそらそらそらそらそらそらそらそらそらそらぁっ！！！！！」

―ドガガガガガガガガガガガッ！―

最初の数発は左手によるラッシュ、途中からは再び両手持ちとなった木戟での連続攻撃。
これが２～３００ほどの賊の軍勢ならば、既に勝負は喫した状態だ。

それでも刃は攻撃を止めない。
刀子は首から下、着込んだスーツがボロボロになり…見えている肌には所々青あざまで作っている。
これが一般人ならば刃の勝ちで勝負を終えるところなのだが、そうはならない。
何故ならば刀子の目が、まだ戦意を失っていないから。
必至に、刃が隙を見せるその瞬間を待っている。

「……」

刀子に対し、鬼神の如き怒涛の猛攻撃を放つ刃。
神蓮はそんな刃を、感慨深い表情で見ていた。

「…懐かしいわね」

「懐かしい？」

刃を見ている内に、本人も意識せぬまま神蓮の口を突いて出た言葉。本当ならば誰にも拾われずに消える言葉だったが、傍に立っていたエヴァに拾われた。

「あの状態になった刃は、相手が誰であろうと手加減はしない」

「…」

「そうしなければ自分が、肉体的にも精神的にも潰されるから…潰される世界で生きてきたから」

「不要な情けは要らぬ怨恨を生む、と言う事か？」

「そうとも言えるけど、違うとも言える…何て言うのかしら？　自分が強くなる為に相手にも強さを求める…って言うのかしら」

「自身が叩き潰した相手が、叩き潰された事を糧により強くなる事を望む…自身が叩き潰されたら、叩き潰された事を糧に自分は頑張るからお前はもっと強くなれ…か」

神蓮の言葉に賛同できる物を感じ取ったエヴァ。
それはかつて自分に合気柔術を仕込んだ師が、日々常々口にしていた言葉と似ていたからだ。

「トドメだあっ！！　轟撃（ごうげき）いいいいっ！！！！！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！！」

今の時代にもこんな気概ある男がいるのかと、何か心に響く物を感じ取ったエヴァ。
そんなエヴァをよそに、結界内の刃ｖｓ刀子は決着の場面へと推移していた。

―ゴウッ！―
―ズギャシャァッ！！―
―バキィッ！！！―
―ドガァッ！！！！！―

「がはぁっ！　み、見事…」

裂帛の気合いと共に放たれた刃の一撃は、先の試合で綾子が放った『偽・雷光剣』を遥かに上回る…可視状態にまで圧縮された氣を纏う、木戟による横薙ぎの一撃だった。

まさに轟撃。

その轟なる一撃を決戦奥義で相殺…そしてカウンター迎撃しようとした刀子だったが、刃の一撃は放った決戦奥義を木刀ごとコナゴナに粉砕。
そして轟撃は、刀子の上半身と下半身を分断するような太刀筋で直撃…その衝撃で刀子を結界まで吹き飛ばした。
その衝撃は結界に物理的なヒビを入れるほどの一撃だった。
結界まで吹き飛ばされた刀子は、朦朧とする意識で刃に賞賛を告げ…そのまま意識を落とした。

「そこまでっ！　勝者、呂堂！」

「…刃、大丈夫？」

気絶した刀子を学園側に任せ、結界から出てきた刃へ駆け寄る神蓮。
その手は既に塞がりかかっている、刃の胸元の傷を撫でている。

「ああ、問題ないぜ？　つかあの人の方が重傷なんじゃねぇか？
と言ってもやったのは俺だけど」

「葛葉さんだったかしら？　あの人神鳴流って剣術を修めた剣士なんでしょ？　だったら肋骨（あばら）の数本ぐらい折れる事、最悪は死ぬ事も覚悟して戦場に立ってるんでしょ…敗北（これ）を糧にまた立ち上がるわよ…あの人、目にそれだけの覚悟が宿ってたから」

言って、担架に乗せられて退場していく刀子を見送る神蓮。
その目はかつて、強者たる武を得ようとして…自身に幾度も打ちのめされては幾度も立ち上がる、今は逞しく育った刃を見ていた頃の目だった。

「…さてジジィ、おおよそ使い手と称される連中が軒並み熨され…残ったのは龍宮とタカミチのみだが、どうする？　まだ力を見るか？」

「むぅ…」

エヴァの台詞に唸る近右衛門だったが、残る戦力は龍宮とタカミチ…そして従者がいないので戦力外通告を受けた高音のみ。
龍宮は高音よりは強いが、それでもあの９人の内の誰かを相手にして無事でいられる保証はない。
それに龍宮は傭兵なので報酬によってこの場に居るが、あれだけの戦闘能力を誇る一団を相手にするのに現状の報酬では割に合わない

…と言うより、割に合う日が来るのだろうかとすら思ってしまうほど。

一応この場には瀬流彦や弐集院（にじゅういん）、神多羅木（かたらぎ）と言った魔法先生も居るにはいるが…その3名は良く言って中の下から中の中程度の腕しかない。

9人全員が十中八九、上の中以上の実力者ばかりと言う現状…役に立てるはずはない。

「学園長、僕が出ます…僕で最後です」

エヴァ的にはもう十分に力を見せたと思ったのだが、近右衛門ではなくタカミチの方に不満があったらしい。

言って結界内へ入り、即座に咸卦法を発動させるタカミチ。

次の瞬間、膨大な気と魔力の混合物がタカミチの体から噴出され…結界内を満たしていく。

同時にポケットへ手を入れ、居合拳の体勢で構える。

「じゃあ大トリは俺が行くかな？　御鏡　涼輔、無双御鏡流皆伝継承者だ」

対するは涼輔。

背負っていた大太刀『神断緋刃（かんだちのひじん）』を刀袋ごと綾子へ預け、神也が錬金で作り出した精巧な模造刀（鞘あり、抜刀可）を腰へ差し…結界に入った。

「…御鏡　涼輔君だったかな？」

「ええそうです、高畑先生」

「時間が圧しているから、一撃必殺(ワンショットキル)でケリを付けないか？」

「俺的にはその方が嬉しいですけど、高畑先生は良いんですか？」

「僕としてはこれ以上、学園の戦力に減って欲しくないからね…ここで、この一撃で…君たちを止める」

―ゴオッ！！―

言ったタカミチの体から放たれた威圧感が、その重みと濃さを増していく。

この場に戦闘行為未経験の一般人が居れば恐らくはこれだけで気絶するだろう。

「君も最高の一撃を放てるように準備をすると良い」

「紳士ですね…では、お言葉に甘えて……合わさりし時に一条の雷光と化し、我が指に集え――猛攻(ストラックサンダー)をかける落雷！」

―ガガガガァァァァンッ！！―

涼輔は左手を鞘の鯉口に添えたまま、右手を空へ突き上げ…呪文を唱えた。

刹那、それまで晴れていた夜空が局地的に曇りはじめ…次の瞬間、突き上げられた涼輔の手めがけて一条の落雷が降り注いだ。

涼輔はその落雷を受け、全身を青白い電撃で包む。

「…準備完了」

「帯電…しているのかい？」

「さぁどうでしょう？　まぁ打ち合えば分かるかと思いますが…」
言って右手で腰の模造刀の柄を握り、右足を前に出して腰を落として構える涼輔。
それを見ていた綾子・刃・神蓮・蘭里・神也・近右衛門・刹那・瀬流彦・弐集院は口を揃えて『居合か…』とつぶやく。
だがエヴァだけはリアクションが違った。
「（馬鹿な…あれは、あれではまるで…私の切り札『闇の魔法（マギア・エレベア）』ではないか！）」
「…っと、見惚れておる場合ではなかったの…では両者尋常に、始めぇいっ！！」
近右衛門から開始の合図がかかる。
同時にタカミチは、ポケットから全力で抜拳術を発動。
「剛殺！　居合拳！！」
拳から放たれた一撃は、その衝撃波が可視の極太レーザーとなって涼輔を襲う。
拳に感じる確かな手応え…若干痺れているように感じるのは、涼輔が帯電していたであろうから。
この一撃は、かつて『赤き翼』に属していた際…師匠から学んだ、居合拳の最終奥義。
これを受けて立っていたれた相手をタカミチは知らない。
だからこそ勝利を確信した。

だが次の瞬間、涼輔はタカミチの背後に立っていた。
模造刀を、鞘から抜き放ったような格好で。
「無双御鏡流剣術・魔法併用…縮地居合（しゅくちいあい）、雷切（らいきり）・改」
「ぐあああああああああああああっ！？」
背後から涼輔の言葉が聞こえた瞬間、右腰から左肩口へかけて強烈な痛みが走る。
見ればその部位だけスーツが斬られており、むき出しとなった肌にはななめ一直線の太い痣…太刀傷が付けられていた。
痣はその部分だけが指で分かるほど凹んでおり、同時に部分部分が…雷撃により黒く焦げ、所々は酷い火傷と同じように水ぶくれとなっている。
真剣ならば致命傷、いやもう死んでいるだろうほどの傷だ。
「…俺の勝ちですね」
「ぐ、う…そ、そうだね…君のか……」
『勝ち』を言い切る前にタカミチの目が白目を剥いた。
どうやら痛みに耐えかね気絶したようだ。
口の端からは泡を吹いている。
「そこまで！　勝者、御鏡　涼輔！！　…とは言ってもやり過ぎじゃないかのう？」
一応涼輔の勝利である事を告げた近右衛門だが、学園側が受けた負傷度合いが不満らしい。

対峙した中でガンドルフィーニは脳震盪。
刹那は無傷ながら、本来ならば炭と化していた。
刀子は肋骨を約１０か所折る複雑骨折と、全身に痣が残る重度の打撲。
そしてタカミチは電気ショック・火傷のダブルパンチに、剣戟による超重度の打撲と部分的にみられる骨折。

「やりすぎ？　一撃で決着をつけようって言ったのは高畑先生ですよ？　それに俺だって手は抜いているし、本気でやれば高畑先生ごと…この結界と世界樹を両断してるはずなんですがね」

「ひょっ！？」

確かにタカミチの背後には、この麻帆良学園都市の象徴にして重要物…世界樹がそびえたっている。
だが涼輔は本気で振りぬけば、タカミチごと世界樹を両断していたと言う。
これには近右衛門も驚く他は無い。

「それにこの麻帆良がどんな土地かは嫌と言うほど知ってる…さらに言えば、とある結界…斬り壊しちまったら拙いんだろ？」

「うぐっ…」

「この試験へ合格すれば学園の教員として迎えてくれるんでしょ？　高畑さん・ガンドルフィーニさんの穴を埋める事なら私達にも出来ますが？」

「…そうね、中学生に授業を施すだけなら私でも出来るわね」

「私達、男女比率は女の方が多いから」

「む、むぅ……これは仕方ないのう…」

こうして涼輔達は、いくつかの条件を元に身分と…麻帆良学園中等部の教師と言う職を得る事になった。

１０時間目：ｖｓ刀子　ｖｓタカミチ…そして決着へ（後書き）

指摘を受ければ修正が入る率が高いです。

１１時間目：９人の学園入りと仮契約（前書き）

難産だった。
設定が凝ってて苦しかった。
書き過ぎになった。
ご都合主義になった。
独自解釈・独自設定が入った気がする。

だが反省はしていない。

１１時間目：９人の学園入りと仮契約

「当校は近年の教職者不足を嘆き、そして打破する為にこの度…新規教育実習生の受け入れを推奨し、今日ここに５名の教育実習生を迎える事となった」

それはいわゆる臨時集会と言われるもので、壇上に立つ近右衛門はその声をマイクで講堂中に広げていた。
臨時集会の対象となったのは麻帆良学園本校女子中等学校…略称を中等部の２年の生徒である。

「元来ならば高等部や大学部での受け入れを行う予定じゃったが、実習生達の年齢がいかんせん若く…高等部や大学部では反発もあった。そこで会議の結果、ここ麻帆良学園本校女子中等学校の…ひいては進路に明るい２年での受け入れが決定した」

無論この演説には盛大な嘘が盛り込まれている。
そしてそれは中等部の全魔法先生が知っている事でもあった。

『エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルが保護した９人は、試験と面談の結果麻帆良学園都市預かりとし身分の確立を決定…希望者には相当の待遇で迎えるものとする』

『９人は諸事に際し取る行動の一切を９人の各々が独自に決定する権利を有する…ただし法に抵触する場合はその限りではないし、行動の顛末を麻帆良学園学園長へ報告する義務を負う』

『９人は報告義務こそ負う物の、個人的な秘匿技術の一切は報告義

務の対象とはしない』

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは、当該の9人が学園中等部の教師を…エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが在籍するクラスの担任ないしこれに準ずる職を務める事を条件に、全日の登校及び真面目に授業へ出るものとする』

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは、当該の9人が学園の教師として赴任しない場合…これまで通りの方針で事を進める事とする』

これが今回の顔合わせ・手合わせを経て涼輔達9人が得た数々の権利の内、最も主たる物である。
他にも規模の大小合わせて、合計で10といくつかの誓約及び権利の制定を行った。
もちろん記述した権利の最後2つは、エヴァの意見を反映した権利である。

ただエヴァの意見を反映した2つの権利は、全く経験のない人間を教師として抜擢する物であり…近右衛門はまた頭を抱える事となった。

しかしエヴァの強い要望に応じ、麻帆良学園都市の中等部教師としての教員試験を急遽受けさせてみた所…全員が余裕で合格した。

これにより9人全員が、中等部の生徒ならば教えるに足る学力を有している事が判明…急遽、仮の教員免許を発行し、9人全員へ渡し…希望と適性検査を経て、涼輔・刃・神蓮・キュルケ・ルナが中等部教員学園入りする事となった。

また、試験を監督した麻帆良学園大学部の教授である明石曰く『従来の教師には無い、柔軟で非常に面白い思考パターンを持っている…中等部教員としても、人間としてもとても興味深い』との事。この意見も9人へ中等部の教師として合格に値する要因となった。

―ザワザワザワザワ…―

「静粛に！　さてこの決定に関し、諸君らからも疑問の声はあるじゃろうがまずは紹介を済ませておこう…実習生諸君、壇上へ」

近右衛門の言葉を受け、講堂内の生徒全員がどよめきを起こす。しかしそれも一瞬の事だった。

近右衛門の紹介に応じ…教育実習生として着任した5人が姿を現すと、どよめきはピタッと止んだ。

「では左から順に紹介して行こう…御鏡　涼輔君、呂堂　刃君、孫　神蓮君、キュルケ・フォン・ツェルプストー君、ルナティーア・ラインルゥカー君…以上5名じゃ」

近右衛門が名前を言うと、名前を呼ばれた人物が礼をする。

途端に感嘆の息に満たされる講堂。

どうやら涼輔と刃を異性として、神蓮とキュルケとルナを同性ながら羨望の対象として見ているらしい。

ちなみにキュルケが名前を縮めたのは、この場に居ない神也の策略である。

「なお孫　神蓮君以下3名の実習生だが、名前から聞いて分かる通

り日本出身ではない…しかし語学は達者な為、分からない事があれば遠慮なく質問するといいぞ？　さて…当教育実習生受け入れ推奨制度だが、何分初めての事で当校としても対応が不十分になる事がある…ましてやこの麻帆良学園都市はその敷地が広大で、初心者ならば担当部署外へ迷い込む事もあるやもしれぬ…そこで当中等部では彼ら５人全員を１つのクラスへ当て、半分は生徒として居てもらう事にした」

ここでようやく、講堂内の生徒はこの朝礼の意図に気が付いた。
ようは今からくじ引き等の抽選が始まり、あの５人がどのクラスへ入るのかを決めるのだと言う事に。

「…フォッフォッフォ、勘の良い諸君らの事じゃ…もう儂が言わんとする事が分かっておるようじゃな？　よろしい…では各学年の各クラス委員長は前へ出なさい」

言って近右衛門は背後の机に置いてあった、カラフルな箱を壇上へ置く。
それは一辺が４０ｃｍ四方の正立方体の箱で、天面には直径１５ｃｍほどの穴が開いている。

「この中には中等部２年の全クラス分、つまり２４個のボールが入っておる…その中に１つだけ『当選』と書かれたボールが入っておる…この当選ボールを引き当てたクラス委員長の居るクラスへ、５人の実習生を入れる事とする」

もちろん細工は済ませてある。
この集会が始まる直前、エヴァは自分のクラスの委員長である『雪広（ゆきひろ）　あやか』に接触…彼女の両手を自身の魔力で包んでおく。
この魔力は箱の中で強い磁力へと変質し、当選ボールに仕込まれた

鉄片を吸い寄せる。

つまりエヴァのクラスが涼輔達を受け入れる事は既に決定した事なのだ。

「さて…ボールを引く順のクジを引いてもらうぞ？　ここに竹棒で作った２４本のクジがある…このクジには先端に１～２４の番号が記してあり、引いたクジに書かれた番号がボールを引く順番となる」

そして順当にＡクラスからボールを取り、しょっぱなから当選ボールを引き当てては不審がる者が出てくるかもしれない。

そこでエヴァはそれをカバーすべく、近右衛門にも細工をするよう伝えた。

近右衛門が行う細工とは、引いた棒クジの番号を魔力で書き換える事。

幻覚魔法を利用したもので、引いた者が番号を見るまでならその番号を意図的に書き換える事が出来る。

「まずはＡクラス委員長、棒クジを引きなさい」

「……１３番ですわ」

こうすればしょっぱなから当選ボールを引くような事は出来ず、彼女はごく自然と“運良く”当選ボールを引く事が出来る。

そしてその時はやってきた。

「では１３番目、Ａクラス」

これまでの１２クラスは全員がガッカリとした表情で席についていた。
特に自身ではずれボールを引いたクラス委員長は、その落胆の色合いが非常に濃い。

そして今からボールくじを引くＡクラス以外の、残る１１クラス委員長は…あやかがはずれを引くことを一心に願っていた。

「２－Ａ委員長、雪広　あやか…行きますわ」

中等部２年全員が固唾を飲んで見守る中、あやかの手が箱へと差し入れられる。
同時に箱の内部ではあやかの手を包むエヴァの魔力が磁力へと変質、仕込まれた鉄片ごと当選ボールを引き寄せる。

そしてカラクリに気付く事無く、何か自然に手中へ収まったボールを掴み…箱から手を引き抜くあやか。
あやかは手中にあるボールに『当選』と書いてある事に気づき、近右衛門へ報告する。

「あら、当選と書いてありますわ」

その台詞に目を剥く２－Ａ一同。
念のため近右衛門があやかの手にあるボールを確認する。
そこには確かに『当選』と言う文字が書かれたボールがあった。

「うむ！　抽選の結果、実習生５名は２－Ａへ入る事となった！
みな、仲よくするように」

言って内心で冷や汗を流す近右衛門。

内心ではいつカラクリがバレるかと、気が気ではなかったようだ。

「ではこれにて臨時集会と新規教育実習生の任命式を終了する…解散！」

さて中等部教員兼２－Ａの一員となった涼輔・刃・神蓮・キュルケ・ルナだが、全員がエヴァの在籍するクラスである２－Ａの副担任を主とし…

涼輔は現代国語担当及び剣道部副顧問の立場を。
刃は歴史担当及び弓道部副顧問の立場を。
神蓮は古文担当及び茶道部顧問の立場を。
キュルケは保健体育担当及び養護教員の立場を。
ルナは英語の副担当及び美術部副顧問の立場を。

…それぞれ得た。
ちなみにキュルケは養護教諭が主で、学業時間中はその多くを保健室で過ごしている。

また涼輔・刃・神蓮・キュルケ・ルナが自分のクラスの担当となった事を紹介された２－Ａ生徒のリアクションは、そのおおむねが好評だったと言えよう。

ここでそのリアクションの一部を紹介すると…

某生徒は『高畑先生が外れるんじゃなければ文句ないわ！』と。
また別の某生徒は『教育実習生…記憶に無いネ、どうした物カ』と。
更にまた別の生徒は『刀子先生を下したあの実力、私の糧にしてお嬢様を…』と。

更に更にまた別の生徒は『キュルケ先生の治療には目を見張るものがありますわ』と。
更に更に更にまた別の生徒は『ルナ先生の英語の授業、分かりやすくて助かるアル』と。

麻帆良学園中等部２－Ａの面々を知る人は、どのリアクションが誰の物か分かるだろう。

そして教員ではなく、別の立場で２－Ａ入りを決めた者も居る。
無論、綾子・蘭里・セイラの３人だ。

彼女らは涼輔達５人が教師兼生徒として２－Ａ入りした日から４日後、偶然日程が重なった風に装って転入生として２－Ａ入りを果たした。
以下、彼女らが転入してきた時のハイライト。

「みんなおはよう！」

「「「「おはようございます、高畑先生！」」」」

「突然だけど今日は転入生を紹介するよ」

「転入生ですか？」

「そう、転入生だ…書類の提出が重なった事もあり、今回は一気に３人の子がこのクラスへ仲間入りをする事になったよ」

「「「「「えええええええ～っ！？」」」」

「では入ってきてもらおうか、おーい！」

タカミチの合図で次々と教室へ入ってくる3人。
3人はタカミチの案内で黒板の前に立ち、3人同時にゆっくりと…
だが優雅に一礼。
そして後ろを振り返り、チョークを手に取って自分の名前を書き始める。

『御鏡　綾子』
『徐　蘭里』
『セイラ・ラインルゥカス』

書かれた名前を見てどよめく2－A。
特に綾子の名字は衝撃的だった。
なぜならつい先日このクラスへ教育実習生としてやってきた、御鏡　涼輔と同じだったから。

「じゃあ自己紹介も兼ねて質問コーナーと行こうか」

言って教壇を降り、教室の隅へ移動するタカミチ。
実を言えばこれは涼輔達が入ってきたときも行われた物で、それだけに今回は全員の興味が集中している。
そんな中…クラス一の情報通を自称する、出席番号3番『朝倉（あさくら）　和（か）美（ずみ）』は…小型レコーダーを手に、鼻息荒く綾子たちへ詰め寄った。

「じゃあクラスを代表して私が記者になるわ…まず、御鏡　綾子さ

ん…いや綾子ちゃんかな？　綾子ちゃんは…えっと、既にクラスメートになっている涼輔君とはどんな関係？」

「双子の義理の兄です」

「「「「きゃあああああっ！」」」」

予想のナナメ上をブチ抜く綾子の返答に、ピンク色の雰囲気を漂わせ始める２－Ａ。

出席番号１４番の『早乙女（さおとめ）　ハルナ』はその稀有な能力故に『ラブ臭よ！　凄まじく濃いラブ臭がするわ！　鼻腔をかすめただけで卒倒物の濃さよ！』と喚き散らしていた。

「じゃあ次は徐さん」

「あ、蘭里と呼んで下さい」

「じゃあ蘭里さん…ん？　蘭里ちゃんかな？　蘭里ちゃんはどこ出身？」

「中国は建業です」

「あれ？　って事は孫さんと？」

「はい、親友です」

神蓮は加入４日にしてその、元とは言え王たる者の圧倒的なカリスマで即座に人気者となっていた。

もちろん、同じく王である涼輔も同様。

加えて両者は勤勉で、勉強が苦手な生徒には積極的に勉強を教えて

いた。

刃はと言うと、運動が得意な事もあってクラスの体育会系…バスケットボール部で出席番号２番『明石（あかし）　裕奈（ゆうな）』や水泳部で出席番号６番『大河内（おおこうち）　アキラ』達運動部員とは親しげに話し、特に中国武術研究会部長で出席番号１２番『古（くー）　菲（ふぇい）』や…同じく中国武術研究会所属で出席番号１９番『超（ちゃお）　鈴音（りんしぇん）』とは熱い中国武術談義を繰り広げる仲となっている。

ちなみに古と超は、生粋の中国武人である神蓮とも仲が良い。

キュルケは身に纏う雰囲気とは違い非常に気さくで気が利き、クラスメートから恋の悩み相談を受ける事が良くある。

またそれは時として猥談に発展する場合があり…その際は必ず、出席番号７番の『柿崎（かきざき）　美砂（みさ）』がそばにいると言う。

「ほぇ～、凄い人と親友なんだね～…じゃあ最後、セイラさん」

「はい」

「セイラさんはどんな事が得意？」

「えっと、奉仕活動でしょうか？　誰かの役に立つって良い事ですよね」

言ってルナを、さりげなく一瞥するセイラ。

ここで一つ勘違いが起こっているのだが、それはまたの機会にしておく。

無論ルナはその視線に気づき、ウィンクを返す。

ちなみにセイラの『ラインルゥカス』は、ルナの名前である『ラインルゥカー』をイメージした即興の名前で…以後、麻帆良学園都市

内ではセイラ・ラインルゥカスと言う名前で通すそうだ。

なお転移組９人の中で唯一神也のみが『エヴァの監視役』と言う名目でエヴァ付きとなったが、これはあくまで名目上の事であり…その真意は神也が貧乳拒絶体質持ちであるの一言で理解が出来る。
何せ中等部は一部を除いて発育途上の女子生徒ばかりで、先の顔合わせのメンツの中では出席番号１８番『龍宮（たつみや）　真名（まな）』以外は近付くことが出来なかったからである。

もちろんエヴァ自身はその出生故にいわゆるロリ体型であるが、既に常用薬と化している『年齢詐称薬』あるいは神也の魔法『モシャス』でその外見体格を成人女性のそれに変える事で問題を解決。
まぁ根本的な解決には至っていない、いや至れないのだが現状それはそれと言う事で落ち着いている。
従者でガイノイドの、出席番号１０番『絡繰（からくり）　茶々丸（ちゃちゃまる）』に関しては後述する。

そして綾子・蘭里・セイラが同時期に転校生及び留学生としてやってきた事についての、クラスのリアクションだが…

某生徒は『蘭里ちゃん、私より大きいわ…でも身長は低いのよね、うん…母性本能が疼くわ』と。
また別の某生徒は『こんな時期に、実習生が来る事だけでも異常なのに…転入生が同時に３人とか、マジあり得ねぇ』と。
またまた別の某生徒は『いずれも何気ない足運びや気配、一挙手一投足にまるで隙が無い…出来るでござるな』と。

麻帆良学園中等部２－Ａの面々を知る人は、どのリア（ｒｙ

さて…無事２－Ａ入りを果たし、立場を確立した９人。
彼らはエヴァのログハウスから程近い場所に…魔法技術の粋を凝らした大邸宅を作り上げ、９人全員がそこへ住む事となった。
そうして全員が麻帆良学園都市内で、関係者としての顔を隠して生活を始めたある日の事…９人は茶々丸を通じて全員が、エヴァの別荘へと呼び出された。

「スマンな、色々忙しいのに」

レーベンスシュルト城を見上げる事が出来る、城の中庭に相当する広場で対面したエヴァは…開口一番そう言った。

「気にするなって、呼び出すって事はなんかあったんだろ？」

「もしかして学園側に結界破壊がバレました？」

「いや、そうではない…少し気になる事があってな…お前たちは先日、学園側と手合わせをしたが…その際、神也が『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を放っていたよな？」

「ああ、ガンドルフィーニ先生へ撃った、火の連弾３矢の事ですか？」

「そうだ…それを見ていてふと気になったんだが、お前たちは『仮（パクティオー）

契約』をしていないのか？」

仮契約（パクティオー）

魔法使いの世界に伝わる昔話にならって、魔法使いにはミニステル・マギと呼ばれるパートナーがいた方がよいとされている。
元来…魔法使いは呪文詠唱中は全くの無防備であり、詠唱中に攻撃されれば呪文は完成しない。
なので魔法使いを相手にする場合は肉薄し、詠唱を阻害して攻撃る…あるいは遠距離攻撃によって詠唱が完了する前に攻撃するのが常套手段となっている。
それを守護するパートナーが『魔法使いの従者（ミニステル・マギ）』であり、従者を得る儀式を『契約』と称する。

以下、便宜上魔法使いを主…パートナーを従者と呼称する。

契約は原則1人としかできないが、お試し期間として何人とでも『仮契約（パクティオー）』することができる。

エヴァが言うのはこの、お試し期間版の契約の事。

契約方法はいろいろあるが、最も簡単なのが契約魔法陣上で魔法使いとキスする事。
だが…同性でキスをする事に抵抗がある（特に、とある性癖を持たない男同士の）場合は、契約魔法陣上で互いの血を混ぜ合わせる事でも行える。
また、状況によっては『仮契約』のつもりでも『本契約』になってしまったり…主と従者の主従が逆転する場合がある。
この『本契約』が【原則1人としかできない】の契約である。

契約を行うと『パクティオーカード』が出現する。
なおキスで行う場合は唇同士のキスがルールで、それ以外の場所にキスをして契約を行うと俗に言う『スカカード』が出現する。

パクティオーカード・スカカードのいずれも縦横比１６：９の長方形をしていて、表面にはパクティオーを行った従者の肖像とタイトルが描かれている他…姓名・称号・徳性・方位・数字・色調・星辰などの情報が記入されている。
ただしスカカードのみ基本的なデザインはパクティオーカードと同じだが、　カードのタイトルである【Ｃｈａｒｔａ　Ｍｉｎｉｓｔｒａｌｉｓ（ラテン語で『従者のカード』の意）】の部分が【ぱあとなあかるた】となり…徳性・方位に替わって【とくいわざ】と【こうぶつ】の項ができるなどの変化がある。
また、描かれる従者の肖像はデフォルメされた絵柄となる。

またパククティオーカードには…

1. 従者への魔力供給
2. 従者の召喚
3. 念話
4. 衣装の登録
5. 潜在能力の発現

…と言った機能が備わっている。
契約の破棄はパクティオーカードを破損させる事で成立する。

「色々規格外な連中だ…パクティオーカードはアーティファクトカ

ードになると思うんだが」

言ってエヴァはその目に期待の炎を灯し始めた。

パクティオーカードの中にはアーティファクトが出るカードと出ないカードがあり、アーティファクトが出るパクティオーカードを指して『アーティファクトカード』と呼ぶ。

アーティファクトカードはパクティオーカードの機能に【アーティファクトの召喚】が追加された物。

このアーティファクトは従者によって種類や形状、効果は異なるものの…いずれも強力な効力を秘めており、基本的には従者が主を補助する為の道具が出てくると言う認識で間違いない。

アーティファクトを召喚する時は、カードを手にして『来たれ（アデアット）』と呪文を唱えれば良い。

逆にアーティファクトをしまう場合は『去れ（アベアット）』と言えば良い。

アデアット中はそれだけで従者の防御力がアップする。

なお主側に強力な気・魔力が無い場合…仮契約（パクティオー）自体は行えるものの、アーティファクトが出ない…つまりパクティオーカードしか出ない。

パクティオーカードは主がカードを複製して『複製カード』を作る事が出来る。

仮契約システムは、本契約と比較するとお遊び程度でチェックが甘く…複製カードはオリジナルのパクティオーカード（≠アーティファクトカード）と能力的には同じで、複製カードでも魔力供給は可能なようである。

ただし、複製カードから複製カードは作れない。

仮契約（パクティオー）の儀式は今日…魔法使いが戦うことはほとんど無くなった為、従者を恋愛対象と見た儀式…告白の儀式とみなされる場合もある。

「アーティファクト、かぁ」

エヴァの台詞に対し、いまいちノリ気ではない反応を示したのは涼輔。

と言うのもその懸念の原因は綾子である。

実は綾子…涼輔がその顔の左半分に大怪我を負うきっかけとなったとある事件以来、涼輔に強烈かつ濃厚な好意を抱いており…隙あらば（性的に）涼輔を襲おうとしている。

涼輔は『例え義兄妹（ぎきょうだい）の関係でも、妹を喰うはずないし…むしろ妹に喰われて堪るか！』と、綾子の熱烈なアピール&アプローチを躱し続けている。

仮契約（パクティオー）を拒むあたり、アーティファクトの事は知っているが…その儀式が『告白の儀式とみなされる場合もある事』を知っているらしい。

もし綾子が仮契約（パクティオー）の儀式に『告白の儀式』と言う意味合いが含まれる事を知るや否や、即座にアピール&アプローチを行う事が目に見えているようだ。

「ねえエヴァ」

涼輔が葛藤を続ける中、何かを思いついたらしいルナが口を開いた。

「ん？　どうした？　ルナ」

「私とセイラって既に主従関係にあるんだけど、その場合も仮契約(パクティオー)は出来るの？」

セイラはルナの従者。
その上でまた別の主従契約を行う事は出来るのか、ルナはそう言いたいのだ。

「可能だ、もちろん異世界で既に主と使い魔の関係にあるキュルケと神也も同じさ……なんならやって見るか？　吸精夢魔姫(ヴァンパイアキュバス)を主とした魔法竜(マギドラゴン)の仮契約(パクティオー)だ…もしかするとセイラが強力なアーティファクトを得れるかも知れん」

「あの、それを使えば御主人(ルナ)様の役に立てますか？」

「もちろんだ…セイラがアーティファクトを使いこなせば、それだけルナにかかる負担は減る訳だからな」

「じゃあやります！　方法はキスで！！」

「マジ！？」

セイラの、即答とも言える意思表示に驚くのはもちろん涼輔。
セイラにとってはルナに仕える事が全てで、それは存在意義と言っても過言ではない。
セイラの中でルナとは『万物を排してでも仕える存在』なのである。
だからルナが求める事は全て応じたいし捧げたい…そしてそれをより効果的に行えるならば何だってする。
それがセイラだ。

一方の涼輔は気が気ではない。
ルナとセイラが主従関係を結んでおり、その深さは表面上どころか肉体…そして魂レベルで結ばれている事は、涼輔以外の全員が知っている。
そしてそんな関係の二人がキスで契約を交わすと言うのだ。
隣で立っている綾子がそれを見たら、何を言って何をするか分かった物ではない。

「クックック…ならば私が魔法陣を書いてやろう」

言ってエヴァはさも楽しそうに…その服の袖口から、１本のフラスコを取り出した。
中には半透明で緑色の液体が入っている。

「これを…そらっ」

エヴァがフラスコを放り投げると、フラスコは緩やかな放物線を描いて宙を飛び…

―ガシャンッ！―
―ビチャビチャビチャッ！―

やや離れた場所の地面へぶつかって割れ、中の液体をその場へブチまけた。
液体は、それ自体が意思を持ったようにウゾウゾと動き…やがて割れたフラスコを中心に、直径７０ｃｍほどの魔法陣を描いた。
魔法陣は完成した直後、淡い緑色の光を放って安定…液体が消失した。

「これは魔法世界には広く流通している魔法薬の一種でな、かけた

場所に仮契約（パクティオー）の魔法陣を描く事が出来るんだ」
魔法陣の中心で割れていたフラスコの破片はいつの間にか消えており、あるのはうっすらと光る魔法陣のみ。
「準備完了だ…ルナ、セイラ…魔法陣の中へ入るがいい…あ、契約を望む者同士以外は魔法陣から離れてくれ」
それを聞いたセイラはルナの手を引いて魔法陣へ入り、ルナの両肩へ手を置いた。
セイラはとてもうれしそうだ。
「全く、しょうがない子ねセイラは」
と言いつつ楽しげで優しい表情を浮かべるルナ。
「フフ、第三者の立場だが実に面白い」
とは魔法陣を描いたエヴァのセリフだが、セイラにはもはや聞こえていないようだ。
ルナの方が身長は低いので、キスとなればセイラが若干かがむ格好になる。
だからルナはやや上を向いて目を閉じる。
やがて自らも目を閉じ、ゆっくりと顔を近づけていくセイラ。
そして彼女たちの唇同士が触れ合った瞬間…
「仮契約（パクティオー）！」
エヴァの声が響き、魔法陣が黄緑色に強く輝いた。

同時に魔力の風と思われる突風が魔法陣内で巻き起こり、その風圧にエヴァと蘭里とキュルケが倒れないよう身構える。

ややあって2人の顔が離れる。
その表情はどちらもやや恥ずかしげだ。

「お、出たぞ…パクティオーカードだ」

言われて気が付くと、ルナとセイラの視点が交差するちょうど中間部に…1枚のカードが浮いていた。
カードには白い竜を背にしたセイラの姿が描かれており、カードの情報は…

姓名：セイラ・ラインルゥカス
称号：束縛されし供物の竜
徳性：愛
方位：中央
数字：93
色調：白
星辰：月

…となっている。

「ふむ…【束縛されし供物の竜】か…セイラに相応しい称号じゃないか……うむ、きちんとした仮契約（パクティオー）カードだな…じゃあセイラ、そのカードを手に取って『来たれ（アデアット）』と唱えてみろ」

「はい…来たれ（アデアット）！」

次の瞬間、セイラの全身が強い光を発した。

１１時間目：９人の学園入りと仮契約（後書き）

何故ここで切ったか。
理由は、作者の性格や執筆傾向を知る人なら分かるはずです。
またセイラのパクティオーカードの『称号・徳性・方位・数字・色調・星辰』は、適当なイメージで書いてます。
以後、オリジナルのパクティオーカードが出ても適当なイメージで書いていきます。

以下、パクティオーカードが持つ機能の補足説明です。
独自解釈・独自設定が入るのでご注意ください。

１．従者への魔力供給
呪文によって定めた時間（コンマ秒単位）、主が従者に対して自らの魔力を送り込む。
従者は送り込まれた魔力によって自身の能力が強化される。
これにより、従者が一般人であっても身体能力が向上させられるなどの効果がある。
スカカードによる契約でも魔力供給は可能だが、その場合は時間制限が厳しくなるようだ。
また、主の習練次第で時間制限を延ばすことができる。

２．従者の召喚
遠方の従者を主の元へと召喚することができる。
主自身の魔力はおおよそ必要としない。
ただし限界距離はせいぜい５～１０ｋｍと短い。

また従者の意志や状況に関係なく召喚してしまう（例えば従者が入浴中ならば裸で召喚される）ため、強制転移魔法の一種とも言える。

3．念話

カードを額に当てて『テレパティア』と唱えることで、離れた従者に向けて語りかけることができる。
しかしカード一枚では一方向に語りかけることしかできず、双方向の会話を行うためには従者にもカードを持たせる必要がある。
またコピーカードを第三者に貸し与えることで、従者以外の者と会話することも可能である。
さらに従者が幻想世界（ファンタズマゴリア）に意識を置いているとき、パクティオーカードに夢見の魔法をかけることで幻想世界に潜り込むことができる。
語りかけの内容はテレパシーのように相手の頭の中で直接響くことになるが、語りかける側は声に出して喋る形になる。
通信はあまり強力でなく、比較的容易に妨害されてしまう。

4．衣装の登録

アーティファクト使用時の衣装を登録するいわばおまけ機能。
いくつか登録できるらしい。

5．潜在能力の発現

従者に秘められた力を、呪文により引き出すことができる。

パクティオーカードの中にはアーティファクトが出るカードと出ないカードがあり、アーティファクトが出るパクティオーカードを指して『アーティファクトカード』と呼ぶ。
主側に強力な気・魔力が無い場合…仮契約（パクティオー）自体は行えるものの、アーティファクトが出ない…つまりパクティオーカードしか出ない。
パクティオーカードがアーティファクトカードだった場合のみ、以

下の機能が追加される。

6．アーティファクトの召喚
従者はアーティファクトカードを“手に持った”上で『来たれ（アデアット）』と唱えること事により、専用の魔法具であるアーティファクトを呼び出すことができる。
しまう場合には『去れ（アベアット）』と唱える。
なお呪文の意味を理解している必要はなく、契約主との距離に関わらず使用が可能である。
基本的にアーティファクトは呼び出した本人しか使用することができない。

7．防御力アップ（出現したパクティオーカードが『アーティファクトカード』だった場合のみ）
アデアットでアーティファクトを出すだけで防御力が上がる。

１２時間目：アーティファクト展覧会【前編】（前書き）

脳内妄想炸裂時間（フィーバータイム）突入です。

出典元原作とは違う独自設定・独自解釈が入ります。
ご注意ください。

12時間目：アーティファクト展覧会【前編】

「えっろ…」

「ええ、分かるわ…」

セイラを包んでいた光が収まった時、真っ先に聞こえてきたのは…
微妙に前かがみになった刃の台詞と、穿いたスカートの前面部をこんもりと膨らませたルナの台詞だった。
この2人がどのような状態にあるのかは察して頂きたい。

「…これがアーティファクトでしょうか？」

セイラはその全身に、青い装甲の様な物を纏い…四肢には黄色い、腕甲と脚甲のセットを装着している。
ただその見た目は、刃やルナが言う通り非常にエロかった。

首から肩口そして胸へ至るラインは、バストトップを手の平大に覆う程度しか装甲が無く…アンダーバストは剥き出し。
しかも装甲は軟質素材製なのか、セイラが身じろぎをする度にその豊かな胸がぷるぷる揺れる。

背中と腹部は剥き出しだ。

腰部はアーマースカートのような形状の装甲が覆っているが、それもまた軟質素材のようでセイラの動きに合わせてヒラヒラ揺れる。
ましてや寸が非常に短い為、少しかがむだけで下着が丸見えになる。

脚部は脛から下が脚甲となっているが、インナーのような物が膝の上までしかなく…腰部のアーマースカートと合わせて、いわゆる『絶対領域』を形成している。

…健全な男には強すぎる色香と刺激を振り撒く格好だ。
エロいと称されても仕方がないだろう。

「あぁダメ…可愛い過ぎるわセイラ…今すぐ押し倒しちゃいたい」

「我慢するんだルナ…と言うより、その鼻から大量に溢れ出ている愛を止めるんだ」

「じゃあ自家発電でも…」

「余計ダメだ！　ってかさっきより愛が溢れてるぞ！？」

セイラを置き去りにし…魔法陣の中と外でそんなアホなやりとりをする、刃とルナ。
ルナは息が荒く、同時に頬…いや、全身がうっすらと紅潮している。
どうやらセイラに対する性欲が、そろそろ我慢の限界を突破しようとしているようだ。
我慢の限界と言うよりは鼻血(あい)の吹き出し過ぎで、体が限界を突破しようとしているようでもあるが…。
エヴァはそんなルナを寒い目で見ながらセイラに歩み寄った。

「やったな、セイラ…それは間違いなくアーティファクトだ」

「本当ですか！？」

「詳しい性能はセイラ自身が調べて把握するしかないが、来たれの(アデアット)呪文で現れたんだ…アーティファクトには違いなかろう。とりあえず、今から私が言う通りにしてくれ」

言われるがまま、セイラは自身のアーティファクトの性能把握に努めた。

まず、魔力を込めると腕甲と脚甲が雷を纏い…繰り出す一撃が、先(ス)行放電(トリーマ)の無い…雷の速度と破壊力を持った物になる事が分かった。

次に自身への敵意が籠もった魔法の発動を感知すると、青い装甲の部分に魔法陣が出現…受けた魔法を強制的に魔力へ変換して吸収する魔法障壁を自動で展開する事も分かった。

この障壁は凄まじい、いや恐ろしいまでの防御力と魔法吸収力を誇り…神也が全力で放った、各種高威力魔法の全てをアッサリと吸収…件の腕輪を外したエヴァが全力で放った【えいえんのひょうが】とそこから繋ぐ魔法【こおるせかい】及び【おわるせかい】も吸収した。

そして吸収した魔力は、自身本来の魔力として自由に扱う事が出来…それをルナへ譲渡、あるいは自身が魔法として使う事も出来るようだ。

またこの時、腕甲と脚甲を介する事により放つ魔法の威力が3倍ほどに上昇…更には無詠唱での発動も可能になるそうだ。

無論、物理攻撃に対する防御力も高かった。

刃が手加減して放った【轟撃】や、涼輔が同じく手加減して放った【縮地・居合】を受けて『くすぐったいです～』で済むのだから。

アーティファクトをアデアットする事によって得られる防御力上昇

効果も手伝い、恐らくは全力の【轟撃】や【縮地・居合】を受けてもまず致命傷は負わないだろう。

セイラのアーティファクトを一通り調べていたエヴァだったが、自分の放った【えいえんのひょうが】が吸収された辺りで顔色が悪くなり…吸収した魔力を使い、腕甲を介して放たれた3倍威力&無詠唱の【えいえんのひょうがモドキ】を見て卒倒しかけた。

「あぁ、やれやれ……自分で言っておいてあれだが、トコトン反則なアーティファクトだな」

「ルナを補助する事を主に置いた、まさにルナの従者の為だけに存在するアーティファクトってトコね」

「うむ…そんなアーティファクトだが、名を…何のひねりもないが『従者の盾』とするのはどうだろうか？」

「それ良いわね、シンプルで……決まりよ、セイラ！　そのアーティファクト、以後は『従者の盾』って呼びなさい」

「はい、御主人様……去れ（アベアット）」

言ってセイラはルナへ複製カードを渡し、双方向念話を可能にする。ルナがカードを受け取った事を確認してアーティファクトをしまうセイラ。

その間にエヴァは『仮契約魔法陣自動描画魔法薬（パクティオー）』の入ったフラスコをもう1本取出し、未だにやや青い顔をキュルケと神也に向けた。

「さて、自動描画薬はまだストックがあるが…キュルケと神也もす

るか？」

「やってみるわ…もちろんシンヤが主、キスで契約するわ」

「ふむ…了解、おいルナとセイラ…そこから離れろ」

「了解～」

「分かりました」

ルナとセイラは複製カードとオリジナルカードを自身の胸の谷間へしまい、魔法陣から出る。
魔法陣からルナとセイラが離れた事を確認したエヴァは、その手に持っていたフラスコを再び宙へ放り投げた。
放物線を描いて飛び、地面で破損…そしてまた再び魔法陣が自動で描画される。

「準備完了だ…神也、キュルケ」

「分かった」

「ええ」

エヴァの合図を受けて魔法陣の中央に立つ神也とキュルケ。
今度の2人はその身長差が非常に大きく、唇同士でキスをしようと思ったらキュルケがかなり曲げなければならない。
だが当の本人たちは慣れたもので…キュルケは神也をひょいっと抱き上げると、そのまま顔を近づけていく。
そして2人の唇が触れ合ったその瞬間…

「仮契約（パクティオー）！」

例によってエヴァの言葉が響き、描かれた魔法陣が黄緑色の光を発する。
同時にキュルケの髪が魔力で立ち上がり、その体がまばゆい光を発し始める。

「……どう？」

「…これがパクティオーカード？」

やがて光が収まった時…そう言ったキュルケの手には、セイラの時と同じようなカードが収まっていた。
それを覗き込むエヴァ。

「どれどれ？」

差し出されたカードには、竜を象って燃える業火を背に立つキュルケの姿が描かれている。
また、カードの情報は…

姓名：キュルケ・フォン・ツェルプストー
称号：業火を統べし竜の妃
徳性：愛
方位：中央
数字：９７
色調：赤
星辰：火星

…となっている。

「うむ、ちゃんとしたパクティオーカードだ…しかしその称号は…
…」

「業火を統べし…」

「竜の妃、ねぇ？」

言って互いに顔を見合わせる神也とキュルケ。
キュルケは故郷ハルケギニアにおいては、魔法使い(メイジ)の中では最高位とされるスクエア階級の腕を持っている。
そしてその得意属性は火。
加えて使い魔であり夫でもある神也は、純たる人間ではなく種族的には竜人(ドラゴニクス)である。
竜人(ドラゴニクス)の伴侶で、火を操る事を得意とする。
当然と言えば当然の称号である。

「まぁ本人達が納得してるならそれで良かろう…じゃあ次だ、やり方は分かるな？」

「ええ、大丈夫…来たれ(アデアット)！」

そうキュルケが言った次の瞬間、キュルケの姿が劇的に変わった。

頭には白銀の、竜の頭を模した意匠の額当て。

首から下は同じく白銀の鎧を着込んでいる。

見た目は無骨な騎士だが、キュルケが元来有する濃厚な色香は一点の曇りも見せていない…むしろこの鎧を装着する事によって、より製錬された色香になっている。

そして一番特徴的なのが手元…その手には一振りの、穂先鋭い白銀の槍が握られている。

柄の各所に荘厳な意匠が施された細槍で、突く事以上に斬る事にも長けていそうな剣状の穂先を持つ槍。

「…これはどんなアーティファクトなの？　セイラみたいに魔力を込めてもなんら反応しないんだけど」

「うーむ、私にも分からんな…何せセイラのアーティファクトに続いて2つ目の、見聞きも知らぬアーティファクトだ」

「にしても凄い意匠よね…まるでハルケギニアの竜使いみたいな……」

「ッ！？　それだ！」

キュルケの呟きを受け、神也が何か閃いたらしい。

神也はその場で、ハルケギニア式の実体分身魔法を使い…偏在（ユビキタス）を1体出現させた。

そしてその偏在に【モシャス】をかけてオーク鬼の姿にし、さらにそこへ【メダパニ】をかける。

【メダパニ】の効果を受けて正気を無くし、暴れ始める偏在オーク鬼モドキ。

「キュルケさん、あのオーク鬼に向かって『竜剣（りゅうけん）』と唱えてくれま

すか？」

「『竜剣』ね？　分かったわ…竜剣！」

そうキュルケが言った、次の瞬間だった。

『ブゴォッ！？』

偏在オーク鬼モドキの体から青い光の玉が飛び出し、それがキュルケの体内へ吸収される。
そして偏在オーク鬼モドキは、その速度が格段に下がったのが誰の目にも見て取れた。

「おい神也、今のは…」

「恐らくですが、キュルケさんのアーティファクトは『竜騎士』の能力を持っていると思います」

竜騎士
槍を扱う事に長けているが、特筆すべきはその跳躍力。
彼らの跳躍力はどの生物をも遥かに凌駕し、その超高空から重力と自重を合わせた…槍による垂直落下式刺突攻撃を得意とする。
無論、自身の意思で【ジャンプ】した場合はどんな高さから着地しても怪我１つ負わない。

その名にある『竜』とは、古代竜騎士は全員が竜使いであった事に由来し…竜と心を通わせ、最高のコンビとして戦場で活躍していた事からそう言われている。
竜騎士だけに伝わる秘技【竜剣】は、それを受けた相手から体力と魔力を奪って自分の物とし…また相手に特殊な能力がある場合、そ

れをコピーして覚える事が出来る。
竜の背に乗って戦場の空を飛びまわり、竜剣で覚えた特殊能力で対軍戦闘をこなし…ジャンプからの落下攻撃と竜剣、竜との連携攻撃で対少数戦闘もこなす。
もちろん魔法の扱いだって得意だ。
階級の低い竜ならば視線だけで屈服させる事も可能だそうだ。
「アーティファクト名はそのまま『竜騎士』でしょうね」
「竜化した神也の背に乗り、空中からコピーで覚えた特殊能力を乱射して？　対人なら竜剣と魔法と槍捌き、加えて神也とのコンビネーション…敵に回すと恐ろしいな」
そんなエヴァの台詞をニンマリとした表情で聞いたキュルケ。
「去れ（アベアット）」
とりあえずはアーティファクトをしまい、複製カードを作ってそれを神也に手渡す。
そして自身はオリジナルカードを、ルナやセイラと同じく…やはり胸の谷間へとしまい込んだ。
神也は右腕に装備している腕甲…アサシンブレードの内側へカードをしまい込んだ。
同時にオーク鬼モドキの消去も忘れない。
いくら姿格好が変わって混乱しているとはいえ、元は神也の偏在…消す事はたやすい。

「さて…これで9人中4人が儀式を終えた訳だが、お前たちはどうする？」

言いつつエヴァは涼輔→綾子→刃→神蓮→蘭里の順に見る。
頬がヒクつく程の明らかな愛想笑いを浮かべた涼輔と、喜色120%な純然たる笑顔を浮かべた綾子。
やはり綾子は涼輔と契約したいようだ。

だが刃達は複雑な顔をしている。

「刃、神蓮…それに蘭里、難しい顔をしてどうした？」

「いや俺達は、なぁ？」

「氣はあっても魔法とか無い世界から来たし…妖術はあったけど」

「いくら旦那様が魔法を“知識として”知っていても、それを技術として確立出来てないままその…仮契約（パクティオー）でしたか？　それに踏み切るには抵抗があります」

仮契約（パクティオー）とは元々、主たる魔法使いが…詠唱中の無防備さをカバーする為の壁役である従者を得る儀式である。

当然従者は一般人でも構わないが、主は魔法使いでなくてはほとんど意味がない。
そこへ来て自らの主としたい刃は、氣の使い手であって魔法使いではない。

「…何だ、そんな事か」

刃達漢人一行の悩みを、事もなげに言ったのは…いつの間にか綾子を、手足を後ろで縛って転がした涼輔だった。
ちなみに綾子は猿轡を噛まされているが、表情は非常に恍惚としている。

「あのな、刃…氣が使えるなら、恐らく魔法も使えるぞ？」

「何だって！？」

「だって俺、元はただの氣闘剣士だったし」

「……はあっ！？」

驚く刃達に対し、ごく普通の技術だと言わんばかりに自らの経験を話す涼輔。
氣と魔力は似て非なるが非常に近しい物質で、氣使いなら魔力を感じ取るのも非常に容易らしい。

「そして氣使いなら、一度認識した自分の魔力は自由自在に操る事が出来ます」

そこへ現れる綾子。
綾子の隣では涼輔が『コ、コイツ…この一瞬であの拘束を！？』と狼狽えているが、それはこの際さて置く事にしよう。

閑話休題

「氣が使えると言う事を前提にお話しますが、刃さん達は氣の技を使う際…内在の氣はどこで練り上げますか？」

「そりゃもちろん…」

「臍の下だけど」

「下丹田でしゅっ！　あぅ／／／」

氣が使えるならば魔法も使える。
それ即ち氣使い（いまの）自分でも魔法が使えると言う事。

蘭里はその事実を知り、緊張と興奮のあまり噛んだのだが…可愛い。

「では今、氣を練れますか？」

「氣を練るのは造作も無いが……っ！」

刃が言った次の瞬間、刃を中心として可視化した緑色のオーラが…氣が吹き出し、刃の体を包んだ。

「はっ！」

「はぁっ！」

次いで神蓮の体からは赤の可視氣が、蘭里の体からは黄色の可視氣が…刃と同じように体から吹き出した。
３人の体から氣が吹き出したを見た涼輔と綾子は、これならと確信した。

「ではお三方、そのまま頭を空っぽに……難しいようでしたら、頭の中に…そう、どこまでも広い真っ白なキャンバスを思い浮かべて下さい…神蓮さんと蘭里ちゃんは、もし『キャンバス』と言う言葉が分からないのでしたら…まだ何も描かれていない真っ白な紙を思い浮かべて下さい」

「そしてそのまま、一度息を全部吐き…そしてゆっくりと吸うんだが、この時『今から吸う息には…大気に含まれる、魔力と言う物質も入っている』と強く意識してくれ」

そう涼輔が言い、言われた事を実践する3人…直後、その目の色が変わった。

「…氣脈の影に、氣脈と全く同じ形で何かある」

「私も同じ物を感じるわ…これが？」

「この、氣の流れの影に…同じ経路で流れるこれが魔力なんですか？」

綾子曰く、人間には動脈と静脈と神経脈の他に『氣脈』と『魔力脈』が存在する。

神経脈は別としても氣脈と魔力脈は、そのあり方が動脈と静脈の関係に近いと言う。

「氣脈と魔力脈はいわばエネルギーの血管…そして氣脈は表側にある静脈と同じだから発見と認識は容易、魔力脈は動脈だから発見が難しいの」

「まぁ講釈はあとでいくらでも出来るとして…そうだな、刃」

「ん？」

「その魔力を右手に集める事を意識して、右手を俺へ向けて突き出し『風よ』って言ってくれるか？」

「涼輔に向かって手を向けて、魔力をその手に集める事を意識して『風よ』だな？　分かった……風よ！」

刃が言った、直後だった。

―ドフォッ！―

「うおっ！」

―ドサッ…―

刃の手から空気の塊が撃ち出され、それが涼輔の顔面を直撃。
思いのほか強い衝撃に、涼輔は中庭の地面へ仰向けに倒された。

「お～、ビックリした…非殺傷魔法で無詠唱でこの威力か、こりゃすげぇや」

言いつつ立ち上がった涼輔は、上着を脱ぎ…その背に付いた土をはたき落とす。
そして綺麗になった上着を来て、にこやかな笑顔で刃に向き直った。

「どうだ？　刃、初めて魔法を使った感覚は」

「今のが、魔法なのか？」

「後でする講義の内容の一部だが、魔法には沢山の属性があってな…今のは風属性魔法の初歩中の初歩、と言っても魔法名は無いし…相手に風の塊をぶつけるだけの魔法で、相手を殺傷できない非殺傷の魔法なんだ」

「ねね、涼輔！　私もやってみたい！」

「なら神蓮もやってみ？　刃と同じように、魔力を右手に集めようって意識しながら『火よ』って言うんだ…あっと、神蓮は俺に手を向けないで空へ向けてくれよ？　火の初歩魔法は非殺傷にはできないから」

「分かったわ……火よ！」

―ゴウッ！―

空に向けて手を突き上げた神蓮がそう言うと、彼女の手から直径２０ｃｍほどの火の玉が射出された。
火の玉は結構な勢いがあるらしく、見る見るうちに空へと昇って行くが…途中で燃え尽きたように消えてしまった。

「初めての発動で２０ｃｍ級、射程距離は５０ｍってトコかな？」

「素質は十分ですし、伸びしろもまだまだありますね」

「じゃあ次は蘭里…もうやり方は分かるな？　蘭里の言葉は『雷よ』だ」

「手はどっちへ向けるんですか？」

「蘭里は…そうだな、ルナに向けるんだ」

「ええっ！？　私がターゲットなの！？」

「だってルナなら威力を見切って、同じ雷撃で相殺する事もたやすいんじゃないか？」

「そりゃそうだけど……仕方ない、先達の技量を見せてあげるとしましょうか…」

「良いんですか？」

「雷属性魔法は扱いが少し難しいのよ…それを見せてあげるわ」

「…分かりました、その胸…お借りします」

「「「「……」」」」

蘭里が言った『胸を借りる』の台詞に、何故か微妙は雰囲気を漂わせ始める涼輔と刃と神也とエヴァ。
言葉の意味は『その技術の名手に、その技術で挑む』と言ったところなのだが…

―ぶるるんっ―
―ぶるんっ―

今この場に居る女性陣の中で、最も大きい…トップ１２０のテラメロンを有する蘭里が、トップ８３のルナにそれを言っても皮肉にしか聞こえないからだ。

エヴァに至っては『雷魔法は私も得意だが…私には、貸すほどの胸がない……』と落ち込み、中庭の地面にのの字を書き始めた。

「…さぁ、いらっしゃい」

「…はい！」

ルナと蘭里も当然その微妙な雰囲気は感じたし、落ち込むエヴァの事も見えている。
だが彼女たちはその４人を、敢えて無視してテイク２を行う。

右手をルナに向けて突き出して立つ蘭里。
対するルナも蘭里に向けて手を突き出してはいるが、蘭里とは違ってその表情は余裕に満ち溢れている。

「行きます……雷よ！」

―バシィッ！―

言って蘭里は、その右手から青白い…稲光の様なものを発生させ、それをルナに向かって撃ち放った。
放たれた電撃は中空に射出されたにも関わらず一切霧散せず、一直線にルナへ向かって迸る。

「…よっ」

その電撃を、突きだした右手で受け止めるルナ。
その表情は変わらず余裕だ。

「初めて放った雷属性魔法にしては良い威力ね…集束率が高いから

霧散もしにくいし、うん…合格よ蘭里ちゃん、貴女には雷属性魔法を使いこなせる素質と十分な伸びしろがあるわ」

「本当ですか！？」

「本当よ、誇ってもいいぐらいの素質と伸びしろよ…雷属性魔法なら私も得意だから、色々教えてあげましょう」

「はいっ！　ありがとうございましゅ！　あぅ／／／」

少女、師を得る。

師、弟子の力量を保証して伸ばす事を約束す。

そして照れて噛む弟子…見ていて微笑ましい光景だった。

「さてこれで全員が魔法使いの門をくぐった訳だが…」

「私、やるわ…刃が主で」

「私もやります！　勿論、旦那様が主で」

「…だそうよ？　エヴァ」

「……フンッ」

綾子にルナに言われ面倒くさそうに立ち上がり、そして三度魔法陣描画薬入りフラスコを投げるエヴァ。

割れてブチまけられたフラスコの中身は、やはり地面をウゾウゾと動き…魔法陣を書き上げる

しかし今度の魔法陣は、これまでの魔法陣とは描かれた模様が明らかに違った。

「エヴァ、この魔法陣は？」

「今投げた魔法陣描画薬は、ある知り合いからもらった魔法陣描画薬で…複数同時契約用の魔法陣が描ける代物だ」

普通の仮契約（パクティオー）は、儀式が済む度に魔法陣を書き直す必要があるそうだが…この魔法陣は１度書けば効果が失効するまで、その中でなら何人とでも同時に契約の儀式が行えるそうだ。

「効果時間は、魔法陣描画後に魔力を流す事で調整が利く…今回の魔法陣は２０分、さぁあまり時間は無いぞ？」

エヴァに急かされるようにして魔法陣の中に立つ刃達３人。
刃を挟むようにして、左右に神蓮と蘭里が並んで立つ。

「じゃあ私から行きます…ん、ちゅっ」

「次は私ね？　…ちゅっ」

刃が蘭里を抱き上げてその唇にキスをし、蘭里を降ろした刃の唇を奪う形で神蓮がキスをする。
ちなみにこの複数契約用魔法陣では『仮契約（パクティオー）』と唱える必要は無いらしく、契約者はパクティオーカードのイラストと情報で契約の成立・不成立を確認するしかないそうだ。

神蓮の唇が刃の唇から離れたその直後、蘭里と神蓮の頭上に…それぞれカードが１枚ずつ現れた。

蘭里の頭上に現れたカードには、右手に剣を…左手には筆と巻物を

持った蘭里の姿が描かれ、情報は…

姓名：徐　蘭里
称号：夫に尽くす幼な妻文武官
徳性：知恵
方位：南
数字：１２０
色調：金
星辰：土星

…となっている。

対する神蓮のカードは、右手に紅く光る剣を持ち…その背に炎の壁を従えた、呉王時代の衣装を纏った神蓮の姿が描かれている。
そして情報は…

姓名：孫　神蓮
称号：夫に飼われた江東の虎
徳性：正義
方位：南
数字：９２
色調：赤
星辰：火星

…となっていた。

蘭里の『夫に尽くす幼な妻文武官』はともかく、神蓮の『夫に飼われた江東の虎』は果たしてどうなのか…神蓮と蘭里の、特に神蓮のカードを見て内心でそう呟く刃。

そしてその2枚をしげしげと見つめ、納得顔をするエヴァ。
どうやら本物の…つまりスカではないパクティオーカードのようだ。
「よかったな2人とも、これはちゃんとしたパクティオーカードだ…しかも喜べ蘭里、お前のパクティオーカードは希少度が高いぞ？」
「そうなんですか？」
「ああ、情報の1つである『色調』だが…ここに『銀』あるいは『金』あるいは『虹』と書いてあるカードはとても希少でな、蘭里はその中でも相当希少な『金』だ」
エヴァ曰く色調が『金』『銀』『虹』のカードは、稀少な魔法具として高い値段で裏取引されることがあるそうだ。
話によればその昔…色調が『金』のパクティオーカードが裏市場に出回った事があり、その時動いた金は一国を傾かせるほどの金額だったそうだ。
「色調はその者の潜在性や方向性を察する為の指針となるが、さっき言った3大希少色は大成する事が約束されたような色だ…蘭里、誇って良いぞ？」
「ありがとうございます」
「さて残るのはアーティファクト召喚の可否だが…やるか？」
「「当然（勿論です）」」
「やり方は分かってるな？」

「「ええ（はい）」」

同時に返事をして同時にカードを構える神蓮と蘭里。
同時にお披露目かとも思われたが、蘭里が一歩引いて先手を神蓮へ譲るようだ。

「どうぞ、雪蓮さん」

「ありがとう、蘭里……行くわよ、来たれ（アデアット）！」

１２時間目：アーティファクト展覧会【前編】（後書き）

まだまだ展覧会は続きます。

１３時間目：アーティファクト展覧会【中編】（前書き）

まだまだ行くよ～！

独自設定・独自解釈が入ります。
ご注意ください。

１３時間目：アーティファクト展覧会【中編】

言って神蓮の手に現れたのは、かつての愛剣と良く似た形状の…鞘に納まった、全長９０ｃｍほどの直剣だった。

「南海覇王？」

「いやどうなんだろう…微妙に違うくないか？」

「そう言えば柄とか鞘の意匠が違うわね……ッ！？」

言ってその剣を鞘抜いた神蓮は、刀身を見て絶句した。

結論から言えばそれは南海覇王ではなかった。

刀身６８ｃｍ・柄２２ｃｍの長さは南海覇王と同じ…だが南海覇王とは明らかに違う点があった。

それは刀身の色。

本物の南海覇王は鋼色の刀身なのだが…

「綺麗…」

神蓮が抜いた剣の刀身は赤だった。

その赤はまるで今なお強く燃え盛る炎のような色をしている。

「火炎剣（フレイムタン）？」

「あるいは紅蓮（レーヴァテイン）の剣かも」

とりあえず神蓮はその剣を振るのだが、何ら変化は現れない。
魔力を流してみても、刀身の輝きが増すだけでその他に変化はない。
刀身が赤いだけの、何らかの名剣かと一同がアタリを付け始めるなか…

「…ん～」

当の神蓮だけは違う顔をしていた。
何かこう、言葉では言い表せないような感覚が心にある。
これが戦場や政務の場なら『勘』と言い表せるのだろうが、今回は勘だけじゃなく…自身の魔力も流れがおかしく感じる。

つまりはこの感覚は、剣と魔力に関係があると言う事には間違いないのだろうが…

「とりあえず、セイッ！」

言って神蓮は、ある事を意識しながらその剣を振るう。
するとどうだ…

―シュバッ、ズガンッ！―

その剣は神蓮が意識した通りの結果を生み出したではないか。
その結果に驚く一同。

「おい神蓮、お前一体何をした？」

レーベンシュルト城の中庭の城壁に刺さった【魔法の射手（サギタ・マギカ）・火の矢（イグニス）】を見ながら言うエヴァ。
だが剣は当然、神蓮の手の中だ。

「ん？　何かね、この剣はこう使う物だって勘がしたの」
神蓮の勘に従ってその剣の性能把握が行われたが、その剣の性能は凄まじい物だった。

まず魔力を込めて振ると、込めた魔力に応じて刀身から火の【魔法の射手（サギタ・マギカ）】が詠唱破棄で発射される。
この【魔法の射手（サギタ・マギカ）】は発射時に神蓮の意思１つで『連弾（セリエス）』『集束（コンウェルゲンティア）』をノーモーションで切り替え可能。
また魔力を込めて『伸びろ』と念じると、刀身が最大で１ｍまで伸び…一度に放てる【魔法の射手（サギタ・マギカ）】の絶対数を増やす事が出来る。
長さを戻す時は魔力を込めて『戻れ』と念じれば良い。

次に氣を込めて振ると、込めた氣の大きさ・強さに応じて刀身から三日月状の赤い衝撃波を発射する。
この三日月状衝撃波は斬撃属性を持っており、凄まじい切断力を誇るが…射程距離は最大で１０ｍほどしかない。
だがこの衝撃波、非常に連射性が高く、神蓮の剣技をもってすれば中距離から相手をみじん切りに出来る。
ちなみに衝撃波は魔力を込めて刀身を伸ばした状態でも発射出来、衝撃波のサイズが大きくなる。

魔力も氣も込めずに振っても高い切れ味を誇る。
その切れ味は、レーベンスシュルト城の城壁を…まるで豆腐を切るようになめらかに円形に切り抜け、神也が錬金で作ったプラチナのインゴットをバターを切るが如く両断出来るほど。
剣そのものが非常に強靭で、竜化した神也が曲げようとしてもビク

ともしないし…涼輔の【縮地・居合】や刃の【轟撃】を受けても曲がらないし刃こぼれもしない。
エヴァの【えいえんのひょうが】から【おわるせかい】へ繋ぐ完全氷結粉砕コンボを受けても、剣が若干冷えるだけ。

「魔力を込めたら【魔法の射手（サギタ・マギカ）】を発射し？　氣を込めたら【切断属性の三日月状衝撃波】を発射？　何も込めずとも高切断力を？
どんなバグ剣だそれは」

「俺の居た世界でも、神蓮のバグ度合いは低かったはずなんだが…」
ちなみに刃は、自身がバグ筆頭であることは棚の遥か上に置いてきている。

「この剣の名前なんだけど『南海覇王』って付けてもいいかしら？
この剣、妙に手に馴染むのよ…そう、まるで無数の戦場を共に切り抜けてきた愛剣のように」

「南海覇王？　それは神蓮のいた世界の、呉で王をやっている娘に…呉王の証として継承した剣の名前だろう？　…いや待て、そう言えば聞いた事がある…南海覇王と言う剣には、同名の浅打や影打などが無数にあり、成剣と真打は1本ずつしかないと」

「……そう言えば私が王位に就く前に持ってた剣も、南海覇王じゃなかったかしら」

言って神蓮は当たり前の如く、その柄に付いている紐飾りの付け根を見て…そして唐突に涙を零し始めた。
そんな神蓮の姿に驚く一同。

「おい！　どうした！？」

「あ、ごめん…えっと、この剣…やっぱり南海覇王よ」

神蓮曰く…実はこの剣、本当の名を『南海覇王・真打』と言い…自身が居た後漢時代で、自分が王位に就く前に振るっていた剣なのだそうだ。

娘である孫策へ呉王の証として譲渡したのは『南海覇王・成剣』

『真打』はその切れ味の凄まじさから魔剣とされ、その子剣である『成剣』が出来たと同時に封印された経緯を持つ。

パっと見の違いは、素人目には分からないほど酷似した『真打』と『成剣』だが、その違いは柄の飾り紐の根元を見れば分かる。

『真打』も『成剣』にも柄の飾り紐の根元に、飾り紐を固定する金具があるのだが…

「ここ、わかる？　『しぇんれん』って書いてあるのが」

『真打』は神蓮が最初に手に入れた愛剣として、飾り紐の金具に名前を彫り込んだのだ。

そして今、神蓮が手にしているアーティファクト剣も、その飾り紐の金具にひらがなで『しぇんれん』と彫ってあった。

「昔の愛剣が、時間と世界を越えた神蓮の元へ帰ってきたのだろう……刀身が赤くなり、その他の能力を有したのは…自分を使っていた頃の神蓮より、今の神蓮の方がずっと強いからだろう…剣が自ら成長した、そうとしか考えられん……しかも元々の愛剣だ…手に馴染んでも不思議はないな」

「まぁ良いだろう…俺も『神蓮が握るべき剣は南海覇王』ってイメージがあるし」

「ありがとう、刃……またね南海覇王、去れ（アベアット）」

言って南海覇王をアベアットする神蓮。

「次は蘭里の番だな」

「頑張りましゅ！」

カードを手に、意気込む蘭里。
相変わらずカミカミなのは、これからアーティファクト召喚と言う大事の前の緊張の表れか。

「……来たれ（アデアット）！」

言ってカードを掲げる蘭里。
そのカードが蘭里の手の中で光り輝く。
そしてその光が蘭里の全身を包み…

「…わわわ！」

光が収まった時、蘭里はそれまでとは違う衣装を纏っていた。

「それは…羽扇（うせん）か？」

言ってエヴァが指差したのは、蘭里の右手にある…真ん中の羽根だけが黄色で、その左右４枚が真っ白な…９枚の羽根ので出来た扇。

「真ん中1枚だけ色の違う羽扇…軍羽扇(ぐんうせん)でしゅ」

羽扇。

指揮鞭や教鞭と同じく、大勢に対し動向を指揮するための道具。

羽根の配置や形状、切り揃え方や色によって種類と名称が異なる。

蘭里の手の中にあるのは、全部で9枚の羽根を放射状に束ね…飾りと柄を付けた物で、その名を軍羽扇と言う。

本来は真ん中の1枚は、自身が所属する軍や国の色で染め抜かれる物。

蘭里が居た時代で例えるなら、蜀軍所属なら緑…魏軍所属なら濃紺…呉軍所属なら赤…と言った具合になる。

「けどこれ、中央羽根(なかばね)が黄色いわよ?」

蘭里の持つ羽扇を見ていた神蓮が言う。

神蓮の言う通り、蘭里の手にある軍羽扇の中央羽根は黄色い。

「黄色って聞けば黄巾を思い浮かべるけど、黄巾はその名の通り『黄色い布』だしな…」

「羽根と言えば蜀軍の桃香(とうか)を彷彿とさせるわね」

神蓮の言う桃香とは、自身が居た時代の蜀軍総大将である劉備の真名である。

彼女は羽根飾りを好んで身に着ける為、神蓮の中では『桃香＝羽根』と言う認識になっているようだ。

「それはともかくその羽扇、何が出来るんだ?」

「ん～…んっ！」

言ってとりあえず魔力を流してみる蘭里。
すると中央羽根に、目に見える変化が現れた。

―パシッ…パチパチパチ…―

中央羽根が、薄紫色のスパークを発し始めたのだ。
そのスパークは大気中であっても霧散せず断続的に続き、やがて美しい網目状の稲妻となって中央羽根を軸として帯電を始めた。

「雷撃系のアーティファクトか？」

「見た感じは集束させた雷属性『魔法の射手（サギタ・マギカ）』発射待機状態に似ているな」

「そのまま振ってみては？」

そう言って城壁を指差す綾子。
そこは先ほど神蓮によって『南海覇王』で、一部が円形にくり抜かれている。
ようはあの穴を狙えと言う事なのだろう。

だがこの時、その発言が災難を招くとは誰も予想できなかっただろう。

「…えいっ！」

綾子のアドバイスに従い、軽い動きでその帯電した軍羽扇を振る蘭里。

その直後だった。

―ズギャギャギャギャギャギャガガガガガガァンッ！！―

「きゃあああああああっ！」

「……」

形容しがたい轟音と共に、羽扇の羽根９枚全てから夥しい数の『魔法の射手・雷の矢』が発射された。

およそ６万にも及ぶ雷撃の矢は、神蓮が付けた焦げ跡どころか…その焦げ跡が付いた城壁を瞬時にガレキの山へと変えた。

その衝撃で吹き飛び悲鳴を上げる蘭里と、自分の言った事が原因だと呆然とする綾子。

当然、エヴァの額とこめかみには青白い…太いミミズの様な血管がニョロリと浮かび上がっている。

「こぉのド阿呆がああああああっ！」

この後、エヴァにＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩされた綾子は真っ白に燃え尽きていた。

そしてそんな綾子を放置して蘭里のアーティファクト解析は進んでいく。

調べた結果、蘭里のアーティファクトは…

１．アデアット中に魔力を込めると帯電し、振ると雷属性の【魔法の射手】を発射する。

１－１．矢の数は込める魔力に応じて増減し、明確な数字を思い浮

かべればその数だけ発射される。
１―２．数字を意識しなければその時に発射できる最大数を発射する。

２．帯電状態で『伸びろ』と念じて振ると、即座に中央羽根が伸びて剣状の武器になる。
２―１．剣状態でも【雷属性・魔法の射手（サギタ・マギカ）】発射能力は健在、方法も変わらない。
２―２．剣状態になっている時に氣を込めると、刀身から斬撃属性を持つ雷撃の衝撃波を撃てる。
２―３．もちろん剣として使う事も出来る。

３．非帯電状態で雷撃系の攻撃を受けると自動的に帯電状態へ移行する。
３―１．帯電状態は蘭里の意思で即座に解除できる。

４．アデアット中は非帯電状態であっても、他者から受ける雷撃系攻撃の全ダメージと追加効果を無効化する。
４―１．アデアット中は主の行う攻撃に雷撃属性を付与する事が出来る。
４―２．アデアット中は自身の放つ全雷撃系攻撃の威力が１．３倍になる。
４―３．アデアット中は自身の指揮能力が１０倍になる。
４―４．アデアット中は自分を中心に半径２ｋｍ以内の事象を見通す事が出来る。

５．アデアット中であれば【杖よ（メア・ウィルガ）】の呪文でいつでも手元へ即座に召喚出来る。
５―１．召喚は一切の事象に阻害されない。

…このような能力を秘めている事が分かった。

「私の持っている『フィアルディアンセイバー』の上位武器ってとこ？」

「軍師たる能力を発揮できるような能力を備えた、な」

「…みたいでしゅ」

己のアーティファクトが持つ力の凄まじさに戦々恐々としている蘭里。

機能分類４項の４と５はともかく、１項全部と２項全部は反則と言えよう。

その有する力を涼輔が『雷神の力を顕現したような羽扇だな』と表現した事から、アーティファクト名は『雷神扇（らいじんせん）』となった。

「去れ（アベアット）」

雷神扇をしまい、佇まいを整える蘭里。

視界の端では涼輔に頼み込まれた神也が、錬金の魔法で城壁を修理している。

そんな神也に対しひたすら謝る綾子。

当の神也は苦笑している。

「……さて、涼輔」

「…ん？　あぁ……」

城壁の修理を終えた神也と共に戻ってきた涼輔を呼ぶエヴァ。

涼輔はエヴァの表情から、彼女が何を言いたいのかをすぐに悟った。
『残っているのは涼輔&綾子だけだ』とエヴァは言いたいのだ。
涼輔は顔を動かさず、眼球だけを動かして横を見る。
するとそこにはやはりと言うべきか…ウットリとした表情の綾子が、
その体を戦慄かせて涼輔を見ていた。
綾子の中では既に、涼輔を主としてキスで仮契約するビジョンが出来ているのだろう。
口の端からは涎の様な物が滴り始めており、眼光は獲物を見つけた猛禽類…いや捕食者の眼だった。

「お、俺としては例え義妹と言えど…」

「お義兄様？　血の繋がっていない兄妹は結婚できるんですよ？」

涼輔の台詞を涼しげな表情で遮る綾子。
そして綾子は何故か制服の胸のリボンをほどき、ブラウスのボタンを外し始めた。
１６歳にあるまじき発育度合いを誇る胸が、肌蹴たブラウスの間から深い谷間を見せる。

「って何故にイキナリ結婚まで話が飛ぶ！？」

「だって、ファーストキスを献上＝身も心もその人の奴隷…そうでしょ？」

「つかそれは結婚とは言わん！」

「え？　だってその人に全てを捧げると言う事は、その人と見も心も結ばれるんでしょ？　それは結婚って言うんじゃないの？」

「バカタレ！　いい加減にお前はその、俺と結婚するとか…俺を（性的に）喰いたいと言った考えから卒業しろ！」

「分かりましたわお義兄様…」

「……分かってくれたか？」

「はい、私はお義兄様の股間の槍で初めてを卒業します！」

「だあああっ！　何も分かっちゃいねえええええっ！！」

頭を掻き毟って跪き、声を上げて絶叫する涼輔。
その向かいでは綾子が、その肌の露出度をドンドンと高めていく。
それを必死に止めようとする涼輔だが、綾子はそれを『襲ってくれるのですね！？』と喜んでいる。

「……はぁ、阿呆めが…」

そんな綾子に対し、盛大な溜息を吐くエヴァ。
見れば綾子はいつの間にかスカートと靴下を脱ぎ捨て、涼輔に襲われる…いや、涼輔を襲う準備を整えていた。
図柄もいつしか、逃げ惑う涼輔とそれを半裸で追う綾子の図になっている。

「見ていて頭痛がしてきたぞ…おい綾子！　お前を従者にする式で魔法陣を書いてやるから、とっとと終わらせろ！」

言ってエヴァは魔法陣描画薬入りフラスコを投げる。
フラスコは放物線を描いて宙を舞い、やがて着地してその衝撃で砕

け…仮契約用魔法陣を地面へ描く。
それを見た綾子は一瞬だけ足を止め…

「ッ！！」

無双御鏡流に伝わる高速移動術『縮地』を発動。
その勢いで涼輔にタックルを仕掛け、涼輔を地面へ押し倒し…

「ちゅ…」

「んんんんんっ！！！！」

瞬間、涼輔の唇に自分の唇を重ねる。
そして響く涼輔の絶叫。
とは言え逃げられないように頭を固定され、綾子の唇によって口を塞がれている為にくぐもった悲鳴しか聞こえないのだが。

「ちゅ、ちゅちゅっ…ちゅる、ちゅ…」

「んむっ！？　む、むぅっ！　んむぅっ！！」

…悲鳴を聞くに、綾子の舌が涼輔の口内へと侵入したらしい。
綾子にのしかかられたままジタバタと暴れる涼輔だったが…

「んむっ、むぅ…う……」

やがてビクンと1回だけ盛大な痙攣をした後、動かなくなった。
どうやら舌だけでアレされたらしい。

「はぁ…仮契約（パクティオー）！」

溜息と共に紡がれたエヴァの声と共に、綾子の体が激しい光を放った。

１３時間目：アーティファクト展覧会【中編】（後書き）

展覧会は次で終わりかな？

１４時間目：アーティファクト展覧会【後編】（前書き）

カッとなってやった。
どうしても出したかった。
悔いはない。

強引設定・独自設定・独自解釈が入ります。
ご注意ください。

１４時間目：アーティファクト展覧会【後編】

「……ウソだろ、オイ」

「……こんな事が…」

「眼前で見ているが、６００余年生きてきて初めての出来事だぞ？」

言って一同が視線を向けたのは、綾子の手に握られたカードはなく…義兄（あに）としての倫理観、そして男としての矜持や尊厳を打ち砕かれ…真っ白に燃え尽きた涼輔の手にあるカードだ。

パクティオーカードは契約で決めた従者の手元に出現する。

これが大原則なはずなのだが、その原則を覆し…主である涼輔の手元にもカードが出現しているのだ。

「１つの魔法陣で主を１人とし、もう片方ないしもう数人が従者として契約する…そこまでは理解もしたし、体験もした…けど、これって……何でカードが２枚出てくるの？　それも互いに絵柄の違うカードが」

「分からん…ただ、仮契約（パクティオー）の魔法陣構築式にミスはない……つまり、涼輔と綾子のどちらかがこの珍現象を引き起こした原因と言えよう」

言ってエヴァはまず、綾子の手に握られているパクティオーカードを見る。

綾子のカードには、その背に４色の光球を背負い…黒い刀を左八双で構えて立つ綾子の姿が描かれている。

そしてその情報は…

姓名：御鏡　綾子
称号：魔神の下僕
徳性：愛
方位：中央
数字：８９
色調：黒
星辰：太陽

…となっている。
表記を見る限りは普通のパクティオーカードである。
だが問題は仮契約（パクティオー）の儀式の立場上は主であるはず涼輔が、パクティオーカードらしきカードを手にしている事だった。

涼輔のパクティオーカードっぽいカードには涼輔の姿が描かれておらず、代わりに青・黄緑・赤・水色・赤茶・金・黄土色・黄・深緑・紫・灰・白の１２色の光球が飛び回り…その光球達の端で挑戦的な笑みを浮かべ、黒いオーラを纏っている綾子の姿が描かれている。

そんな涼輔のカードの情報は…

【Ｃｈａｒｔａ　Ｄｏｍｉｎｕｓ】
姓名：御鏡　涼輔
称号：十三精を束ねる魔神
徳性：正義
方位：中央
数字：１３
色調：虹
星辰：冥王星

…となっていた。

「タイトルが『Ｃｈａｒｔａ　Ｄｏｍｉｎｕｓ』…ラテン語で『主のカード』ってあるぞ！？」

「おいおい、正体不明で新種なのは確実の謎カードなのに色調判別はウルトラレアなのか」

「あ、ホントだ…色調が虹になってる」

「しかも称号が『十三精を統べる魔神』って…」

「何なんでしょうね？　特にこの１２色の光の玉と、黒いオーラを纏った綾子さんの姿は」

綾子のカードは正規のパクティオーカードで、綾子の姿が描かれているが…涼輔のカードのように『Ｃｈａｒｔａ　Ｄｏｍｉｎｕｓ』と言う情報項目は存在しない。
キュルケ・セイラ・神蓮・蘭里のカードについても同じく、情報項目に『Ｃｈａｒｔａ　Ｄｏｍｉｎｕｓ』と言う情報項目は存在しない。

そんな不思議なカードについて、当事者そっちのけで議論を始めるエヴァ達。
無論、涼輔と綾子は魔法陣内へ置き去りである。

「……お義兄（にい）様、私…とても嫌な予感がしますが」

「……奇遇だな、俺もだ…肉食系ハレンチ義妹よ」

そんな中…直前まで、風に吹かれるだけで塵と化して飛び去りそうだった涼輔だったが…己の手と肉食系ハレンチ義妹(あやこ)の手の両方にカードがある事を知って復活。
そして他の一同の会話から、涼輔の持つカードがどんなカードなのかを大よそ察した綾子と…それに同感の意を示す涼輔。

涼輔の上から退き、自身のカードを地面へ置いて座る綾子。
着衣はいつの間にか制服に戻っている。
そしてそんな綾子の横へ座り、綾子のカードの真横に自身のカードを並べる涼輔。
するとカードが並んだ状態でほのかな光を放つ。

「…これはもしかすると」

「もしかするかもしれません」

「「……」」

言ってしばらく黙り込む2人だったが、ふと綾子が唐突に…自身の左腕の制服の袖をまくりあげた。
そして絶句…苦悶の表情を浮かべて頭を振った。

「お義兄(にい)様」

「ん？」

「どうやら当たりですね…ほら」

綾子は袖をまくったままの左腕を涼輔に見せる。

すると涼輔は一瞬息を呑み、そして絶句…綾子と同じように苦悶の表情を浮かべ、溜息を吐いた。

「まさか、俺の背中も？」

「私の左腕がコレと言う事なので、お義兄（にい）様の背中も恐らくは…」

「そうすると…アデアットすると全員来るのか？」

「問題はそこなんですよ…アデアットで本体が召喚されてくるのか、召喚用媒体が召喚されるのか…この際ですから試しにアデアットしてみません？」

「……はぁ、それしかないかぁ…つかコレ、本当にアーティファクト…いや、そもそもパクティオーカードなのか？」

「アーティファクト召喚用の呪文を唱えれば分かる事です」

「…だな」

言って涼輔は自身のカードを手に取り立ち上がる。

そしてカードを掴んだ手を前へ突き出し…

「来たれ（アデアット）！」

そう叫んだ。

すると次の瞬間、涼輔の左手の指に明確な変化が起きた。

何と涼輔の左手の全指に様々な色をした、合計１３本の指輪が装着されたのだ。

その色は青・黄緑・赤・水色・赤茶・金・黄土色・黄・深緑・紫・灰・白・黒の１３色。
灰色の指輪だけ、他の指輪の倍の太さを持っている。
そして何故か、同時に綾子の左手薬指にも黒い指輪が填まる。
「ｋｔｋｒ、ってちげぇ！　やっぱあの指輪かよ…つかコレがアーティファクト扱いなのか？」
「お義兄（にい）様、この指輪は？」
「契約の証…１３本あるのは、俺が１３属性それぞれの精霊と契約してるからだと思うが…黒、つまり闇属性精霊とは契約した記憶がないんだが？」
「…私の左手薬指にもいつの間にか指輪が填まってますが、色が黒です…と言う事は１３属性の『闇』を私が司るのかと…腕の刻印も【我、リョウスケ・ミカガミと契約を交わし、主に全てを捧げる闇（ミ）精霊妹（ディネイト）…我、主以外からの寵愛に応えず】と書いてありますし」
「…何故…相手用の契約の指輪が左手の薬指に填まってるのかは、この際置いておくとしてだ……うぎぎ…やっぱり抜けんぞ、コレ…抜こうとするとゲキレツに痛いし」
「『去（アベアット）れ』してみては？」
「…去（アベアット）れ…痛（い）ててててててっ！　つか指輪消えねぇし痛（い）てぇ！　抜こうとした時より痛みがつええっ！」
綾子の助言に従い、アーティファクトと睨んだ指輪を『去（アベアット）れ』しよ

うとする涼輔。
しかし指輪は消えず、涼輔の指に強烈な痛みをもたらした。
去る気は無いと言う、指輪の主の意思表示だろうか。
「っはぁ、はぁ…常在型のアーティファクトってか？」
「そのようです…まぁ彼女たちを味方に付ける事が出来れば、それこそ近代軍隊の一個師団を片手で殲滅できるでしょうね…問題はどうやって呼ぶか、ですが」
「まぁそれは後で考えるか…んじゃ綾子、次はお前がアデアットしてみろ」
「分かりました」
魔法陣の外ではいつの間にか喧嘩になっており、エヴァの氷属性魔法とキュルケの火属性魔法が真正面からぶつかり合って膨大な量の水蒸気を発生させている。
あの水蒸気量で水蒸気爆発でも起きようものなら大惨事は確定なのだが、その辺りは考えているのだろうか。
「来たれ（アデアット）！」
言ってカードを手に取り、アーティファクト召喚の呪文を唱える綾子。
すると綾子のパクティオーカードが光を放ち、その手に見慣れた…漆黒の刃を持つ日本刀が現れた。
「…小烏丸天国（こがらすまるあまくに）？　何故？」

「…お前が闇精霊化したから、所持武器が昇格したんじゃねぇの？
元々小烏丸天国は御鏡十握の一振りだし、刀に格があってもおかしくねぇよ」

御鏡家には【御鏡十握】と呼ばれる１０本の霊刀・妖刀が存在する。
そのいずれもが打たれやその経緯に曰くを持ち、所有者に様々な幸や害をもたらしてきたと言う。
涼輔の愛刀である『神断緋刃』は御鏡十握の１位の霊刀。
そして綾子の愛刀である『小烏丸天国』は御鏡十握の８位の妖刀。
他にも…

２位『緋鳳』妖刀
３位『童子切安綱』妖刀
４位『不知火』霊刀
５位『朝顔』霊刀
６位『夕凪』妖刀
７位『熊蜂』霊刀
９位『鬼哭』妖刀
１０位『蟲食』妖刀

…と言った８本の御鏡十握が存在するそうだが、故郷の実家に２位の妖刀『緋鳳』がある以外の消息は現状不明らしい。

「……なるほど」

「どうだ、何か分かったか？」

そこへ、全身が煤けたエヴァがやってきた。
後ろには全身に霜を這わせたキュルケの姿もある。
その他のメンツは苦笑の表情だ。

「色々分かったには分かったが、別に問題が増えちまったよ」

「どう言う事だ？」

「端的に言ってしまえば、お義兄（にい）様のカードは確かにパクティオーカード…それもアーティファクトカードです…ですが、アデアットしたアーティファクトがアベアットでしまえません」

「…はあっ！？」

「言葉にするなら『常在』型アーティファクト』って所だろうな」

常在型アーティファクト。

それは言い換えれば『着脱不可能な呪われた道具（カースドグッズ）』と言えよう。

「…で？　その能力は？」

「主な機能は精霊の召喚と完全使役、そのアーティファクトの持ち主に魔力量ブーストと詠唱破棄技能を追加…他にもいろいろあるが、特筆すべきはこの２つだな」

「そりゃまた結構な能力じゃないか…では問題とは？」

「その肝心の精霊召喚の方法がサッパリだ」

九字を切ったり魔力を込めても呼ぶ事は出来ない。

そして呼ぶ事が出来ても、返す事が出来るかどうか不明。

「オーソドックスに名前を呼べば良いんじゃない？　何かポーズと

それっぽい呪文と一緒にさ」

「麻帆良世界式なら『召喚（エウォコー・ウォース）』と言う呪文の後に、呼び出したい従者のフルネームを言えば召喚出来るんだが…」

「ならまずはそれでやってみるか…よし『召喚（エウォコー・ウォース）！　アヤ＝ケリュアクアス！！』」

言って涼輔が左手を前へ突き出した瞬間…それまで何も無かったレーベンシュルト城中庭の中空に突如、巨大な水の球が出現し。
それは見る見るうちに人間の形をとり…やがて青髪の美少女の姿となった。

「…えっと、ここはどこなんでしょう？　リョウ様の声が聞こえたかと思った瞬間、こんなところへ出て来たんですが…」

言って少女は周囲を注意深く見渡し、そしてある人物の顔を見てその顔をほころばせた。

「もしかして、リョウ様…ですか？

「アヤちゃん、だよな？」

「ああっ、リョウ様…リョウ様っ！　お会いしたかったです！！」

歓喜の表情で涼輔に駆け寄り、そして抱きつく青髪の少女。
彼女はその目じりから感激の涙を滲ませている。
ちなみに少女の身長は１８５ほどもある長身で、それに比類して胸も大きい。
そんな彼女が涼輔を、その胸で圧殺せんが勢いで抱きしめているの

だ。

「おい涼輔、彼女は何者だ？」

「ぷっは！　アヤちゃん、ちょい離れてくれるか？」

「は～い」

「エヴァ…彼女は俺が住んでいた世界で、俺が契約を結んでいた12属性精霊の内…水を司る元素神霊（エレメント・ハーツ）のアヤ＝ケリュアクアスと言う」

「アヤ＝ケリュアクアスと申します、水の元素神霊（エレメント・ハーツ）…種族名は『水精霊母（マーメディア）』です」

「元素神霊（エレメント・ハーツ）だぁ！？　私達魔法使いが、その魔法を撃つ時に力を借りる相手の最上位存在ではないか！」

魔法世界（ムンドゥス・マギクス）に由来する魔法使いは、その魔法を使う場合に各属性の精霊の力を借りる。

例えば先日、魔力封印破壊の礼としてエヴァが披露した【魔法の射手（サギタ・マギカ）　連弾（セリエス）・氷の17矢（グラキアーリス）】の詠唱文だと『氷の精霊17頭、集い来りて敵を切り裂け！　魔法の射手　連弾・氷の17矢！！』となる。

他にも例えば、神也がガンドルフィーニへ放った【魔法の射手（サギタ・マギカ）　連弾（セリエス）・火の3矢（イグニス）】も、普通に詠唱すれば『火の精霊3頭、集い来りて敵を燃やせ！　魔法の射手　連弾・火の3矢』と発声する必要がある。

このように魔法使いと精霊は切っても切れぬ関係にあり…その精霊と契約して更には支配下に置いていると言う事は、それだけ魔法使

いとしての力量が大きいと言う事なのだ。

「ってちょっと待て、今『契約を結んでいた１２属性精霊』と言ったか？」

「…言った」

「……うぅ～ん…」

涼輔の爆弾発言に、エヴァがその内容を受け止めきれず失神。

治癒魔法が使えるルナが介抱に入る。

「エヴァさんの言葉を引き継ぎますが、涼輔さんはその他１１体の元素神霊（エレメント・ハーツ）を全員召喚できる…と？」

「アヤちゃんの左手薬指に青い指輪があり、彼女が『召喚（エウォコー・ウォース）』の魔法でここへ来たって事は十中八九…な」

「あの、リョウ様？　ここは一体どこなのですか？」

「お久しぶりです、アヤさん」

「その声はアヤコさん！？　お久しぶりです～！」

「ここがどこで、お義兄（にい）さまがどう言った状況下にあるかは私が説明しますのでこちらへ」

こうしてダイオラマ魔法球の中は、その直後…内在人数が一気に増える事となる。

１４時間目：アーティファクト展覧会【後編】（後書き）

展覧会はこれにて終了です。
次回は自習と言う名の閑話を２つ挟んで、薬味少年が麻帆良入りする予定です。

１５時間目：ある少女の独白【自習】（前書き）

異様に短いです。
独自設定を含みます。

１５時間目：ある少女の独白【自習】

皆は、変えたい過去とか変えたい未来はあるかな？

突然何を言ってるんだと思われるだろうが、まずは話を聞いて欲しい。

例えば昔の自分が原因で、今の自分が困窮していたり…今の自分が原因で、未来の自分が困窮する事が分かってる場合がそうなる。

私の場合は前者で、過去にあった事が原因で困窮しているんだ。

…そう、私は未来人。

この世界では『英雄の息子』と呼ばれる人間の子孫。

しかし当の子孫にその、私が困窮する原因は無く…その子孫が居た環境にこそ原因がある。

だから私は過去へ帰って来た。

文字通り、時間を超えて…いわゆるタイミスリップと言う奴だ。

私の目的、それはご先祖様に接触し…然るべき時に『魔法』の存在を世に知らしめる事。

私は生まれつき魔法が使えない。
その魔法適性は…入れる魔力があっても、器が存在しない…と言う例えで理解出来るだろうか？

そう、魔法の発動に必要な『呪文詠唱』をしても…体と魔力の間にパスが出来ていない為、魔法の発動が出来ない。
それどころか私の体は、そのパスがどうやっても発現・開通しないのだ。

このおかげで私は、自分が存在した世界では最低辺の存在だった。
何故なら自分が存在した世界は、魔法を使える者が優位な…魔法至上世界だったから。

そして魔法使い達は、その魔法を過信し…やがて自らを、自らの世界を…自らの魔法で滅ぼした。
魔法が使えない…私の様な人間と一緒に。

私は崩壊した世界で誓った。
先祖の代で改革を起こせば、私の世界が滅びる事はないと。
だから私は過去に、先祖が居る代へ…この麻帆良へ戻って来た。
この時代でしか、改革を起こすチャンスが無いから。

もちろん、魔法が使えないと言う欠点も…半ば無理やりな方法で解消してある。

そして体の方も鍛えに鍛え、肉弾戦もこなせるようにした。
これならば当面の間は、何があっても大丈夫だろう。

しかし帰って来た私に、想定外の事態が発生した。
私の知る過去には無かった事態が発生したのだ。

それが、エヴァンジェリンが保護したと言う『9人の若者』の存在。
記憶と文献が間違っていないなら、私の知る過去に…この時期には
エヴァンジェリンが誰かを保護したと言う話は無い。

最初に彼らを見た時、私は本当にここは私の先祖が存在する世界な
のかと疑ったが…今はまだ知る事が出来ない。
何故なら今はまだ、先祖がこの場所に存在しないから。

彼らは何者なのか？
何が目的でこの時代にいるのか。
場合によっては協力の要請、あるいは排除も辞さない。
私の勘ではあの9人全員が魔法使い。
尤も…エヴァンジェリンが保護した、と言う話自体がそれを裏付け

てはいるが。

教育実習生…

御鏡　涼輔。
呂堂　刃。
孫　神蓮。
キュルケ・フォン・ツェルプストー。
ルナティーア・ラインルゥカー。

そして転校生としてやって来た…

御鏡　綾子。
徐　蘭里。
セイラ・ラインルゥカス。

呂堂と孫　神蓮、それに徐　蘭里に関しては…私や古(くー)と同じ匂いがするが…何故だろうか？
これも一度調べる必要があるが、まずは接触が先だ。

彼らは益か害か、はたまた中立か不干渉か。
益なら良いし、中立や不干渉ならばそれもまたそれで良い…ただし害となれば排除が基本だが、果たして排除が可能かどうかはさておく。

件の人物達は、学園の郊外に豪邸を築き…そこで生活をしていると言う。

学園の郊外と言う事は、学園長認可と言う事になる。
つまりは学園長と同じ側…将来的には私の世界を滅ぼした側と同じ思考を持っている可能性がある。

もしかすると敵地へ踏み込む事になるやもしれないが、それも私の野望成就の為には致し方なさそうだ。
とりあえず、超包子の特製肉まんをお土産に話を聞きに行くとしようか。

１５時間目：ある少女の独白【自習】（後書き）

口調とモノローグって統一する必要があるのでしょうか？

１６時間目：ある少女の慟哭【自習】（前書き）

前話と同じく異様に短く、独自設定を含みます。

１６時間目：ある少女の慟哭【自習】

突然だがお前達は、自分が置かれた状況における“常識”について考えた事があるか？

私は常日頃からそればかりを考えている。

何故かって？

周りが、どう見てもどう考えても非常識ばかりだからだ。

まずクラスメートが変だ。

ショタコンの金髪に、オレンジの髪したオッドアイ…褐色の肌して拳銃持ってる奴、忍ばない忍者、日本刀入りとしか思えない刀袋持った奴…この辺りはまだ…まだともかく、ロボットはねえだろ！

テメェだよ出席番号１０番！

しかもそのロボットを、誰しもがロボットと認識しないと言うのもおかしな話だ。

見ろよあの…頭のアンテナっぽいバイザーと、関節部。

どう見てもロボットだろうが！

次に学園長が変だ。

何だよあの頭。

洋梨型って、どんな骨格してんだよ！

つか何故誰もあの頭に疑惑を抱かない！？

私が生態学者なら、真っ先に研究室送りだぞ？

しかもその頭を金鎚で殴る、クラスメートで孫娘！

お前のそれは殺人未遂だぞ！？

そして学園が変だ。
学園の真ん中に、明らかに異常な大木があるのに誰もそれを異常と思わないし…登校にロールスロイスやローラーブレードの使用が可能とか、規則もクソもあったモンじゃねぇ！
しかもこの時期に教育実習生を5人も受け入れるし、その5人全員が1クラスを担当するとか…加えて実習生受け入れから僅か4日後に、今度は転校生3人とか絶対変だ！

けど口に出して変だとは言わない。
何故ならここ麻帆良では、私のような考えこそ変と認識されるから。
口に出したところで『え？　あれが変なの？』とか『何言ってんだ？　頭おかしいんじゃないか？』と言った反応が返ってくるのがオチ。

そのせいで酷いイジメにあった事もある。
当時の教師は元より、庇うべき親ですら私の意見を認めなかった。
結果として私は捻れた…捻れ過ぎて、常識を訴えるのがアホらしくなった。

以来私は、自分から積極的に誰かと交流を持つ事を止めた。
モブでいれば、このアホらしい現実に直面しなくて済むからだ。

さて、今日も日課のブログ更新するか。

ｆｒｏｍちう
今日は転校生が来たんだけど、この時期に転校生とかあり得ないぴょん。
オマケに、教育実習生の方もそうだけど…特に転校生の方、同い年の癖にあの体型は絶対無いぴょん。

あとは軽くＦ５キーを連打して…ってオイ、レス早いなお前ら。

ｆｒｏｍミラーブラザー
＜＜ちうたん
マジこの街って変だよな。
クラスにロボットとかテラワロスｗ

ｆｒｏｍドラグーン
＜＜ミラーブラザー
禿同…洋梨型の頭した学園長とか変すぐるｗ

＜＜ちうたん
まぁちうたんにも浅からず関係あるから、近々納得出来るんじゃないか？

ドラグーン…私にも浅からず関係ある？
どう言う事だ？
お、新しいレスが付いてる。

ｆｒｏｍミラーシスター

＜＜ミラーブラザー
アレは本当に人間ですか？
後でベッドで話し合いましょう

＜＜ちうたん
私の体は、ミラーブラザーの為に育て上げた物です
私はミラーブラザーの為だけに存在します

ｆｒｏｍミラーブラザー

＜＜ミラーシスター
ざけんな

ｆｒｏｍエッジ

＜＜ミラーブラザー
＜＜ミラーシスター
そう言った事は余所でやれ

<<ちうたん
他聞にウチの嫁の事だと思うが、アレはアレで良いんだ

ｆｒｏｍ江東の虎

<<ミラーブラザー
<<ミラーシスター
禿同…私もアレは人間じゃないと思う

<<エッジ
私も貴方の嫁なのよ？

<<ちうたん
私も実を言えば常識→非常識＝いつしか日常、の体験者だったり…
と言うより私の存在自体が非常識だって言われた事がある

ｆｒｏｍ月光

<<ミラーブラザー
<<エッジ
<<ドラグーン
クラスメートとか、一部教師が美味しそうで困るんだけど…食べて良い？

<<ちうたん
あのロボット、どうやって動いてんだろう…私も欲しい

ｆｒｏｍミラーブラザー

＜＜月光

自重しる！

ｆｒｏｍエッジ

＜＜月光

自重しる！

ｆｒｏｍドラグーン

＜＜月光

自重しる！

ｆｒｏｍ月光

ぬるぽ

ｆｒｏｍミラーブラザー

＜＜月光

ガッ！

ｆｒｏｍミラーシスター

＜＜月光
ガッ！

ｆｒｏｍドラグーン
＜＜月光
ガッ！

ｆｒｏｍエッジ
＜＜月光
ガッ！

ｆｒｏｍ江東の虎
＜＜月光
ガッ！

……何だこれ。

ミラーブラザーにミラーシスター、エッジに江東の虎…お前らもしかしなくてもアレだろ！？
ネーミングセンス最悪だな…つか何でこのサイト知ってんだよ！？

ｆｒｏｍドラグーン

＜＜ちうたん
ググれば出て来る
ネーミングセンスはちうたんも同類な件について

＜＜ミラーブラザー
学校行ったキティは何してる？

…ってこら待てドラグーン。
お前今、私の考えを読まなかったか？
ネーミングセンスが最悪なのは自分でも知ってる！
つかキティって誰だよ！？

ｆｒｏｍミラーブラザー

＜＜ちうたん
雨を何て読ませるか、だよな？

＜＜ドラグーン
キティは真面目に授業受けてるぞ？
タカミチとかグラヒゲとか、目ぇひんむいて驚いてた

いや確かに、私の名前にある『雨』を『さめ』って読めば……待て、タカミチとグラヒゲ？
それって高畑先生と、神多羅木（かたらぎ）先生の事だよな？
って事は【キティ】ってウチのクラスの奴？

ｆｒｏｍドラグーン

＜＜ミラーブラザー
やっぱりか

＜＜ちうたん
『不死の子猫』って単語をラテン語にしてみようか。

誰だよそんな、ガキみたいなミドルネーム持ってるのは…不死の子猫のラテン語ってアタナシア・キティだよな？
アタナシア・キティ…アタナシア・キティ……ＡＴＨＡＮＡＳＩＡＫＩＴＴＹ…Ａ・Ｋ……げっ、アイツか！？
マジかよ、アイツサボり魔…いやそう言えば最近は真面目に……ヤベェ、頭痛がしてきた。

「…先生、気分が優れないので保健室行って来ます」

「無理そうなら早退して良いからな？」

ｆｒｏｍミラーブラザー

＜＜フレイムスクエア

ちうたんが気分悪いそうだ。

そっち行ったから、養護教諭として後を宜しく

ｆｒｏｍフレイムスクエア

＜＜ミラーブラザー

ちうたんって、ああ…あの子ね？

任せなさい

……養護教諭って、あの女だよな？

うわぁ…つかあの女まで私が『ちうたん』だって知って…フレイムスクエア？

とにかく、コイツらと知り合いとかマジで頭痛がしてきた。

私はどうなる？

いやマジでどうなってるんだ…この学園は。

１６時間目：ある少女の慟哭【自習】（後書き）

違和感があるが、どこがどうおかしいのか分からないまま投稿。
しかし彼女の書きやすさは異常（笑）

多くの作者様が彼女の救済を書いていらっしゃいますが、私がどうするかはまだ未定です。

１７時間目：知る者との邂逅（前書き）

半分以上は説明文となっています。
非常に長く読み辛いので、読み飛ばして頂いても構いません。
どの説明文に関しても、拙作を読み漁って頂ければ一通りの説明は出来る様に書いておりますので。

ではどうぞ。

※独自設定・独自解釈が入ります。

１７時間目：知る者との邂逅

―ピンポーン―

随分と人手の増えたその豪邸に、インターホンの音が響き渡ったのは…数日もすれば、もう３月にもなろうと言う…２月末の、とある日曜日の朝だった。

「はーい」

鳴らされた合図に応じ、ドアを開けて応対したのは…水色の髪をした、メイド服を着た美女だった。

「…どちら様でしょうか？」

「私の名前は超（ちゃお）　鈴音（りんしぇん）…涼輔君や綾子君のクラスメートだヨ」

「マスターのクラスメート…失礼致しました…私、この館に仕えるメイドで名をシモ・キュリシアイスと申します…マスターに何か御用でしょうか？」

超は狼狽した。

昨日までに調べ上げたデータの中に、この女性のデータは存在しなかった。

当然と言えば当然か…この女性を含む、とある１３人の女性は…主である涼輔の厳命で、普段は屋敷に詰めているのだから。

「涼輔君に相談が有って来たんだヨ」

「マスターにご相談、ですか？」

「そう…電話なんかじゃとても相談出来ない話ネ」

言った瞬間、超はその身に強烈な寒気を感じた。
感じた本人もその寒気を2月の風かと思ったが、そうではない…眼前の女性から冷気が放たれているのだ。

「……及第点、でしょうか」

「及第点？」

「ご無礼をお許し下さい超様、我々は綾子様の命により来訪者全員へ試練を課す事としておりまして…」

「綾子君が…どう言う事か説明して貰えるかナ？」

無礼にも程がある。
そう言いたかった超だが、その言葉はすんでのところで飲み込み…穏便な言葉を選んで発した。

言葉に棘が含まれているのは、状況が状況なだけに致し方ないだろう。

「あれ？　シモさん、お客さん？」

「あら神也さん」

そこへ現れたのは、キュルケを伴った神也だった。

「…キュルケと一緒と言う事は、貴方も関係者なのカ？」

「君は…超　鈴音……なるほど、そう言う事か…そうだね、僕も関係者だ」

超は顔色を変えずに警戒を強めた。

何故なら眼前の、神也と名乗った少年は…まだ名乗っていないはずの自分の名を、完璧な発音で姓名共に言い放ったから。

何より少年からは、その外見に不相応な…強大な威圧感が放たれていたから。

「…シモさん、彼女は合格？」

「及第点です」

及第点。

それは先ほどシモの口から出た言葉。

シモは試練がどうのと言っていたが…

「凍刃十連撃（とうじんじゅうれんげき）による急襲で、被弾率３割と言ったところでしょうか…獅子戦吼（ししせんこう）単発だと初見で躱されます」

「へえ、凄いじゃないですか」

凍刃十連撃。

その四肢に凄まじい凍気を宿して叩き込む、近接打撃の１０連打で…最後の一撃は回転運動から獅子を象る氷属性の闘気を叩き付け、

相手を吹き飛ばしてしまう。

この、回転運動から獅子を象る闘気を叩き付ける技を単体で『獅子戦吼』と呼ぶ。

「ちなみに…タツさんと組んだら？」

「タツさんとでしたら凍刃十連撃からの獅吼爆炎陣（ししこうばくえんじん）で消し炭かと」

超は冷や汗を流した。

先ほどからシモと神也の間でなされているやり取りは、自分に対する戦力評価である事が分かった。

その結果、このシモ単身が放つ『獅子戦吼』と言う技なら初見でかわせるが『凍刃十連撃』なら3割被弾…そこへタツと言う人物が加わり『獅吼爆炎陣』と連携されると消し炭、つまり被弾率１０割で即死と言う。

ちなみに獅吼爆炎陣とは、獅子戦吼で吹き飛ばした所へ跳躍しつつ接近…落下に合わせて爆炎を放ち、相手を攻撃する火属性の奥義である。

「なるほど……で？　超さんは何の相談かな？　祭の件、あるいは僕達（イレギュラー）の事かな？」

「ッ！？」

超はまた、顔色を変えずに警戒を強めた。

見透かされている。
自分が祭の日に行う大事も、相手の事を知る為に来た事も。
「まぁ立ち話も何だから上がってよ…全員居るし、お茶ぐらいなら出すから」
言って神也は超を屋敷内へ招き入れた。
キュルケを伴い先を行く神也の後に、警戒を隠さないまま続く超。
彼女は思った。
時期尚早だったかと。
「みんな、お客さんだよ」
やがて通されたのは、居間とは呼べぬほど広い居間。
そこに見知ったクラスメート…涼輔・綾子・刃・神蓮・蘭里・ルナ・セイラの姿があった。
涼輔の周りには、外見こそ違うものの…雰囲気はシモと良くにた美少女・美女が１３人控え、涼輔本人の横に綾子が座っている。
刃は蘭里を抱き枕に神蓮の膝枕で横になっており、ルナとセイラは向かい合って紅茶を飲んでいる。
そこへ合流し、自分の分の紅茶を淹れて飲み始めるキュルケ。
「こちらは超　鈴音…互いに詳細な自己紹介は要らないよね？」
神也の声で刃は体を起こし、超を見て一瞬だが目を見開いた。
これは涼輔と綾子も同じ反応だ。

「8人は良いガ…私は君の事を紹介されていないヨ」

そんな中、超は初めてここでまともに口を開く事が出来た。
確かに涼輔達8人（キュルケ含む）のクラスメートに紹介は要らないが、神也本人の紹介はされていない。
誰がどうやって紹介しようかと悩み始めた、その時だった。

「少し相談があるんだが…」

そんな声が聞こえ、居間の端に置いてある水晶玉が淡い光を発する。
そして次の瞬間そこには、涼輔達と…そして超自身のクラスメートでもある真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが楽しそうな笑みを浮かべて立っていた。

「エヴァンジェリン…？」

「む？　超か？　何故こんな所にいる？」

「それはこっちの台詞ネ、エヴァンジェリンこそ何故ここに居ル？」

「…そう言えばこの2人は知り合いだったっけ、茶々丸絡みで」

神也の言葉にうむと頷くエヴァ。

茶々丸。
世間名を『絡繰（からくり）　茶々丸（ちゃちゃまる）』と言う。
実に整ったプロポーションを持つが、その実態は超がとある目的の為に作り出したロボットである。

工学だけではなく魔法も併用して開発された人型ロボットであり、工学の部分は超と協力者…魔法部分の知識はエヴァが提供している。その工学技術は明らかなオーバーテクノロジーであり、涼輔達が存在する時間軸にはおよそ実現不可能な物である。

動力部分に魔力を使用し、その他の部分（量子コンピュータ・人工知能・駆動系）などは全て科学で成り立っている。エヴァが作成した他の人形たちとは違い、魂を吹き込まれたわけではなくプログラムで成り立っているらしい。

製作に携わった超の協力者は『ＡＩシステムの基礎はＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）ゆずり』とも発言しているが、その割に学業成績は低いほうである。

完成当初は外部電源で動作していたが、現在の動力は魔法の力とゼンマイであり…後頭部には着脱式のゼンマイ巻きの取っ手が付いている。

ただしゼンマイを巻く作業は巻かれる相手からの魔力供給の儀式の側面が強く、魔力を持つ人間が巻かないとあまり意味はない（ミニステル・マギへの魔力供給に相当し、茶々丸も同様の感覚を覚えるらしい）。

ボディは球体関節人形のようで、お茶汲み人形がモチーフらしく茶道が得意。

頭髪が放熱機構を兼ねているため、アップにすると熱暴走の危険がある。

戦闘に関しては格闘技から大型銃器の扱いまでこなす。

格闘技に関しては、古菲も唸る腕前。

飲食も可能だがフェイク（人間のまね）であり、食物からエネルギーを摂取しているわけではない。
嫌いなものは特にないとされているが、ゼンマイの巻きすぎは嫌がるようである（理由として、魔力流入によって人間で言う性的な快感を得てしまう為）。

ボディは作業効率優先の為に、女性素体として起伏が比較的少ない。分類的には貧乳の後半から美乳の前半程度。
ちなみにそのバストサイズで神也が拒絶反応を起こさないのは、彼女の体が人工物であると言う意識と見解がある為である。

「…何故、神也がその事を知ってるネ？　その事を知ってるのは学園でも極一部のはずだヨ」

「それこそ、超さんが知りたい事の一端でもあるんですよ」

「……どう言う事かナ？」

「学園最高の頭脳の異名をとる超さんなら、ここが『平行世界である』の一言で全てに結論が出ると思うんです」

「…まさカ！？」

その大元となる史実である“正史”に対し、その正史を元にして作られた史実を外史と呼ぶ。
外史は、その外史の存在を願う者の願いの力を糧に『大いなる意思』が願われた外史を作り出す。

当然、外史は願いの数だけ存在し…同じような外史であっても様々な可能性で、その未来は無限に分岐している。

「この、可能性で無限に分岐した一つ一つの外史を平行世界…あるいはパラレルワールドと呼びます」

「願いを具象化した世界…平行世界、パラレルワールド…」

「これは私の父の持論ですが…」

この世界はその瞬間から未来に向け、微々たる選択の違いにより様々な結果(みらい)を生む可能性を孕んでいる。

例えば綾子が今、昼食の味噌汁を飲むか飲まないか…あるいはその味噌汁を残すか完食するか…そんな小さな差異で、未来は必ず変わる。

もちろんその選択を行なった綾子には認識出来る事は無い。

…また、その【選択】を行なった…例えば味噌汁を【残す結果を選んだ綾子】と【完食する結果を選んだ綾子】は…互いが互いを認識出来ないだけで存在し、それぞれが【世界】として…例えば今この瞬間の綾子の世界をプラスマイナス0とするなら、マイナス1の綾子の世界や…プラス1の綾子の世界だって存在する。

「…この考え方と説を父曰く【平行異世界】と呼ぶんだそうです…そしてその“マイナス1の私の世界”や“プラス1の世界の私”は、お互いどころか自分の生まれる要因となった“プラスマイナス0の私”すら認識出来ません…出来るのは、神也さんの言葉を借りるならその『大いなる意思』のみです」

「そして正史…綾子さんを例にすれば“プラスマイナス０の綾子さんが存在する世界”が、その世界たる為に求める事象がある限り…その事象へ至る、原因となるイベントは必ず…“マイナス１の綾子さんの世界”や“プラス１の綾子さんの世界”でも、“プラスマイナス０の綾子さんが存在する世界”での事象に近い形で発生します」

それぞれの平行世界は元となった世界、つまるところの正史の流れに収束しやすい性質があり…結末に至るまでに、起こる事象は大概発生する。

「……だから超が過去へ渡るのも、茶々丸が造られたのも…エヴァが真相（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼になったのも、全てはこの世界に望まれて起こった…あるいは起こされたイベントって訳さ」

超は自分の過去を振り返り、そしてある意味納得をした。

何故なら自分が居た世界で、過去へ戻って過去を変え…未来を変えるようアドバイスを出したのが、他ならぬエヴァ自身だったから。

彼女は真相（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼であるが為に不老不死。

だからこそ超が生まれるその時も生きていたのだ…今と全く変わらぬ外見で。

「俺は妙な縁でその『大いなる意思』と知り合いだが、アイツは自分の事を『外史の管理者』と呼んでたな」

言う刃の脳裏によぎる、外見はアレだが根は良い男２人…いや、漢…もとい、漢女２人。

いずれも“女”の形容詞がとても相応しくないが、管理者に足る凄まじい実力を持っていた。

「普通なら、と言う事ハ…普通ではない経緯があれバ、その外史の個々が別の外史の個々を認識出来ル…と言う事かナ？」

「そう、例えばその外史の元となった正史に魔法があったり…例えばその外史の元となった正史で『時間跳躍』が技術体系として確立されていたり」

超にはそのどちらも思い当たる点があった。
超が存在した世界は魔法があり、そして科学も進んでいた為に時間跳躍も行おうと思えば行える世界だった。

「そして平行世界は無限の可能性によって分岐していますが、分岐の方向はその名の通り平行なんです」

言って神也は取り出したノートの1ページに、とある図を書き始めた。
その図はまるで葉を茂らせる大樹のように…あるいは地中へと成長を続ける木の根のようにも見える。

「これハ…進行時間樹形図（ツリーダイアグラム）かナ？」

「流石は学園最高の頭脳、話が早くて助かります……さてこの進行（ツリー）時間樹形図（ダイアグラム）ですが、なにもこの世界にのみ通用する単語ではありません」

「起点がどこか、によって最終的な図柄は変わりますが…外史の数だけ進行時間樹形図（ツリーダイアグラム）は存在します」

「つまりそれぞれ分岐点こそ、管理者以外は認識出来ぬ個々の外史

と言う事カ」

「そしてこの外史…いえ進行時間樹形図（ツリーダイアグラム）ですが、実を言えばごく稀に別の外史の進行時間樹形図（ツリーダイアグラム）と点で交わる事がありまして」

「…」

全ては偶然かはたまた必然か、それは誰にも説明できない。
何故ならそれらには結果だけが残るからである。

「例えば自世界において、新しい魔法を開発して試射した…例えば自世界において、試薬を作って自身で臨床試験を行った…例えば自世界において、知り合いだった管理者の力が暴走した…例えば自世界において、自らが撃った魔法が暴発した」

「「「……」」」

ちなみに…

『新しい魔法を開発して試射した』は涼輔・綾子が。
『試薬を作って自身で臨床試験を行った』はルナ・セイラが。
『知り合いだった管理者の力が暴走した』は刃・神蓮・蘭里が。
『自らが撃った魔法が暴発した』は神也・キュルケが。

…それぞれ麻帆良への時空間転移を行うに至ったきっかけである。

「そして例えば自世界において、過去を変えるべく時間跳躍を試みた」

「…」

「どれが最終的な起因事象かは分かりません…ですが無数の可能性の元、涼輔さん・刃さん・ルナさん・僕…そして超さん、貴女の世界が交わったのです」

神也はそこで一度言葉を区切り、向かいのソファに座る超の顔を見つめる。

超は目を閉じており、これまでの話を頭の中で整理しているようだ。

「余談ですが、僕達が麻帆良(このせかい)へ来る事もあれば…逆に超さんが別世界(ぼくたちのせかい)へ来ていた可能性も一概には否定できません」

「つまり私が『プラスマイナス０の涼輔さんが居る世界』や『プラスマイナス０の刃が居る世界』等へ行っていた可能性も否定できない、ト？」

「まあ各々の世界の個々は、自分がプラスいくつとかマイナスいくつだとかは決して認識出来ませんが」

「…と言う事はダ、この世界は“私の知る過去を持つ世界”だが…同時に“私の知らない未来を含んだ世界”でもあると言う事なのカ？」

「超さんが正しく未来人であるなら、そうですね」

神也に言われて超は頭を抱え込んだ。

当然だろう…自身の知らない未来を含んだ可能性を持つ世界へとやって来た事が、他でもない別時間軸の異世界から来た人間に断言されたのだから。

だが同時に希望も湧いてきた。

つまり“自分が望む未来”とは『ある結果を望み、それを経た未来』の事であり、これからの行いによっては自身でそのを辿る…あるいは『ある結果を望み、それを経た未来』以上の、すなわち『ある結果を望み、それ以上の結果を経た未来』にする事も出来るのだから。

「…ここが、私の知る歴史を辿らない可能性を含んだ世界だと言う事は分かったガ…もう1つ疑問があるヨ」

「…何故僕が、初対面であるハズの貴女を知っているか…ですね？」

「そうだヨ」

「……じゃあとある物語を読んだ人の想いが具象化した世界があるとしましょう」

とある物語を“正史”とするのに対して…読んだ人の想いが具象化した世界、つまり“外史”が存在すると言うのは先述の通り。だがその外史の根本構造…言わば脚本を作るのは一個人の想いであり、それを別視点で見るのもまた一個人であるゆえに見解の相違が起こる。

「いわゆる二次創作の理論かナ？」

「そうです…例えば、C氏が書いた脚本を読んだB氏が『あの時あそこでアイツが何々をしていればよかったのに』と言えば当然A氏から『いやアイツはあそこで何々をすべきじゃないんだ』と言う意見も出ます」

このB氏が、C氏の書いた脚本の当該部分を認めず…その部分を、B氏にとって都合の良い形式に改ざんした脚本を書き…B氏改編の

新脚本【C′（シーダッシュ）】が出来る。
C′（シーダッシュ）を自分で読んだB氏は当然その出来に納得するが、今度はD氏がその脚本じゃダメだと言い…今度はC′（シーダッシュ）を改編し【C″（シーダブルダッシュ）】を書き上げる。

「書きあがったC′（シーダッシュ）やC″（シーダブルダッシュ）は当然、読む人の想いを受けて外史として具象化します」

「もちろん外史なので原作者のC氏が書いた原作、つまり正史の中の人物はC′（シーダッシュ）やC″（シーダブルダッシュ）を認識・理解出来ません」

「無論C′（シーダッシュ）やC″（シーダブルダッシュ）の中の人物は、自身が外史の存在である事や正史の存在を認識・理解出来ないのだネ？」

「その通りです」

さてここに『大戦で英雄として名を馳せた男を父に持つ少年が、父のような立派な存在になるべく異国から来訪…訪れた地で様々な事象を経験しながら成長していく物語』を正史とする世界がある。
その世界は正史もそうだが、その正史を読んだ人間の中で無数の想いを生んでそれぞれが外史として派生していく。

「…その正史、どこかで聞いたような話だネ」

「まあまあ…で、この正史ですが…僕の居た世界ではマンガとして伝わっています」

「マンガ…あの『金田一〇年の事件簿』とか『エア・〇ア』とかマンガの事かナ？」

「そうです、そのマンガです……そしてその正史（マンガ）を読んだ人間の想いは、そのマンガを正史とした外史（にじそうさく）を生みます」

英雄であった父の背中を追う少年が、ある時に経るはずだったイベントを経ない世界である外史。
はたまたある時には経ていないイベントを、正史とは違う別のタイミングで経る外史。
極めつけは少年が、そもそも父の背中を追わない外史…などなど。

「……」

「もう感付いているかと思いますが、この麻帆良と言う土地を舞台にした物語があるんですが…僕の居た世界では有名なマンガとして伝わってまして」

「……つまり、私は想いで作り出された存在だト？」

「ええ、決して理解出来ないでしょうけど」

超は愕然とした。
まさか自身の知る過去で起こったとある事件、その事件の際にある人物が発したのと同じような言葉を…その事件より以前の時間軸で聞く事になろうとは。

「（あの時、自分達が『魔法世界人は魔法世界の消滅と共に消え去る【幻想】である』と言われた魔法世界人はこんな心境だったのカ）」

「…あ、ちなみにこの世界に【ゼロの使い魔】と言う物語はありますか？」

そんな事を考える超に対し、ごく真面目な表情で質問を投げかける神也。
『【ゼロの使い魔】と言う物語はあるか』と言う質問だが…
「…あるヨ、読んだ事は無いけド」
「僕の後ろにいる女性、キュルケさんですけど…彼女、実は【ゼロの使い魔】の外史の人間です」
言って神也はキュルケに抱きついた。
キュルケは飛びついてきた神也を優しく抱きしめ、熱い抱擁を交わす。
「…何ト」
この世界にも当然、マンガや小説…アニメやゲームと言ったメディア媒体は多々存在する。
もちろん【ゼロの使い魔】と言う物語も小説の形態で存在する。
超は読んだ事が無かったが、件の協力者が茶々丸開発の合間に読んでいた記憶がある。
「俺の横にいる神蓮も【真・恋姫†無双】の外史の人間さ…まあ言っても外史の外史、だけどな」
神也を見ながらそんな事を言い放つ刃。
超は驚きの表情で神蓮を見つめた。
「【真・恋姫†無双】は私も知ってるヨ…三国志を元に作られた、著名な武将全員が女性と言う世界へ入り込んだ男の軌跡を描くシュ

ミレーションゲームだよネ」
超は【真・恋姫†無双】のみならず全恋姫シリーズのプレイ経験があった。
特に好きなのは呉ルートで、物語半ばで孫策が…物語終盤で周瑜が死亡退場した際は涙をのんだそうだ。

「そう、それ」

「……ム？　もしやとは思っていたガ、神蓮は呉の孫策の血縁者かナ？」

「孫策は私の娘よ」

言って神蓮は刃に抱きつき、まるで己をアピールするかのように口を開いた。

「私の本名は姓を孫、名を堅、字を文台って言うの」

「孫堅！？　あの、江東の虎の異名を持つ呉の武将！？　確か本編開始前に、劉表配下の武将である黄祖に討たれているのでは無かったかナ？」

「だから外史の外史なのさ」

刃は言う。
最初に神蓮と出会ったその瞬間こそ、孫堅が黄祖に討たれて死ぬ直前であり…自分が救ったと。

「…確かに死なせるには惜しいネ」

「その流れで周瑜も救った…まあ周瑜の場合は、周瑜は病で早期逝去するって事が分かってたからだけど」

「つまり刃の居た外史では、孫堅を含む全呉将が生存しているのカ？」

「そうよ？　刃の巨乳好きが功を奏した結果だけど」

その豊かな胸を刃に押し当てつつ、やや紅潮した顔でそう言う神蓮。刃の体によって押しつぶされ、むにゅむにゅと形を変える神蓮の胸を見て超は何故か物悲しくなった。

超のスリーサイズは上から７７／５６／７８。
バストはエヴァより１０ｃｍも大きいが、神蓮級に大きな胸を見てしまうとその“１０ｃｍの優越感”すら消し飛んでしまう。

同じクラスで一番の巨乳である『那波（なば）　千鶴（ちづる）』はトップバスト９４を誇る巨乳だが、神蓮のトップバストは目測で９２…那波に追随する大きさを持っている。
無論、神蓮とは逆サイドで刃にしがみ付いている蘭里（トップバスト１１０）を見れば那波すら及ばない事は一目瞭然だったが。

「しかし、眼前の人物があの孫堅だとは到底信じられないネ」

「まあ孫堅と言っても正史の孫堅（わたし）は男らしいし…外史の外史と言っても、私は私だから関係ないけど」

「私は私、カ…なるほド」

神蓮の言葉に一理あると感じた超。
私は私…確かにその通りだと。
「（ならば尚更、私が私である為にも協力を取り付けたいネ）」
眼前であってもお構いなしにイチャつき始める刃と神蓮。
そんな彼らを見ながら、決意を新たにする超であった。

１７時間目：知る者との邂逅（後書き）

超の口調が安定しない。
特に、句読点とか『…』の直前とか。
これが原作を読んでいない場合の欠点か…。

次回、薬味登場の予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9755y/

魔法先生ネギま!〜麻帆良騒乱物語〜

2012年1月13日02時50分発行